

東洋通史

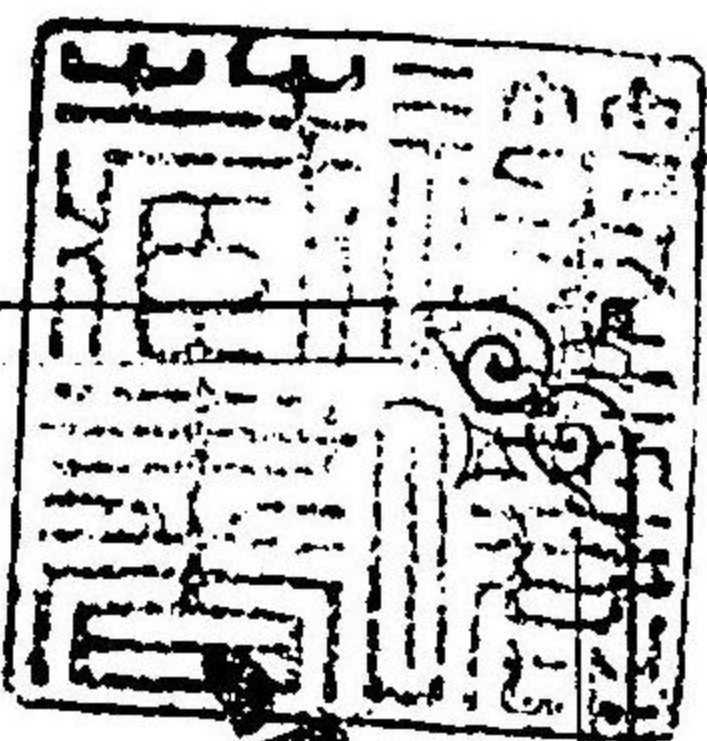
第九卷

9

220

KU745t

S



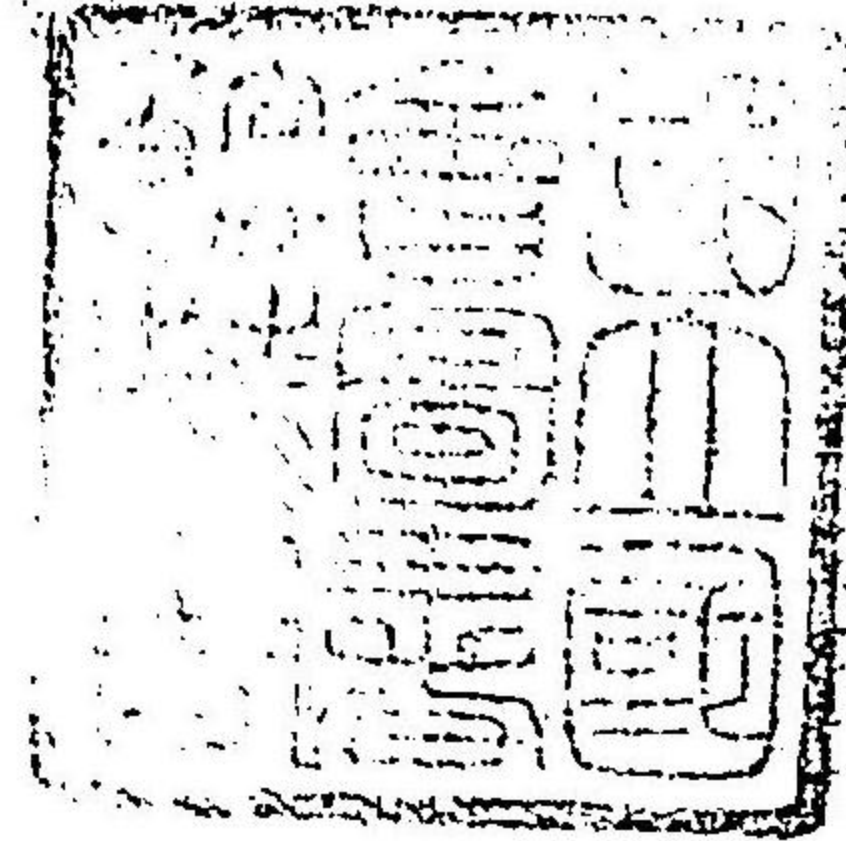
文學士久保天隨著

東洋通史

第九卷

東京博文館藏版

220, Ku 745t



東洋通史 分本第九卷 目次

第三篇 近古期 蒙古優勢時代

(三) 蒙古の勃興

第二八章 蒙古の起原……………	一一三五頁
第二九章 蒙古の四隣經略(上)……………	一一四一
第三〇章 蒙古の四隣經略(下)……………	一一五七
第三一章 成吉思汗の即位と征金の師……………	一一六八
第三二章 西遼の滅亡と中央亞細亞の形勢……………	一一七九
第三三章 成吉思汗の西征(上)……………	一一八九
第三四章 成吉思汗の西征(下)……………	一二〇四
第三五章 宋金夏三國の均衡……………	一二一五
第三六章 夏の滅亡……………	一二三一

目次

32841

(四) 蒙古の隆昌

第三七章 金の滅亡……………一二二七

第三八章 宋元の争端……………一二三九

第三九章 高麗の形勢……………一二四三

第四〇章 拔都の歐洲經略……………一二四八

第四一章 太宗崩後汗位の繼承……………一二六二

第四二章 忽必烈の南侵……………一二六七

第四三章 旭烈兀の西征……………一二七一

第四四章 憲宗の出師と世祖の即位……………一二八〇

第四五章 宋の滅亡(上)……………一二八九

第四六章 宋の滅亡(下)……………一二九九

第四七章 崖山の戦と宋の遺臣……………一三〇八

第四八章 元兵日本の敗……………一三二四

第四九章 東南亞細亞の征伐……………一三三三

(五) 元室の治世

第五〇章 蒙古の極盛と東西の交通……………一三四二

第五一章 海都の離叛と諸汗國の向背……………一三四八

第五二章 世祖の内治及び財務……………一三五九

第五三章 元室の衰微(上)……………一三六五

第五四章 元室の衰微(下)……………一三七二

(六) 宋元間の人文

第五五章 學術……………一三八五

第五六章 宗教……………一四一一

第五七章 技藝……………一四一八

第五八章 社會事態の一斑……………一四二四

第九卷目次終

東洋通史 略目次

下 卷			中 卷			上 卷					
第十二册	第十一册	第十册	第九册	第八册	第七册	第六册	第五册	第四册	第三册	第二册	第一册
歐人東漸時代			蒙古優勢時代			漢族繁榮時代			漢族生育時代		
……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……
清	清	明	蒙古	宋	唐・五代	隋・唐	東晉・南北朝	後漢・三國・西晉	前漢	戰國より楚漢に至る	太古より春秋の終に至る

注 意

この巻中に載する蒙古の人名地名等は、重要なるものに限りて、發音の假名を附す。恐るゝところ、體裁の冗雜に在ればなり。他は皆類推すべし。又索引に於て、或は別に一表を製し、詳細に踏書に見ゆる異同を互校考證して、その闕を補ふことあるべし。

(三) 蒙古の勃興

第二十八章 蒙古の起原

蒙古勃興の年

漢族の宋とツングス族の金との争闘殆んど百年の久しきに亘り、征伐戦争に疲れたるの極兩者相並んで漸く衰頽に趁き、最後に於ける兩國大交渉の結果、宋の寧宗、韓侂胄の首を函して、金に謝せし時に際し、蒙古族はじめて強し。然れども、蒙古の史上に顯はれしは、これより七十餘年前、宋の高宗紹興五年に在り。傳へて云ふ、金の始めて起るや、常に兵を蒙古に假りしが、國を得るに及びて、元約を償はず、遂に怨言あり。金の熙宗位に即くや、萬戸呼沙呼に命じて、兵に將として、之を撃たしめしが、その後、數ば鳥珠の兵を窘しめしに由り、西平河以北の二十七圍塞を削き、その部長鄂羅貝勒を冊して、蒙輔國王となせしも、之を受けず、却つて自ら大蒙古國と號し、因つて姑らく金と和し、徐に南侵の機を待ちしこと、かつて前に述べたるが如し。

蒙古の義たるや、詳かならず。舊説に因れば、遼は鐵鐵の義たるが故に、女眞は之

蒙古の祖先

に抗せむが爲に國を金と號し、その後起りしもの、又金に抗せむが爲に、銀といひ、蒙古は即ち銀の義なりと稱すれども、揣測傳會、是に似て、實は非固より信ずべからず、その之を以て孱弱となし、魯鈍となすものに至りては、豈に自稱ならむや、蒙古の事、前史に見えずと雖も、唐には、蒙兀部といひ、又蒙骨斯といひ、その發音、皆蒙古に近しと雖も、その國人は、自ら稱して蒙兀爾といふ、後に帖木兒、中央亞細亞を略し、印度に及び、其國を號して莫臥兒といひしが如き、以て觀るべきなり、蓋し其族、夙に自ら稱せしものなり、蒙兀の先世、黑龍江の南岸に在り、即ち謂ゆる望建河の地、唐に及びて西南、克魯倫河、斡難河に徙りしもの、如し、蒙兀固より、文字なく、世系事跡、口に相傳述するのみ、史記の以て定論となすべきなしと雖も、今に存するもの、必ずしも、抹殺し去るべきに非ず、相傳ふ、古時、蒙兀他族と戰ひ、全軍覆滅、わづかに男女各二人を遺し、遁れて一山に入る、斗絶險巖、惟だ一逕、出入を通ずるのみ、而して、山中は、壤地寬平、水草茂美、乃ち牲畜輻重を携へて、往いて居り、その山を名づけて、阿兒格乃衰といふ、二男あり、一は腦古と名づけ、一は乞顔と名づく、乞顔の義は、奔瀑急流たり、その膂力、衆に邁れ、一往前なく、故に以て、名を稱す、乞顔の

後裔繁盛、之を稱して乞要特といふ、乞顔の變音は乞要、特は統類の詞なり、後世地狹く、人稠なるに及び、乃ち山を出てむことを謀る、而して、舊徑蕪塞、且つ艱險に苦しむ、繼いて、鐵礦を得たり、洞穴深邃、こゝに木を伐り、炭を熾にし、穴中に篝火し、七十羊を宰し、革を剖いて筒となし、風を鼓して火を助く、鐵石盡く、鎔け、衢路遂に闢く、後裔元旦に於て、鐵を爐に鍛え、君と宗親と、次第に之を捶し、著して典禮となすは、即ち此故なりといふ。

子孫 特赤那の

蒙兀の遺業、新に阿兒格乃衰の山を出づるや、その後人、最も著稱のものを、特赤那といふ、妻子甚だ多く、長妻を郭幹馬特兒といひ、必特赤干を生み、必特赤干、特馬徹を生み、特馬徹、乞楚蔑兒干を生み、乞楚蔑兒干、古津博郭羅爾を生み、古津博郭羅爾、也客爾敦を生み、也客爾敦、珊鎖赤を生み、珊鎖赤、哈里哈爾楚を生み、哈里哈爾楚、朵奔巴延を生む、朵奔巴延、幹難克魯倫、土拉三河發源の地、不兒罕哈勒敦に居る、婦は阿蘭郭幹、火魯拉思氏といふ、朵奔巴延、早く卒し、阿蘭郭幹、寡居して、孕む、夫の弟及び親族、その私あるを疑ふ、阿蘭郭幹曰く、天未だ曉ならざるのとき、白光あ

り、帳頂の孔中より入り、化して男子となり、與に同じく寝ぬ、故に孕むあり、と。且つ曰く、我もし寡居に耐えざれば、曷ぞ再醮せずして、この曖昧の事を爲さむや、これ蓋し天帝靈を降して、異人を生まむと欲するなり。信ぜざれば、請ふ、伺察數夕、以て我が言を證せよ、と。衆曰く、諾、と。黎明の時、果して見る、光ありて、帳に入り、片刻にして復た出づるを、衆疑乃ち釋く、すてにして、三子あり、其季を孛端察兒といふ、その後を孛兒只斤氏となす、孛兒只斤は、釋義、灰色の目睛、白光の神人と同じきを以てなり。

莫奴倫

孛端察兒、二子あり、長を布格といふ。布格の子は土敦邁寧、是を成吉思汗七世の祖となす。土敦邁寧、九子を生んで卒す。その妻、莫奴倫、亦た莫奴倫塔兒衰と稱す。その義力あるをいふ。諾賽兒吉及び黑山の地に居り、畜牧饒富、毎に山に登り、牲畜野に遍ねきを觀、顧みて、之を樂む。時に札刺亦兒部あり、克魯倫河の濱に居り、車を以て關となし、一千車ごとに一庫倫となし、ともに庫倫七十あり、常に衆を恃み、乞解と戰爭す。乞解は即ち契丹なり。乞解大軍を遣して至る、札刺亦兒人之を藐視し、河

海都

を隔て、招き、請ふ、河を過ぎて我が牲畜を取れといふ。然れども、乞解の軍盛なるを以て、筏を束ねて河を渡り、大に其衆を敗り、俘戮無算、敗衆あり、七十車を以て、老幼を載せ、逃れて莫奴倫の牧地に至り、飢困の餘、速都遜草の根を掘つて、食となす。是を以て、地に坎窩多し。莫奴倫、之を見て謂ふ、我が子の牧地、何を踐擾を得む、と。是を以て、爭鬭を致し、莫奴倫及び八子、皆害せられ、幼兒海都、匿れて免るを得、その後、族衆を率ゐて、札刺亦兒人を改め、取つて奴僕となし、後都を巴里忽眞土窟姆に遷す。蒙兀の北境たり。

哈不勒汗

海都、拜桑古兒を生み、拜桑古兒、托邁を生む。托邁九子あり、皆聰明武勇、後裔各支派となり、丁口蕃盛、その第二子、哈不勒汗、後を承く。哈不勒汗、威望甚だ盛にして、蒙兀全部を統轄す。この時は、じめて汗號あり、金主その名を聞き、召し至り、禮遇甚だ優、金人詭計多し、哈不勒汗、常に飲食毒に中らむことを恐れ、筵宴の時、毎に詞を沐浴に托して、席を離れ、食物を嘔吐し、乃ち復た席に入る。衆皆その飲啖人に過ぐるに驚く。一日酒に酔ひ、掌を鼓して、歡躍し、金主の鬚を埒す。廷臣その禮を失ふを怒る。金主怒らずして笑ふ。哈不勒汗、惶恐して罪を謝す。金主小過といひ、釋るして問

はず。仍つて、厚く贈つて歸らしむ。金の大臣謂ふ、この人を縱てば、將に邊患を爲さむ。と使を遣し、要して以て返らしむ。哈不勒汗悦はず、辭意強横、金主再び使を遣して、往かしむ。哈不勒汗、他に往いて、之を避く。使者歸つて、これと塗に遇ひ、挾んで入朝す。中途にして、その諸達(朋友)賽亦柱歹といふものに遇ひ、之に故を告ぐ。賽亦柱歹、彼の好意なきを謂ひ、因つて、良馬を贈り、間に乘じて、逸脱せしむ。夜に至る比、金使索を以て、其足を繫して、逸するを得ず。次日晝時はじめて間を得、疾く馳せて歸る。金使追うて至る。哈不勒汗の婦、蔑台火魯刺思氏、金使を自居の新帳に居らしむ。哈不勒汗、その婦及び部衆に告げて曰く、この輩を殺さざれば、我、難を免れず。汝等、我を助けざれば、我、先づ汝等を殺さむ。と乘諾して、金使を殺す。未だ幾ならずして、哈不勒汗病んで卒す。蒙古及び金の交渉は、この前後に至りて、愈よ複雑となりしに似たれど、兩國史乘の對照、甚だ明晰を缺いて、遂に詳にし難きを惜む。

也速該

哈不勒汗の六子、一母に出づ。母を呼阿忽郭翰翁吉拉特氏といふ。把兒壇把阿禿兒嗣ぐ。是を成吉思汗の祖となす。三子あり、季を也速該といふ。也速該の長妻、譚倫夫人、亦た譚倫額格と稱し、翁吉刺の分族幹勒忽訥特氏たり。四子を生む。長子は帖

木眞、即ち謂ゆる成吉思汗、次は朮赤、哈薩兒、三は哈準、四は帖木奇幹、赤斤、又子あり、別勒格台といふ。異母の出、人之を異視して、四子と等しからず。帖木眞の生、宋の高宗紹興二十五年に當る。後十二年を経て、也速該卒す。

第二十九章 蒙古の四鄰經略 (上)

帖木眞の生誕

はじめ、也速該、戰つて塔塔兒を破り、その酋帖木眞、兀格、庫魯不花を得、軍を回して、迭溫布兒、答克の地に駐る。適ま其妻鄂倫額格子を生む、手に凝血を握り、色、肝の如くして堅く、而目光あり、因つて名づけて帖木眞といひ、以て武功を志るすなり。各族皆之に畏服す。然れども、同族中、或は隱忌するものあり、帖木眞幼年より四十歳に至るまで、累りに危難に遭ふ。その國史、叙述甚だ略、復た時序に依つて事を記せず、その即位の後に至りて、はじめて備る。今下に大略を述ぶるに止む。也速該の時、その近傍の諸部を并せて、漸く強大なりしが、なほ服屬せざるもの甚だ多く、四境皆敵。その東には、興安嶺に接し、塔塔兒部あり、その北には、バイカル湖畔の秦亦赤兀部あり、その南には、沙漠を隔て、長城に接して、汪古部あり、西には、薛靈格

蒙古四境の諸部

河谷の蔑里吉部あり。蔑里吉部の北、ハイカル湖西には衛拉特部あり。その西方額兒的、石河の流域には吉里吉思部あり。古しへの黠戛斯あり。蔑里吉の南には克烈部あり。この兩部の西、吉里吉思部の南には乃蠻、奈曼部ありて、アルタイ山麓一帯の地を占有し、南は天山南路に散在せる輝和爾(畏吾兒)部即ち回鶻に接し、その西南は伊犁河岸の哈喇魯と隣接し、その勢最も強大なり。而して帖木眞の大業は、その端を四鄰の經略に發せり。

帖木眞の少時

帖木眞、十三歳にして、父の喪に遭ひ、乃ち幹難克魯倫、兩河間の地に居る。時に泰亦赤兀部族衆盛強、皆帖木眞の幼を欺き、而して、他族亦た多く叛いて之に従ふ。帖木眞の族人中、最も年長ものを脱端火兒眞といふ、亦た將に叛き去らむとす。帖木眞之を哀留すれども、從はず、遂に去つて復た顧みず。こゝに於て、帖木眞の母鄂倫額格、自ら禿克(鷹旗)を持し、衆を率ゐて叛者を追ひ、陣を列して戰ふ。乃ち多衆の還歸するあり。この役、察勒哈額不干、腦後矢に中つて死し、帖木眞之を哭す。この時、札只刺特部の長、札木哈色辰、又泰亦赤兀に附く。帖木眞、かつて泰亦赤兀に阨せら

れ、その掠むるところとなりしが、僅に免れて歸るを得しことあり。數年の久しき、艱險を屢遇し、漸く其勢を復し、部族來り歸するもの日に衆からむとす。こゝに於て、札木哈、泰亦赤兀等諸部と兵三萬を集め、備へざるに乗じて、來り攻めむとす。帖木眞、時に苔蘭巴勒朱思の地に在り、警を聞くや、亟かに所部を分ち、その衆を千人、百人、十人に分ち、十三古關となす。古關は、即ち庫倫、昔時游牧の部族、皆圍合して、一圍子を爲し、酋長は、圍子の中に居る。是を十三翼の軍となす。

十三翼の軍

帖木眞の軍、第一翼は、その母鄂倫額格、并に其族幹勒忽蘭人、二翼は、帖木眞及びその子弟從人、并に各族の子弟、三翼は、撤姆合準の後人、布拉柱把阿禿兒、又客拉亦特分族人あり。又阿苔兒斤人、將を木忽兒忽蘭といひ、又火魯刺思人、將を察魯哈といふ。四翼は、蘇兒嘎圖諾延の子、得林赤、並に其弟火力台及び博歹阿特人たり。五六翼は、莎兒哈禿月兒乞の子、薛徹別乞、并にその從兄弟、泰出及び札刺亦兒人、莎兒哈禿人たり。七翼は、渥禿助忽都、柴端乞及びその麾下たり。八翼は、蒙格乞顔の子、程克索特、及び其弟、皆成吉思汗の從兄弟たり。又巴牙兀特人、會を翁古兒といふ。九翼は、苔里台幹赤斤、及び捏坤太石の子、火察兒、族人達魯、并に都里刺特努古思、火兒罕、撤

哈夷特委神の諸部たり。十翼は、忽都刺哈汗の子、拙赤汗及びその従人たり。十一翼は、阿勒壇亦た忽都刺の子たり。十二翼は、答忽巴阿秃兒及び晃火攸特人速客特人たり。十三翼は、更都赤那烏魯克勒赤那の後、努古思人たり。すてにして、敵阿刺烏特秃刺烏特の二山を踰えて至り、答蘭巴勒朱思に戦ふ。帖木眞の軍、寡と雖も、而かも大に衆に勝つ。こゝに於て、兀魯特布魯特の二族、來り服す。戰地に近く、河あり、林木多し。帖木眞、令して七十の鏝を以て、俘虜を烹る。泰亦赤兀等の族、すてに敗れ、避けて林中に之いて、散居す。

朱里耶人

諸部の歸降

朱里耶人の居地、帖木眞と近く、一日皆出でて、獵し、烏者兒哲兒們の山に遇ひ、圍を設けて相値ふ。朱里耶人四百、糗糧鍋帳、給せざるを以て、すてに其半を歸す。帖木眞、堅く要して同宿し、次日再び獵し、すてに飲食を分與し、次日獵して、復た獸を驅つて、之に向はしめ、多く獲せしむ。朱里耶人之を感じ、私に相謂つて曰く、泰亦赤兀我等を薄待す。帖木眞、我と素より疏、乃ち是の如く我に厚うす、眞に人君の度なり、と。歸途稱頌して、已まず。その酋烏魯克把阿秃兒、遂に自ら所部を率ゐて來歸し、謂

へらく、我等の來る、夫なきの婦、主なきの馬、牧なきの牛羊の如し、然る所以のものは、我が舊主長母の子、我を虐害するに由るなり、故に棄て、來り從ふ、と。帖木眞曰く、我、熟寐すれば、汝、我が髪を挿して我を覺ませ、又我が顔に托して我を起せ、我當に力を悉し、以て汝を助くべし、と。然れども、その後、朱里耶人、叛き去り、諸酋仍つて殺され、その部終に涣散す。諸族亦た謂ふ、泰亦赤兀無道、帖木眞は、人に衣するに己の衣を以てし、人に乘するに己の馬を以てし、能く其衆を束ね、以て其下を撫す、皆相率ゐて附かむと欲す。速兒都思人鎖兒干失刺、かつて帖木眞を難に脱せしむ、その子赤老溫阿秃兒、亦速特人哲別と、本と泰亦赤兀の部長哈丹太石の子布答の麾下に在り、こゝに至りて、赤老溫來り附き、哲別は、泰亦赤兀すてに敗るゝに因り、山林中に遁れ、食を得るところなく、力乏しくして亦た降り、巴鄰の部長述兒哥圖額不干并に、その子約牙阿刺黑、すてに泰亦赤兀の酋阿忽朱把阿秃兒、塔兒忽台哈刺兒秃克を擒へて、將に來り獻せむとす。中道にして復た之を縱つて去らしめ、惟だ父子來歸し、札刺亦兒の分族朵朗吉部の長、朮只角兒海、亦た所部を率ゐて至り、朵朗古特、辛古特の地、皆帖木眞に歸す。

塔々兒と月兒斤

すでにして、金主丞相を遣して、塔塔兒の叛會摩勒蘇里徒を攻逐せむとす、帖木眞之を聞き、此に乗じて、前仇を復せむとし、幹難河より師を起し、月兒斤を招いて、來り助けしむ、待つこと六日にして、至らず、乃ち麾下を率ゐて、迎へ擊ち、渥勒佐に至り、摩勒蘇里徒を殺し、掠獲甚だ衆く、嬰兒銀搖車及び車中の金繡被を得たり、金の丞相、その功を獎し、帖木眞に授けて、察兀特忽里となす。なほ招討使といふが如し、月兒斤人事を以て、相悪しく、すでにして、攻め敗られ、遠く遁れ去る。この時、帖木眞年正に四十といふ。

克烈部の汪罕

秦亦赤兀部、すでに敗る。帖木眞の父也速該、克烈部會汪罕と交好く、常に其難を拯ひ、帖木眞亦た之を稱して父となす。はじめ、汪罕の祖默兒忽斯、二子あり、長は忽兒察忽思、不亦魯汗、次は古兒罕、忽兒察忽思、數子を生む、曰く、脱忽魯兒、即ち汪罕、曰く、額兒客哈爾、曰く、札罕不本、又別子數人あり。汪罕、父の卒後に於て、その弟及び同族弟兄數人を殺す。その叔古兒罕、來り攻むるや、兵敗れて國を失ひ、也速該に走る也。速該、古兒罕を逐うて、合申、即ち西夏の地に入り、汪罕國を復す。是を以て、德に感

乃蠻

じ、約して、諸達となす。汪罕の弟額爾客哈喇、汪罕が多く宗族を殺戮するを以て、避けて、乃蠻に之く。その會亦難赤汗亦難赤耶、兵を以て、汪罕を逐ふ。汪罕、三國を歴て、哈喇乞得に至り、前仇を棄て、古兒罕に依る。すでにして、帖木眞の益す盛強なるを聞き、乃ち東走す。途中、費用乏竭、わづかに五羊を遺し、其乳を飲み、駱駝の肉を養ひ、行いて、庫思古兒、渾爾に至る。帖木眞之を聞き、即ち秃該を遣して、之を迎致せしむ。汪罕飢困を以て、告ぐ。帖木眞、己の部をして、振給せしめ、この年、秋、河上、哈刺温、乞卜察勒の地に會宴し、重ねて、父子の盟好を訂す。冬、兵を合して、月兒斤を攻め、その翌年、帖木眞、霍拉思、布拉思の地に在り、兵を率ゐて、兀都亦特、蔑里吉を攻め、孟察の地に戰ひ、大に俘獲あり、悉く以て、汪罕に餽る。こゝに至り、汪罕の勢、漸く振ひ、帖木眞に謀らず、自ら所部を率ゐて、蔑里吉を不兀刺客、額兒に攻め、俘獲甚だ多く、而かも、獨り之を貪り、帖木眞に遺るところなし。蔑里吉の會托克塔、已兒克眞に走る。その翌、帖木眞、汪罕と兵を合して、乃蠻を攻む。乃蠻の主亦難赤汗、先つて卒し、三子あり、曰く、太陽汗、曰く、不亦魯黑干、太陽汗、名は、太亦布哈、金の封爵を受けて、大王となる。故に、大王汗といふ。蒙古人、訛して、太陽汗となす。乃蠻、古出魯黑、不亦魯里の

號あり。故に其弟を不亦魯黑汗といふ。昆弟交も悪しく、國を分つて治む。帖木真、不亦魯黑を征し、乞濕泐巴失の地に戦ひ、大に其衆に勝つ。不亦魯黑、侃侃助特に逃る。その將也迪土ト魯黑、一隊を率ゐて、前鋒となり、帖木真の軍に困逼せられ、避走して山に入る。而して馬鞍轉墜、兵至つて之を擒にす。この冬、不亦魯黑の將可克薛古撒卜刺黑、衆を率ゐて至り、拜荅刺黑、巴勒赤列の地に遇ふ。鋒はじめ、交つて、日すでに暮れ、各戦地に於て營を駐め、明日の戦を待つ。汪罕多く火を營に放ち、潛に其衆を移して他に徙る。札木塔、帖木真の軍に従ひ、天曉の時、汪罕の旗幟を望んで馳せ至り、之に謂つて曰く、汝、我が族人寒暑、棲を異にするの鳥の如きを知るか、將に他に適かむとす。我は白翎の久棲して去らざるが如く、我先づ曾て汝に告ぐるなり。と。汪罕麾下の宿將兀ト赤兒古鄰巴阿秃兒、聞いて之を斥けて曰く、すでに宗族たり。又諸達たり。かくの如く之を謂ふ、奚んぞ可ならむや。と。然れども、汪罕その言を信じて、引いて去る。こゝに於て、蔑里吉の會托克塔の二子忽圖赤思温、さきに執へられて汪罕に屬せしもの、機に乗じて叛き去り、歸つて、父に合す。帖木真、汪罕の謀らずして去りしを見、因つて曰く、我、今火坑中に在り、而して、汪罕、我を棄つ。と。亦

退いて撒里客額兒に至る。汪罕、塔塔兒、土霍勒の地に至り、伊勒哈、鮮昆、札罕、不同じく、也迭兒、阿爾泰の地に至る。その地、河あり、林中多し。可克薛古撒卜刺黑、後より追ひ及び、その眷屬輜重を奪ひ、又帖列秃、阿馬撒刺の地に至り、汪罕の部民畜牧を掠めて去る。鮮昆、札罕、奔つて、汪罕に告ぐ。汪罕、鮮昆をして、敵を追はしめ、又人をして援を帖木真に乞はしめて曰く、乃蠻、わが子を俘掠す、能く四良將を以て我を助けむか。と。帖木真、即ち博爾朮、諾延、木訶里、主王、孛兒忽勒、諾延、赤老温、把阿秃兒をして、往いて援けしむ。未だ至らずして、鮮昆、すでに敗績し、その將的斤、火里、亦土兒、干約塔に殺され、鮮昆の馬、傷いて幾んど擒にせられむとす。而して、四將至る。博爾朮の來る時に當つて、帖木真の良馬を乞ふ。赤乞布拉といふ。帖木真、之を允し、且つ戒めて曰く、これ鞭つべからず、もし速に行かむと欲せば、但だ鞭を以て其鬣を擦せよ。と。至る比、鮮昆馬を失ひしを見、亟かに己の騎を以て與へて乘らしめ、而して、自ら帖木真の馬に乗り、屢ば之を鞭てども、進まず、忽にして、帖木真の戒を憶ひ、鞭を揚げて鬣を擦せば、即ち疾駛すること電の如く、すでに、乃蠻を敗り、盡く奪ふところを返し、以て汪罕に還へす。汪罕大に悦び、帖木真に告げしめて曰く、さき

に衣食乏絶、而して我が子帖木眞之を拯ひ、我の餒を飽かしめ、我の裸を衣せ、今又我の難を亟にす。此の若くなれば、我知らず何を以て報となさむと。又博爾朮を召して往かしむ。時に博爾朮帖木眞の營に在り、弓を執つて、守衛し、弓を以て、人に付し、而して自ら往いて謁す。汪罕、魄るに衣一領、金樽十を以てす。博爾朮之を受け、歸つて成吉思汗を見、職守を離れしを以て、自ら罪を請ふ。帖木眞、その勞を獎し、餽を受けしむ。この冬、托克塔が復た巴兒古眞を出て、將に變を爲すを謀らむとするを聞くや、帖木眞、弟朮赤哈薩兒と共に議し、實信に非ざるを恐れ、且つその無能を料り、爲に姑らく之を置く。

次いで、帖木眞、汪罕と撒里客額兒に會す。時に托克塔すてに忽敦兒章を遣し、泰亦赤兀の酋益庫兀庫楚忽里兒把阿秃兒、忽都答兒、塔兒忽台、哈刺兒秃克等とともに、斡難河の沙漠中に會す。帖木眞、汪罕の兵と至り、之を敗り追うて、恩古特秃刺思の地に及び、塔兒忽台、忽都答兒を殺し、益庫兀庫楚忽敦兒章逃れて、巴兒古眞に入り、忽里兒、乃蠻に入る。哈答斤、撒兒助特の二部、本と帖木眞と協はず。泰亦赤兀

帖木眞及び汪罕の連和

汪罕部下の叛

に付き、すてにして、泰亦赤兀の滅亡を聞き、益す自ら安んぜず、乃ち朮兒奔塔塔兒、翁吉刺特の部と阿雷布拉克に會し、牛一、羊一、馬一を殺して誓をなし、將に兵を潜めて來り攻めむとす。帖木眞、之を聞き、汪罕と虎敦、渾爾より師を興し、捕魚兒、渾爾に至り、諸部と數戦し、卒に大に勝つ。この冬、汪罕、克魯倫河より忽入海牙部に往き、衆これに隨ふ。その弟札罕不、汪罕の將阿勒屯、阿速克、伊勒忽秃兒、伊兒晃火兒、忽勒巴爾と謀つて曰く、吾が兄汪罕、心性恒なく、多く骨肉を殺害し、追つて哈喇乞解に投ず。我輩其れ久しく之に依るべけむやと。阿勒屯、阿速克、その言を泄らす。汪罕、伊勒忽秃兒、伊兒晃火兒を執らへ、縛して帳下に至らしめ、先づ伊勒忽秃兒を責めて曰く、吾、唐古特より來る、中途何の語を作して、遽かに之に背くか。我、汝等と同じか。らざるなりと。その面に唾す。帳中の人、亦た共に之を唾す。阿勒屯、阿速克曰く、我、惟だ故主を棄つるを願はず、故に之を泄らすと。こゝに於て、札罕不、伊勒忽秃兒、伊兒晃火兒、納鄰、太石と、皆乃蠻に走り、先づ人を遣し、太陽汗に告げしめて曰く、阿勒屯、阿速克、吾が兄汪罕に讒す、故に我等來り奔る。願くは、心力を盡し、以て新主に事へむと。乃蠻之を受く。この冬、汪罕、忽入海牙部に駐まり、帖木眞は、金の界上察哈察兒

古兒汗

に駐まり、兵を率ゐて、蔑里吉の會阿刺兀都兒、泰亦赤兀の會哈罕、太石塔塔兒の二會、察忽兒、開兒伯克を攻む。この時、四會一處に聚合し、阿刺兀都兒之が長たり。帖木眞、蒼蘭捏木兒、格思に戰つて、之を敗る。朮赤、哈薩兒、未だ斯役に與らず、哲別が翁吉刺部、畔き去れりと言ひしを聞き、帖木眞に告げず、自ら所部を率ゐて往いて攻む。帖木眞、聞いて之を責む、翁吉刺、端なく兵を被りしを以て、怨となし、遂に札木哈に合す。その翌、翁吉刺、特亦乞刺思、火魯刺思、朮赤、塔塔兒、哈答斤、撒兒助特の諸部、刊河に會し、札木哈を立て、古兒汗となし、此より秃柱河に至り、足を擧げて、河岸を踰み、刀を揮つて、林木を斬り、而して營をなして曰く、孰か此謀を洩らす、土を頽すが如く、木を斷つが如しと。人あり之を帖木眞に告ぐ。帖木眞、即ち師を起して、亦提火兒罕の地に迎戰し、大に其衆を敗る。札木哈、遁れ、翁吉刺部來り降る。

その翌年、帖木眞、兀魯回失魯楚兒、只特河より師を率ゐて、察罕塔塔兒、按赤塔塔兒の二部を攻め、陣に臨んで、物を掠むるを禁止し、事畢るを俟つて、均分せむとす。阿勒壇、火察兒、答力台、幹赤斤、令に違ふ。帖木眞、虎必來、哲別をして、その掠むるところを奪はしめ、以て衆に分つ。三人是に由つて、恨を懷き、畔を思ふ。この年秋、乃蠻の

會不亦魯黑汗、蔑里吉の會托克塔別乞、撒兒助特の會阿忽出把阿秃兒、衛刺特の會忽都哈別乞、及び朮兒奔哈答斤の諸部、大に衆を合して來り攻む。帖木眞、汪罕と先づ人を貴亦の撒克徹兒、赤兒海に遣し、高に乗じて、瞭望し、自ら汪罕と兀魯回失魯楚兒、只特河を離れて、汪古部の地に向ひ、以て行々、哈刺溫、赤敦に近づく。汪罕の子鮮昆、邊外に在り、従つて後れ、行いて、山隘に及ぶ隘を踰めれば、即ち汪古部の界、而して、不亦魯黑、すてに至り、鮮昆の軍を見、その下に謂つて曰く、この衆、聚めて殲すべきなりと。阿忽出把阿秃兒、及び托克塔別乞の弟、忽都を遣して、前鋒となし、猶ほ未だ戰はず、而して、鮮昆の軍、すてに山隘を過ぎ、汪古部の地に至り、乃蠻等の軍之に従ひ、巫術を以て、風雪を致す。然れども、風反つて、雨雪を吹き、敵進む能はず、遂に山隘より退き、回行して、奎騰の地に至り、士馬僵陳、山澗に紛墜し、復た列を成すと能はず。札木哈、衆を率ゐて來り、應じ、事の敗れしを見、即ち掠むるや、諸部の先に己を立て、汗となせしもの、繼いで、乃ち帖木眞に附く。

帖木眞、汪罕と同じく、阿刺兒の地に駐る。冬、帖木眞、阿兒、卻宏哥兒の地に駐まる。

帖木眞、汪罕
と懇し

帖木眞、長子朮赤の爲に汪罕の女察兀兒別乞を求めむと欲し、鮮昆の子禿撒哈亦た帖木眞の女豁眞別乞を求めむと欲し、而かも兩つながら諧はず、是を以て、交漸く疏なり。札木哈之を知り、唆して變を生ぜしめむと欲し、鮮昆に謂つて曰く、我が兄諧達君の敵人太陽汗と潜かに使を通じて、往來し、將に君に利あらざらむとす。と阿勒壇火察兒答力台、これが證を爲す。又圖海、忽刺海、木忽兒、忽闌あり、俱に力を協せて、帖木眞を攻めむと欲す。時に鮮昆別に阿拉忒の地に居り、撒而罕禿蒼を遣して、汪罕に告げしめて曰く、鄂爾額格の子、將に我等を害せむとす、宜しく、その未だ發せざるに乗ずべきなり、而して先づ之を圖れ、と。汪罕曰く、札木哈の言、信ずべからず、と。日を越えて、帖木眞營を移し、居地稍や遠し、鮮昆又人をして、力めて、父に請はしめて謂ふ、耳の聰にして能く聽き、目明かにして能く視るの人、確鑿之を言ふ、而かも猶ほ信ぜず、是れ何を以ての故ぞ、と。汪罕曰く、彼屢ば我に德あり、我負くべからず、我屢ば汝に勸め、而かも、汝従はず、我が年老ひたり、但だ我が骸骨を安くして、一處に聚置せむと欲す。汝、汝の善を爲さむと欲せば、之が爲に天の汝を佑るを冀へ。汝、禱祀以て求むべきなり、と。言畢つて、甚だ以て憂となす。鮮昆陰かに人を

遣して、帖木眞の牧地の草を焼かしむ。その翌、鮮昆諸人と謀り、僞つて婚を許し、烏黑台昆察を遣し、特に帖木眞を邀へて、宴に赴かしむ。帖木眞、即ち往き、二人を從へ、路、蒙力克額赤格の居を經、その帳中に宿す。蒙力克謂ふ、往くべからず、宜しく、馬疲れて道遠きを以て、詞となし、使を遣して、代り往かしむべし、と。帖木眞之に従ひ、即ち自ら歸る。汪罕父子、謀成らず、備へざるに乗じて、掩襲せむと欲す。汪罕の臣哀客扯闌、歸つて其妻阿刺黑因特且に告げて曰く、この時、もし人あつて往いて告ぐれば、知らず、帖木眞、若何ぞ之に酬む、と。その妻、戒むるに、言を慎み、人をして聞いて、實となすこと、毋からしむるを以てす。適ま、牧人乞失力克、馬を送つて帳外に至り、この語を聞き、以てその侶巴歹に告ぐ。巴歹、往いて覘へば、哀客扯闌の子、巴鄰苦延帳外に在つて、箭鏃を礮ぎ、父母の語を聞いて曰く、汝等自ら機密の事を泄す、乃ち人を瘖啞となさむと欲するか、と。巴歹、乞失力克に告げて曰く、信なり、と。即ち夜に乗じて來り告ぐ。

冷闌眞額列特
の役

帖木眞、亟かに營を移し、失魯楚兒只特の地の山路に向つて去り、軍を卯溫都爾

の山後に分ち、汪罕の兵を瞭望し、卯盪都爾の路より紅柳林中の蒙兀に至る。烏蘭不見罕と稱す。伊兒吉歹の從者泰出欽黑歹、牙都兒、正に馬を牧し、敵の至るを見、亟かに馳せて帖木眞に告ぐ。時に哈蘭眞額列特に駐まり、日の出づるとき、倉卒戰事に備へ、衆寡敵せざるを慮り、諸將に謀る。烏魯特の將朮赤台、鞭を以て馬鬣を擦して言なく、忙兀特の將忽亦兒、奮然として先づ進まむことを請うて、謂へらく、當に敵の背に出づべく、我が旗を奎騰の山に樹てむ、不幸にして陣没すれば、三子の在るあり、惟だ我が主之を憐れめ、と、諸將亦た奮つて謂ふ、衆寡敵せずと雖も、或は天佑を邀ふるを得む、と、忽亦兒、答兒、前鋒となりて、先づ敗る。只兒斤部は、汪罕の部下の最勇卒たり、繼いて敗る。豁里失列門、太石、汪罕の大將たり、攻めて中軍に至る。鮮昆勇を奮つて來り戰ひ、矢その面を傷つく。汪罕乃ち兵を斂めて、戰を罷む。この役、帖木眞の一生有名の戰爭たり、蒙兀人、今に至りて、之を稱道す。哈蘭眞額特の地、金の國界に近し、然れども、汪罕の軍勢、仍ほ盛なり。帖木眞、敵せざるを見る、や、亟かに引き退く、退後部衆、渾散す。帖木眞、乃ち避けて、巴兒渚納に往く。この地、數小河あり、而して、この時、水涸れて流濁り、わづかに渾水を飲むべし。帖木眞、慷慨水を酌

んで從者と誓ふ。當日從者多きなし、之を稱して、巴兒渚特延といひ、賞、後世に及ぶ。すてにして、渙散の將士、漸く來りて、帖木眞に遇ひ、鄂爾河に至る。その衆を數へて、四千六百人を得、兩隊に分ち、哈勒哈河の兩岸に沿ひ、上流に溯つて行く。每隊二千三百人。帖木眞、自ら一隊を率ひ、彼岸の隊、無烏忙兀等の衆、行いて、翁吉刺特分部の會、帖兒阿蔑勒の駐地に及ぶ。

第三十章 蒙古の四鄰經略 (下)

帖木眞、諸將を責む

帖木眞の戰數ば敗れて、意を得ざるや、先づ理義を以て之を屈服せむとし、使を遣し、之に謂はしめて曰く、我等本と諳達たり。今もし相從へば、情好舊の如し、然らざれば、兵を以て相見む、と、こゝに於て、帖木格阿蔑勒、來り付く。帖木眞、遂に董噶渾爾、脫兒哈火魯罕に駐まる。此地、湖あり、河あり、水草茂美、因つて、士馬を休息し、阿兒海者溫を遣し、汪罕に謂はしめて曰く、我今、董格渾爾、脫兒哈火魯罕に駐まり、水草足れり、父汪罕、むかし汝の叔古兒罕、汝を責めて謂ふ、我が兄、忽兒察、忽思、不亦魯黑汗の位、我に與へず、而かも汝自ら之に據ると、汝又塔帖木兒、太石、不花帖木兒の二

弟を殺す。古兒罕、乃ち汝を逐うて、哈刺温哈卜察に至り、汝僅に數人を遣して相從へり。この時、汝を救ひしもの、何人ぞ、乃ち我が父なり。泰亦赤兀の兀都兒富延八哈、只だ二人、兵を率ゆる多きなし。汝、哈刺不花に往き、又士拉亶秃朗古特に往き、後に哈卜察爾に至り、而して、古蘇兒渾爾に至り、以て汝の叔古兒罕に遇ふ。その時、古兒罕、忽兒奔塔刺運特に在り、勢敗れて遁れ、僅に二三十人を餘し。此より合申に入つて復た返らず。我が父、古兒罕の國を奪うて、以て汝に復し、是に由つて、結んで諸達となし。我、遂に汝を尊んで父となす。これ汝に徳あるもの、一なり。再び、父汪罕、汝居を日入るの地に避け、中に隠没し、汝の弟札罕不察、富古特の地に在り。我、朝を擧げて、之を招き、大聲之を呼び、以て彼の來るを致し、彼來らむと欲して、蔑兒乞之に迫り、來るを得ざらしむ。我、我が兄弟をして、蔑兒乞の中より之を救はしめ、はじめ、て察富古特の地より來るを得たり、乃ち彼を救ふの人、旋つて殺さるゝの人となり。我、又汝の故を以て、我が兄弟二人を殺す。これを誰となす。薛徹別は我が兄、泰出勤は我が弟、これ汝に徳あるもの、二なり。再び、父汪罕、汝は雲中の日影緩々として升るが如く、火燄緩々として騰るが如く、來つて我に就く。我、半日に及ばずして、

汝をして食を得せしめ、一月に及ばずして汝をして衣を得せしむ。人、これ何を以ての故なるを問へば、汝宜しく告げて、木里察克速克兒に在り、大に蔑兒乞の輜重、牧群を掠め、悉く以て汝に與へしが故に、半日に及ばずして、飢者は飽き、一月に及ばずして、裸者は衣たりといふべし。これ汝に徳あるもの、三なり。曩に蔑兒乞、不兀刺客額兒に在り、我、人をして往いて、托克塔の虚實を覘はしむ。汝、機に乗ずべきを知り、我に告げずして、自ら兵を進め、忽秃黑台哈敦、察勒渾哈敦、並に其子忽圖老赤温を虜にして、その奥魯思を取り、而かも、絲毫の我に遺るなし。後、我とともに、乃曩を攻め、拜苔刺黑別勒赤兒の地に在り、忽圖赤老温、その部衆を率ゐ、汝を離れて去り、可克薛古撒卜刺黑、遂に汝の奥魯思を掠む。我、博爾朮木訶里孛兒忽勒赤老温をして、盡く之を奪つて歸り、以て汝に致さしむ。これ汝に徳あるもの、四なり。さきに、我等哈刺河の濱に在り、忽刺安必兒と答秃兀特に相近きの卓兒格兒痕山に、彼此約を明かにし、もし毒牙の蛇ありて、我が二人の中を經過すれば、我が二人必ず中傷するところとならず、必ず唇舌を以て互に相割訴し、未だ割訴せざるの先は、遽に離るべからず、今人あり、我が二人に於て、讒を構へ、汝並に未だ詢察せずし

て、即ち我に離るゝは何ぞや、再び又汪罕、我は鷲鳥の如く、赤兒古山より捕魚兒渾爾を越え、灰色藍色足の鶴を擒にして、汝に致す、この鶴を誰とかなす、朵兒奔塔塔兒の諸人、是なり、我又藍色の鷹の如く、古闌渾爾を越え、藍色足の鶴を擒にして、汝に致す、この鶴を誰とかなす、哈答斤撒兒助特翁吉刺特の諸人、是れなり、今汝乃ち彼に仗つて、我を驚畏するか、これ汝に徳あるもの、五なり、父汪罕、汝の我を遇する所以のものは、何ぞ、一も我の汝を遇する如くなるべき、汝何すれど、我を恐懼するか、汝何すれど、自ら安んぜざる、汝何ぞ汝の子女の婦をして、寤じて寢ぬるを得せしめざるか、我、汝の子となり、かつて未だ得るところの少を嫌ひて、更に其多き者を欲し、得るところの悪を嫌うて、更に其美なるものを欲せず、たとへば、車に二輪あるが如し、その一を去れば、牛行く能はず、車を道に遺せば、車中の物、將に盜の有とならむとす、車に牛に係くれば、牛こゝに困守し、將に餓斃に至らむとす、強いて、その行くを欲して、之を鞭箠すれば、牛亦た惟だ額を破り、頂を折き、跳躍して力盡さむのみ、我が二人を以て之に方ふるに、我は車の一輪に非ずや、と、凡そ是れ皆成吉思汗が汪罕に諭せし所以なり、又阿勒壇火察兒に謂はしめて曰く、汝二人、我を

疾惡す、將に仍ほ我を地上に留めむとするか、抑も我を地下に埋めむとするか、我かつて把兒壇把阿秃兒の子及び薛徹列乞泰出の二人に告ぐ、幹難河の地、詎ぞ主なかるべけむ、我、其主たるを勸むれども、従はず、我、汝火察兒、提坤太石の子たるに因り、汝に勸めて主たらしむ、而かも、亦た従はず、又汝阿勒壇、忽都刺哈汗の子たるに因り、汝に勸めて主たらしむ、而かも、又従はず、汝等必ず以て我に讓る、我、汝等の推戴せしを以ての故に、祖宗の土地を守り、先世の風俗を守つて、廢墜せしめざらむを欲す、我既に主となる、我が心必ず俘掠の營帳、牛馬、男女、丁口を以て、悉く汝に分ち、郊原の獸は、之を合圍し、以て汝に與へ、山藪の獸は、之を驅迫して、以て汝に向はしむるなり、今汝乃ち我を棄て、汪罕に従ふ、三河の地、我が祖實に興る、慎んで他人をして居らしむる母れ、と、又脱忽魯兒に告げしめて曰く、汝の祖は、我が祖に俘にせられて、奴僕たり、故に我、汝を稱して弟となす、汝の父の祖、塔塔は、扯勒黑領、昆都邁乃の虜にするところ、塔塔、雪也哥を生み、雪也哥、闊闐出黑兒思安を生み、闊闐出黑兒思安、也該兒脱合兒を生み、也該兒脱合兒は、汝を生む、汝、我の基業を得むと思ふも、阿勒壇火察兒、必ず汝に與せざるなり、在昔、汪罕、飲むところの青鍾馬乳

我、起くること早きを以て、亦た之を飲むを得たり。汝が輩、是に由つて、我を妬む。我今去らむ。汝が輩、飲の量を恣にせよ。汝能く幾何を飲むかと。又阿勒壇火察兒に謂つて曰く、汝二人、今我が父汪罕に従へば、始あつて終なきこと母れ、人をして、汝が向日爲せしところ、皆札兀特忽里の力たるを議せしむるなり。今もし人あり、我が故を以て我を痛くすれば、將來亦た人あつて汝の故を以て、必ず汝を痛くせむ。たとひ今歳汝等に及ばざるも、明冬將に汝等に及ばむとす。又汪罕に告げて曰く、請ふ阿勒屯阿速黑忽勒巴爾二人を遣して使となし、或は一人をして來らしめよ。むかし、戰時、木訶里把阿秃兒銀鞍轡の黒馬を失ふ、請ふ以て我に歸せ。鮮昆諸達、必勒格別乞脫端二人をして來らしめ、或は一人、札木哈諸達は、哈赤温阿赤里失命阿刺不花帶、阿勒壇火察兒亦各二人を遣し、然らざれば一人を遣せ。使人の來る、捕兒爾淖爾に在りて、我に遇ふべし。もし我他に適かば、哈潑哈兒哈答兒罕の路に在つて、我を尋ねべし。と。

鮮昆の兵備

使者すてに各詞を致す。汪罕曰く、彼の言、まことに理あり。誠に損を受くとなす。惟だ我が子鮮昆、以て彼に答ふるあるべし。と。鮮昆曰く、彼、我を稱して諸達となし、

而かも、又常に我を罵り、我が父を稱して父となし、而かも、又我を罵り、好んで人の老を殺すものとなす。今日使遣る能はず、惟だ一戰あるのみ。我勝てば彼を併せ、彼勝てば我を併せむのみ。と、即ち必勒克別乞脫端をして、旗を建て、鼓を鳴らし、馬に秣うて待たしむ。

汪罕父子の死

帖木眞、すてに使を遣し、即ち部衆を率ゐて、巴兒渚納に往く。時に乞刺思人孛徒といふものあり、火魯刺思人に逐はれ、敗奔して來り合す。朮赤、哈撒兒、先に哈刺温赤敦山に別居し、汪罕に襲掠せられ、妻子皆失し、途中糧絶え、死獸を以て食となし、尋いて巴兒渚納に至りて、はじめに帖木眞に遇ふ。汪罕、哈蘭眞の戰より後、起特忽魯哈特額列特に駐まる。その下、之を害せむことを謀る。事覺はる。汪罕、先づ之を捕ふ。こゝに於て、答力台幹赤斤渾八鄰、撒哈夷特部、呼眞部と、來つて帖木眞に歸し、阿勒壇者温火察兒別乞忽都呼特札木哈は、乃蠻の太陽汗に奔る。この年秋、帖木眞、巴爾渚納より師を起し、幹難河より汪罕を攻めむとす。哈里兀答兒察兀兒罕、本と朮赤、哈薩兒の麾下に在り、帖木眞、之を遣して、汪罕に告げ、僞つて、哈薩兒の言なさしめて曰く、吾が兄、我を離れて在るところを知らず、我が妻子、皆王の所に在り、我何

くにか歸せむ。我今木葉を以て帳となし、土石を枕となし、星を望んで臥せむとす。我、從父を思ふこと、王の如し。我が前勞を念ひ、我を許して、自ら效さしむれば、即ち手を束ねて、來歸せむと。汪罕之を信じ、亦禿兒干を遣し、血を牛角に盛り、往いて盟はしめ、三人偕に行く。中途に至りて、帖木眞の兵亦た至る。哈里兀答兒、己の營を望見す。その見て轡を返し、馬良くして、行駛せ、近ふ能はざるを恐るゝなり。乃ち騎を下つて、偽つて言ふ、馬蹄の下に細石ありと、將に扶けて、之を去らしめむとし、亦た其下に洩し、騎すてに下り、遂に執へられ、帖木眞に獻ず。帖木眞以て朮赤哈薩兒に附し、日夜兼進し、徹徹兒溫都爾に至り、不意に出て、之を攻め、盡く其衆を俘にす。汪罕父子、僅に數人を以て、逸し去り、行いて中路に至る。汪罕曰く、離るゝの人もにすべからず、人亦た我を離れずして、自ら之を離る。今この危に遭ふものは、皆一人の罪なりと、乃蠻境の捏坤烏孫に至り、守界の將、火力速八赤騰喀沙兒の殺すところとなり、その首を太陽汗に送る。太陽汗その擅に殺せしを責む。鮮昆未だ得られず、徑亦即納城に逃れ、沈魯土伯特に入つて劫掠し、生部人に逐はれ、逃れて和闐喀什噶爾の近地に至る。苦先古察兒喀思毎といふ。哈刺赤部の主克力赤哈哈刺

に獲られて、殺さる。帖木眞はじめに泰亦赤兀部を降し、次いで克烈部の汪罕と連和して、蔑里吉を破り、今又その不信を責めて、その父子を殲滅し、盡く其地を并す。こゝに於て蒙古の勢、日に盛にして、諸部の恐るゝところとなる。

乃蠻と戦ふ

この冬、帖木眞、大に帖蔑延客額兒に獵し、歸つて、舊居宣布札薩に駐まり、衆に令す。時に、帖木眞、五十六歳たり、帖木眞、既に汪罕を滅す。乃蠻の太陽汗、使卓忽難を遣して、汪古部長阿刺忽思、的斤忽里に告げしめて曰く、我聞く、人ありて、將に帝を稱せむとす。我知る、天上惟だ一日一月、地下亦た兩主あるべからざるを、請ふ。汝、我が右手となれ、我將にその弓矢を奪はむとす。阿刺忽思、衆兒必塔失を遣し、この語を以て、帖木眞に告げ、汪古部、これより好を結びて、誠附す。後、數年、帖木眞、諸將を帖木該に會す。衆謂ふ、春に方つて、馬疲る、馬の肥ゆるを俟つて、後に可なりと。帖木眞の弟、斡赤斤曰く、汝等安んぞ、馬の瘦せたるを以て、詞となすを得む。我が騎、尙ほ壯なり、我が馬を用ふべし。汝等未だ彼の言を聞かざるか、彼すてに我を攻め、我即ち彼を攻む。若し彼を敗らば、以て大名を獲べし。勝負は固より天の定るあり、奚ぞ

杭海山の役

畏れむやと。別勒格台曰く、彼汝の弓矢を奪はむと欲す。若し、竟に骸骨を奪はるれば、將に何の地に於て安置せむとする。彼國の大にして馬の蕃なるを恃み、敢て大言をなす。我但だ先づ發して、人を制し、彼の弓矢を奪ふ、亦た何の難かあらむ。奚んぞ、畏れむと。帖木眞、之を然りとし、望日師を起し、行いて、乃蠻の境外、客勒武該哈答濱、哈刺河に至り、軍を駐むること多日にして、敵至らず。戰ふを得ず。秋、又將士を會し、兵を進めむことを議し、虎必來、哲別二人を遣して、前鋒となす。時に太陽汗、すてに阿勒台河と杭海山との間に至り、兵を遣して、前鋒たらしめ、而かも、自ら蔑里吉の會托克塔、客列亦の會阿鄰、太石、衛刺特の會忽都哈別、乞札只刺の會札木哈及び朵兒奔塔塔兒哈答斤、撒兒助等の部と、ともに進む。帖木眞の軍に白馬あり、鞍翻つて腹より墜ちしを以て、驚突して、乃蠻の軍中に入る。衆皆その馬疲せたりといふ。太陽汗、因つて衆に謀つて曰く、蒙兀の馬、なほ瘦す。我もし軍を退かば、彼必ず尾追せむ。馬の力、益す乏しく、我再び與に戰はむ。必勝を操るべしと。その將、火力速八赤曰く、汝の父亦難赤汗、陣に臨んで、從ひ、未だ人背馬尾を以て人に向けず。汝今かくの如く怯、何ぞ汝の婦古兒八速をして、來らしめざる。と言畢るや、怒を含んで出づ。

乃蠻の滅亡

太陽汗、是を以て、奮進し、帖木眞、弟哈薩兒をして、中軍に主たらしめ、自ら前敵に臨み、行陣を指揮す。札木哈、帖木眞の軍容嚴整なるを望み、見、その左右に謂つて曰く、汝等我が諸達を藐視す。今その措置の常人に異なるを見るか。乃蠻向きに来り、臨んで敵す。小牛羊を宰する如しといふ。足より頂に至り、皮革を併せて、亦た存留せず。今能否を見る、即ち離れ去らむと。この日、大戰、薄暮に至り、乃蠻大に敗れ、太陽汗、先づ重傷を以て山に臥す。火力速八赤及び他將之を勸めて起たしむ。應ぜず。火力速八赤曰く、今我等、尙ほ山半に在り、山に上るに如かず。徐に再戰を圖らむと。太陽汗、之を聞けども、應ぜず。火力速八赤、又曰く、汝の妻古兒八速、既に盛粧して、汝の凱旋を待つ。汝盍んぞ速に起たざる。と。仍ほ應ぜず。火力速八赤、乃ち諸將に謂つて曰く、彼もし絲毫の力氣あらば、必ず能く答語して、身を起さむ。今すてに、かくの如し。我等その彼の死を祝ひよりは、再び戰ふに若かず。彼をして、再び我等の死を見せしめむと。遂に皆山を下つて苦戰す。帖木眞、生ながら、之を致さむと欲して、從はず。皆戰死す。帖木眞、大に獎めて曰く、麾下の將士、もし皆かくの如くなれば、尙ほ何をか慮らむやと。潰衆、夜、納忽嶺に走り、墜死するもの算なく、朵兒奔塔塔兒、哈答斤、撒

見助の四部、來り降り、蔑里吉の餘衆、遁れ去る。太陽汗亦た虜へられて死す。太陽汗の子古出魯克(屈出律)逃れて、その叔不亦魯里に依る。その冬、帖木眞再び蔑里吉を征して、塔兒河に至り、兀哇思に遇ふ。蔑里吉の會帶亦兒兀孫、來降して、女を獻ず。忽蘭哈敦部衆馬なく、從征する能はずといふ。帖木眞命じてその衆を散せしめ、輜重の後に於て營し、每營百人、以て其勢を分つ。大軍の行後に追ひて、その衆復た叛き、輜重を劫略し、仍つて帖木眞の軍の敗るところとなり、奪ふところを返し、帶亦兒兀孫逃れ去る。帖木眞、蔑里吉を台哈勒忽兒罕に圍み、盡く麥端、脫塔哈林、哈俺の諸衆を取る。皆蔑里吉部の人。托走塔、その子と奔り、不亦魯里、帶亦兒兀孫、すてに叛き、逃れて薛楞格河濱の呼魯哈卜察に至り、寨を築いて居る。帖木眞、孛兒忽勒諾延及び赤老温把阿秃兒の弟沈泊を遣し、右翼軍を率ゐて、之を討平せしむ。

四夏を伐つ

蒙古附近の諸部、すてに歸服し、帖木眞の領土、直に西夏と接す。これより先、西夏の仁宗、金に事へて、國を安んじ、國中に學校を建て、禁中に小學を設け、大に文治を布きしが、位に在ること五十五年、權臣國柄を執り、兵政漸く振はず。仁宗殂して、子桓宗純依立つ。帖木眞、すてに乃蠻に勝つや、その餘威に乘じ、西夏の力吉里城を圍

み、數日にして、之を下し、その牆牒を毀ち、又乞鄰古撒城に往いて、之を下し、大に俘掠あり、尋いて、頻に他城を下し、戸口財物、駝馬牛羊を得る、無數にして、還り、内外蒙古の地、悉くその版圖に入る。

第三十一章 成吉思汗の即位と征金の師

成吉思汗の即位

蒙古の部長帖木眞、乃蠻を敗りしより二年、宋の寧宗開禧二年、大に部族を幹難河源に會し、九腳の白旗を建て、皇帝の位に即き、群下尊號を上つて、成吉思汗といふ。闊闊出の請に従ふなり。闊闊出は、晃裕壇氏、蒙力克額赤格の子、好んで休咎を言ひ、形狂の如し、衆之を稱して、帖卜騰格理成といふ。堅強の義たり。吉思は、衆數たり、亦た西遼が其主を稱して古兒汗と稱する如し、因つて復た師を起して、乃蠻の餘衆を征す。時に不亦魯里、飛鳥を兀魯里塔山下の莎酌河上に獵す。兵至つて、之を殺す。古出魯克、托支塔、也兒的、石河に奔る。その翌年秋、夏國貢を納れず、約束を奉ぜざるを以て、再び之を征し、各城を攻め下す。この役の先、阿爾壇、布刺の二人を遣し、乞兒吉思に使せしめ、先づ一部に至りて、その降を受け、繼いで、一部に至る。野牒鄂倫

といひ、會を斡羅思亦納兒といふ、二部の會、二使臣を遣す。曰く、阿里克帖木兒、曰く、阿特黑刺黑、偕に來つて獵鳥を獻ず。

その翌年、夏より師を班して、舊居に歸つて、暑を避け、冬復た托克塔、古出魯克を征す。前鋒、衛刺特部に遇ふ。その會、忽都哈別乞、戰ふ能はずして、遂に降り、用ひて、嚮導となし、也兒的、石河に至る。托克塔を陣に殺す。古出魯克、從者多きなく、遂に遠く走つて西遼に走る。西遼主、卓勒古、之を收撫して、義子となし、嫁するに女を以てす。その翌年春、畏兀兒國主、亦都護、成吉思汗の威名を聞き、西遼、遣すところの監國大臣を殺す。沙均といふ、將に人を遣して、款を納れむと欲す。成吉思汗、之を聞き、先づ阿勒撥魚、土克迭兒拜を遣して、その國に使せしむ。亦都護、厚く之を款し、その臣博古思、阿世、阿忽赤、阿闌帖木兒をして、偕に來り、謁せしむ。謂ふ、往來の人、皇帝の雄威大度、能く百姓を撫定するを聞きしが、故に、西遼を棄て、將に使を遣して來り附し、并せて西遼主、卓勒古の情形を以て、上陳せむとす。意はざりき、帝の使、先づ至らむとは。たとへば、雲開いて日を見、氷泮けて水を得るが如く、意自ら勝えず。今よりして後、願くは、全部を率ゐて、僕となり、子となり、誠を竭し、力を效さむと。その使の言、

畏兀兒

四夏を降す

此の如し、托克塔、矢に中つて死するときに當りて、その子、忽都赤刺溫、赤攸克、呼圖罕、蔑兒根、父の全屍を得る能はず。也兒的、石河を奔りて、將に畏兀兒に奔らむとし、哀不干を遣して、使となし、先づ往かしむ。亦都護、之を殺し、四人と、眞河に戰つて、其衆を逐ひ、阿兒思、闌兀喀、察魯忽、不喀、孛拉的、斤、亦納兒、乞牙松、赤をして、來つて、戰事を告げしむ。すてにして、二使、成吉思汗の使とともに至る。成吉思汗曰く、亦都護、果して能く我に誠を輸し、力を效すと。復た阿勒撥、斡、土克、二使を遣し、往いて、貢獻を徵せしむ。亦都護、尋いて、使を遣し、方物珍異を進む。その翌年夏、復た使を畏兀兒に遣す。時に成吉思汗、軍中に在り、秋、又夏を征して、兀刺該城に至り、軍事を指揮し、すてに夏に勝ち、女を納れて、回る。その翌年春、柯耳魯克部主、阿兒思、蘭干、來つて、克魯倫河に覲し、亦都護、亦た至り、且つ曰く、帝もし我に賜うて、僕役の列に在るを得、遠近をして、皆我が陛下襟帶の間に、依托するを知らしめば、我願くは、第五子とならむと。成吉思汗、その意の親附に在るを知り、因つて曰く、我女を以て、汝に與へむ。汝我が第五子となれと。

蒙古と金

西夏の蒙古に降るや、金の救はざるを怨むこと甚し。天會の初、兩國和を議してより、こゝに至りて、八十餘年、遂に兵を出して、靉州を侵す。金の慶善努、之を敗つて去る。すでにして、夏主襄宗安全、殂して、子遵頊立つ。こゝに於て、蒙古は、新捷の勢に乘じ、その全力を擧げて、金に向ひ、爾後二十餘年間の大攻戰を惹起するに至れり。はじめ、成吉思汗、なほ歲幣を金に納る。金主、衛王允濟をして、貢を靜州に受けしむ。成吉思汗、允濟を見て、禮を爲さず。允濟怒り、歸つて、兵を請ひ、之を攻めむと欲す。會ま、金主環殂して、永濟嗣いで立つや、詔あり、蒙古に至り、傳言し、拜受すべしといふ。成吉思汗、金使に問うて曰く、新君を誰とかす。使曰く、衛王なりと。成吉思汗、遂に南面して睡して曰く、我謂へらく、中國の皇帝は、是れ天上の人、これ等の庸懦を倣す、何ぞ拜を以て爲さむと。即ち馬に乗じて、北に去る。金使還つて言ふ。永濟怒り、蒙古の入貢を俟つて、就いて之を害せむと欲す。成吉思汗、之を知り、遂に金と絶ち、益す兵を嚴にして、守備をなし、數ば金の西北の境を侵掠し、その勢漸く盛なり。金人倉皇、遂に百姓の邊事を傳説するを禁ず。

はじめ、金の納哈塔邁珠、北鄙を守り、蒙古の將に邊を侵さむとするを知りて、金

その争端

金和を求む

主に告ぐ。金主曰く、彼、我に于いて覺なし、汝、何ぞ此を言ふと。邁珠曰く、近ごろ、その鄰部附從し、西夏女を獻じて、箭を造り、楯を製して休まざるを見る。我を圖るに非ずして、何ぞと。金主、その擅に邊隙を生ずるを以て、之を囚ふ。すてにして、蒙古、雲中九原を侵擾し、連歲休まず、遂に大水灤を破つて進むに及び、金主は、じめて恐れ、邁珠を釋し、西北路招討使鈕祜祿哈達を遣して、和を求めしむ。成吉思汗、許さず、時に宋の嘉定四年四月なり。

蒙古はじめて金を攻む

金の通古遷嘉努、完顔和碩、烏珠堡に至り、未だ備を設くるに及ばず、蒙古の兵、奄至して、之を抜き、烏月營に及び、勝に乗じて、白登城を敗り、遂に西京を攻め、凡そ七日、留守赫舍哩呼沙呼、城を棄て、遁れ去る。成吉思汗、精騎三千を以て、之に馳す。金兵大に敗れ、追うて翠屏口に至り、遂に西京及び桓撫州を取る。成吉思汗、太子朮赤、察合台、窩濶台を遣し、兵を帥り、分つて雲内、東勝、武朔、豐靖等の州を取らしむ。是に由つて、金の德興、弘州、昌平、懷來、縉山、豐潤、密雲、撫寧、集寧より、東は平灤を過ぎ、南は清滄に至り、臨潢より遼河を過ぎ、西南忻代に至るまで、皆蒙古に降る。

居庸關の役

成吉思汗、すでに撫州を破り、士を休め、馬を收し、遂に將に南向せむとす。金主招討使完顔糾堅、監軍完顔鄂諾、等に命じ、兵を率ゐて、四十萬と號し、野狐嶺に駐る。成吉思汗、兵を嶺西の獯兒背に進め、遂に糾堅等と戦ひ、金兵大に敗れ、人馬蹂躪、死者勝げて計るべからず。蒙古銳に乗じて前み、行々金兵を敗り、その遊兵、居庸關に至る。守將完顔福壽、關を棄て、遁る。こゝに於て、金の中都、戒嚴し、男子を禁じて、出づるを得ざらしむ。金主、南汗に奔らむと欲す。衛卒死を誓つて迎戦し、蒙古の兵、損折頗る多きを以て、遂に金の群牧を襲ひ、其馬を驅つて歸る。金主乃ち罷む。

遼人耶律留格

こゝに於て、金の國威、愈よ衰へ、内變頗る多からむとす。契丹の人、耶律留格、金に仕へて北邊千戸たり。蒙古の兵起るや、金人、遼の遺民、他志あるを疑ひ、留格亦た自ら安んぜず、遁れて龍安、黃龍府に至り、衆を聚めて、十餘萬に至り、自ら都元帥となり、使を遣して、蒙古に附き、金兵を敗り、宋の嘉定六年二月、遂に自立して、遼王となり、盡く遼東の州郡を有し、遂に咸平、奉天府、鐵嶺縣に都す。留格、後蒙古に歸し、元帥となりて、廣寧に居る。金主永濟、復た赫舍哩呼沙呼を以て、右副元帥となせしが、その八月に至り、呼沙呼、永濟を弑して、昇王珣を立つ。顯宗の子、原の名は烏都布、これを

金の内變

を宣宗となす。呼沙呼、因つて自ら太師、尙書令、都元帥となり、澤王に封ぜらる。

蒙古三道の兵

こゝに於て、蒙古の兵、再び南下し、十月、遂に燕京を圍む。呼沙呼、敗軍の中に殺さる。成吉思汗、怯台、哈台を留めて、燕城に屯せしめ、降人楊伯遇、劉林漢の軍四十六都統、並に韃靼の兵を分つて、三道となし、その子、朮赤、察哈台、窩闊台に命じ、太行に依循して南し、保州、中山、邢、洛、滋、相、衛、輝、懷、孟の諸郡を破り、徑に黄河に至り、大に平陽、太原の間を掠め、別將哈薩兒等をして、海に遵つて東せしめ、灤、薊を破つて、大に遼西の地を掠め、成吉思汗、自ら將とし、少子拖雷とともに、中道より進み、雄莫、清、滄、景、獻、河間、濱、棗、濟、南等の郡を破り、以て中都に逼る。金人、鬪志なく、至るところの郡邑、皆下る。蒙古の軍、凡そ金の九十餘部を破り、兩河、山東の數千里、人民殺戮、幾んど盡き、金帛、子女、牛馬、羊畜、皆席卷して去り、屋廬焚燬し、城郭丘墟となる。

金、和を請ふ

その翌、宋の嘉定七年、成吉思汗、山東より還つて、燕城の北に屯す。諸將勝に乗じて、燕を破らむとを請ふ。成吉思汗、從はず。使を遣して、金主に諭す。金の丞相高琪曰く、韃靼の人馬、疲病す、當に一戰を決すべし。と。完顔福興曰く、不可なり、我が軍、都城

に在り家屬各諸路に居る、その心向背未だ知るべからず、戰敗るれば、必ず散じ、勝てば、亦た妻子を思うて社稷を去らむ、安危この一舉に在り、使を遣して、和を議し、彼が軍を還すを待ち、更に之が計を爲すに如くはなし、と、金主之を然りとし、遂に和を求む、成吉思汗、その公主を得むと欲す、乃ち東海郡侯の少女名は哈敦、及び金帛童男女各五百、馬三千を以て、之に與ふ、成吉思汗、喜んで、引いて歸り、居庸關を出て、虜にせしところ、山東兩河の少壯男女數十萬を攻めて、皆之を殺す、こゝに於て、金主、國愈よ盛まり、兵弱く、財用匱乏、中都を守ること能はざるを以て、乃ち都を汴に遷し、その子都元帥福興、左丞穆延盡忠を留め、太子守忠を奉じて、中都に留守せしむ、成吉思汗、之を聞いて怒つて曰く、すでに和して遷る、これ疑心あつて、憾を釋かず、特に解和を以て我を疑するの計を爲すのみ、と、因つて、復た南侵を圖る。

金主の良郷に至るや、軍中亂をなすものあり、卓達推されて帥となり、叛いて、北に還る、完顏福興、兵を以て、盧溝を阻む、卓達等、河の彼岸、塔塔兒の衆千人と聯合し、前後夾撃、大に守橋の兵を敗り、勢すてに張り、使を遣して、降を蒙古に請ふ、成吉思汗、遂に明安を遣し、卓達を援け、その兵を合して、燕京を圍ましむ。

金兵の叛

金國の分崩

成吉思汗、金地を攻取ることすてに多く、金主復た嚴刻なり、故を以て、衆皆離心し、各地に據つて自立す、蒙古の將穆呼哩、金の遼西州郡を攻めて、之を下し、成順懿通州、相繼いで降り、北海農家の子濰州の李全は亂をなし、張鯨は錦州に據つて、自ら臨海王と稱し、蒙古に附く。

完顏福興の死

金の中都圍まるゝことすてに久しく、完顏福興、兵を以て、穆延盡忠に付し、自ら大綱を總持し、又人を遣して、急を金主に告ぐ、金主、永錫慶壽に命じ、大名の兵萬八千、西南路の歩騎萬一千、河北の軍一萬を將る、李英をして、糧を運び、往いて援けしむ、李英、大名に至りて、兵數萬を得たるも、衆を取する、素より紀律なく、蒙古の兵に霸州の北に遇うて、大に敗られて死し、盡く運ぶところの糧を失ひ、他の二將、亦た潰えて歸る、これより、中都援絶え、内外通せず、完顏福興、毒を服して自殺し、盡忠出て、南京に走る、蒙古の兵、遂に中都に入り、吏民死するもの甚だ衆く、宮室亂兵の焚くところとなり、火月餘滅せず、時に成吉思汗、桓州に在り、燕の陥りしを聞き、使を遣して、明安等を勞し、その府庫の寶を齎して、北に去る、こゝに於て、金の祖宗の神御及び諸妃嬪、皆淪沒す。

花帽軍

成吉思汗軍を魚兒濛(鐵黃旗牧廠)に駐め、撒木哈把阿秃兒に命じ、萬騎を率ゐて、西夏より京兆に趨かしめ、潼關を攻めしも、下らざるを以て、嵩山の小路より、汝州に趨き、山礮に遇へば、鐵槍を以て相鎖し、連接して橋を爲り、以て渡り、遂に汴京に赴く。金主急に花帽軍を山東に召す。蒙古の兵、杏花營に至る。汴京を去ること二十里、花帽軍、撃つて之を敗る。蒙古の兵、乃ち大に掠め、還つて陝州に至り、適ま河水の合するや、遂に渡つて北し、西京に趨く。金人これより、専ら關輔を守るのみ。

金人潼關を復す

金の西京の守將、城を出て、迎へ降り、撒木哈降を受けて回る。成吉思汗、又蒙格力克の子脱命扯兒必に命じて、眞定府を攻めて之を降し、東平府を攻めむとす。河水阻をなして、克つ能はず。その地を掠めて歸る。之に次いで、宋の嘉定九年、蒙古の兵、嵩汝の間に次するもの、金將胥鼎、及び絳解隰吉孟五州の兵に夾撃せられて、平陽に敗れ、金人遂に潼關を復す。

成吉思汗の西征

成吉思汗、南侵の勢、太だ盛にして、一舉金の社稷を擧げむとせしも、その兵時に敗れて、未だ志を得ず。而して、その大に逞うせむとするや、忽ち西方の事起り、翻つて、絶代の軍功をなすに至れり。

第三十二章 西遼の滅亡と中央亞細亞の形勢

蔑里吉人の絶滅

宋の嘉定十年、成吉思汗、南征の師を旋すや、蔑里吉人、逃れて乃蠻の西界外に至り、衆を聚めて、再擧を謀らむとす。その地、山高く路險なるを聞き、乃ち速不台把阿秃兒に命じ、軍を率ひ、鐵釘を以て車輪に密布し、山路を行くも、壞れ易からざらしめ、復た脱忽察兒をして、二千騎を以て輿に合せしめ、行いて眞河に至り、大に蔑里吉を敗り、盡く其人を殺し、生きながら呼圖罕蔑兒根を獲、朮赤に檻致す。朮赤、呼圖罕が射を善くするを聞き、之を試むるに、果して然り。人を遣して、成吉思汗に告げて、その死を貸すを乞はしむ。成吉思汗、後患を遣すを欲せず、仍つて之を殺さしむ。托克塔の後人、一も免るを得るものなし。

秃馬特の平定

秃馬特の酋、反都秃勒莎哈兒、先にすてに降附せしが、成吉思汗の南征を聞き、遂に復た叛す。その部、兵衆素より強し。成吉思汗、巴鄰の人、納牙諾延、及び朶兒伯諾延を遣して、往いて討たしむ。納牙、病を以て行かず、乃ち改めて、孛兒忽勒に命ず。孛兒忽勒、使者に問うて曰く、これ衆人の擧ぐるところか、抑も上意か。使者曰く、上意な

穆呼哩

り、と、孛兒忽勒曰く、すてに是の如くむば、我必ず往かむ。我が軀を以て、人の血に易ふ。妻子は、惟だ主上之を憐れめ、とすてに禿馬特を平ぐるや、孛兒忽勒亦た陣没す。成吉思汗その言を知り、甚だ之を痛惜し、是を以て、厚く其子を撫し、その家人に告げて、悲哀に過ぐるなく、我必ず優卹せむといふ。

その翌年、穆呼哩木訶里を封じて、國王となして、金を伐つ。穆呼哩の金境に在る時に當り、金人之を稱して、國王といふ。成吉思汗曰く、これ佳兆なり、と。こゝに至りて、遂に封號を定め、制を承け事を行ひ、誓券金印を賜ひ、諸路の十軍及び蕃漢の諸軍を分つて、並に麾下に隸せしめ、行省を燕雲に建て、且つ之に謂つて曰く、太行の北は、朕自ら經略せむ。太行の南は、卿其れ之を勉めよ、と。穆呼哩即ち中都より南して、遂城及び蠡州を攻め、皆之を下す。

この年、蒙古の部將哲別、乃蠻の古出魯克を逐うて、巴達克山撒里黑庫爾の地に至りて、終に之を殺し、乃蠻の餘孽悉く靖んず。古出魯克さきに蒙古に敗られて、西遼の卓勒古に依つてより、その死に至るまで十一年。その死は、實に蒙古西征の導火にして、葱嶺以西は爲に大變動を觀るに至れり。されば、こゝに古出魯克の事蹟

回教國の分裂

を中心として、その前後に於ける中央亞細亞の形勢に就いて、詳述するところなるべからず。

回教祖マホメットの始めて興るや、左手にコーランを載せ、右手に劍を握り、命に服せざる者は、征服して赦すなく、その子孫數世を経て、地を拓くこと萬里、東は海上より唐と交通し、歐亞二大洲の兵力商權を掌握せり。はじめ、亞刺比亞人のシリアに游牧するや、シリア人之を大仰といひ、繼いで、波斯人之を大希といひ、その後、アルメニヤ人、トルキスタン人之を塔起克といふ。この三者の發音、皆タジといふが故に、支那にても、亦た之を大食國といへり。大食の版圖、その最も盛なるとき、地中海を以て、池となし、殆んど之を周りて、一大圓環をなさむとせしが、一たび、西班牙に敗れし後、その志を果さず。而して、其地は、むしろ東方に廣く、葱嶺以西の亞細亞全土を根據とし、亞弗利加、歐羅巴の一部に跨れり。こゝに於て、文運亦た旺盛を極め、その國都八吉打は、一時世界文化通商の中心となり、星學科學、哲學等は、長足の大進歩をなせり。その教主哈里發は、大會を分設して、各地を轄治せしめ、勢

東方回教國の諸朝

威固より極なし。然れども唐の末葉と前後して、哈利發の威亦た漸く衰へ、所在の豪族は、算端サレダンと稱し、哈里發の代理者として、その地方に於ける兵馬政治の大權を握り、隱然獨立の姿をなし、哈利發は、唯だ宗教上の虚位を充たすに過ぎず。その國土を擧げて、四分五裂、復た收拾統率すべからざるの否運に臨めり。

その西方に於けるは、姑らく之を措き、東方の諸會、弱肉強食、邦を建て、土を啓き、國姓屢ば替り、朝名甚だ多し、曰く他海爾朝、曰く薩法爾朝、曰く薩蠻朝、曰く賽布克的斤朝、曰く布葉朝、而して後に、塞而柱克朝あり。

はじめ、突厥は、唐の兵威に抗敵するを得ず、次第に退いて西に去り、一時中央亞細亞を領し、後、大食の版圖に入りしを以て、その種族存するもの、猶ほ頗る多く、哈利發及び算端等は、その武勇趨捷を愛して、之を軍隊に用ひ、防禦の任に當らしめしが、故に、次第に權勢を得、その後、マームードといふもの、この種族中より、崛起して、阿富汗の地カプールの南、哥疾寧カフジニに據り、北は阿母河より南は波斯灣に至る領土を開き、更に印度に侵入し、ラヂャプト種族の連合軍を擊破し、印度河及び恒河の流域に侵入せしが、未だ幾ならずして、マームードの死するや、哥疾寧家の勢威、

哥疾寧王朝

塞而柱克王朝

忽ち衰へ、遂に塞而柱克家の擊破するところとなれり。

塞而柱克家の始祖塞而柱克も、亦た突厥種に屬し、烏古斯の部長にして、錫爾河及びアルル海、裏海の間に居りしが、北宋中葉の時、地に據つて自ら王たり。その孫トグルルに至りて、その部族を率ゐ、哥疾寧家を破りて、その領土を奪ひ、トグルルの從子アルプヘアスラン從孫メリク、シヤール等、頻りに、東羅馬帝國を破りて、地を拓き、西、地中海に至る。之に次いで、阿富汗人シヤハブ、ウツヂンは、ヘラツドの東南ゴールに據り、哥疾寧家に代りて、阿富汗斯坦及び北、西、中三印度を領せり。

花刺子模王朝

然れども、塞而柱克朝亦た久しからず。メリク、シヤールの死するや、その領土を諸子及び功臣に分ちしを以て、勢威頓に衰ふ。メリク、シヤールの僕ヌシユ、テギンといふものはじめ、刀を執つて、左右を衛り、甚だ寵任され、因つて僕籍を除いて、花刺子模カフジニの部會となりしが、その子コダバツチン、ムハメッドに至り、塞而柱克朝の衰へたるに乗じ、諸會とともに土を裂き、自ら王となり、花刺子模沙と稱せり。沙は猶ほ可汗といふがごとし。この時、金すてに遼を滅ぼし、耶律達什、西に來り、天山南路の畏吾兒部を征服し、中央亞細亞に入りて、塞而柱克家を破り、阿母河北の地を奪ひ、

四遼の建國

遂に西遼、一名黑契丹(ハカチヤク)の基業をなし、復た將を遣して、花刺子模を攻め、ハメツドの嗣王阿切斯を擒にし、臣服して歲に金を貢するを誓はしめて釋るし。歸し、阿切斯の子伊兒阿斯蘭亦た西遼に服屬し、而かも、東南の近境を併吞せり。その子塔喀施に至り、遂に(宋の)光宗紹熙五年塞而柱克朝を滅し、波斯を一統して、哈利發の封を受けて、花刺子模朝を創め、西方亞細亞に號令し、その死後、阿拉哀丁謀罕默德位を嗣ぐ、然れども、猶ほ貢を西遼に輸す。

西遼の盛衰

西遼は、德宗耶律達什殂せし後、その子仁宗伊瑛繼いで立つ。年なほ幼、その母威天蕭太后制を稱して、國に臨むこと六年。その殂するに及びて、伊瑛はじめて政を視る。時は金の熙宗の末年に當り、仁宗、金使回鶻に至るもの、不遜を成せしを怒り、之を殺せしも、金室内訌ありしを以て、來り責むるに及ばず。仁宗殂後、嗣子なほ幼なるを以て、遺命して、妹普蘇完をして、國政を執らしめ、因つて、自ら承天皇后と號す。この時に當り、東方にては、金の海陵王南下して、國中動亂し、遼の餘孽、しきりに蜂起するあり、若し太后にして、往時聖宗母后の雄志あらしめば、之に應じて、

西遼の滅亡

故土を復する、必ずしも望なきに非ざりしが、計こゝに出でず、却つて其夫蕭都爾伯の弟布固濟蘇沙喇と通じ、因つて、都爾伯を出して、東平王となし、遂に之を殺すや、都爾伯の舅烏拉琳、兵を以て罪を問ひ、宋の孝宗乾道四年、普蘇完及び布固濟蘇沙喇を誅し、伊瑛の次子卓勒古を立て、王となせり。而して、是れ實に西遼の末帝なり。

西遼は、この内亂の後、國威甚だ振はず、花刺子模王、謀罕默德、父の遺命を奉じて、なほ歲幣三萬的那を西遼に貢す。すてにして、近境を吞併し、國益す強大となるや、遂に貢を納れず。又攻めて、布哈爾令各城を取り、西遼に従ふなからしむ。時に乃蠻の古出魯克、逃れて西遼に客たり。卓勒古の能く爲すなく、東方の屬部皆叛いて、蒙古に従ひ、西域亦た叛き、又その父敗殘の舊部、尙ほ在つて、藏匿するを聞き、その衆を得、以て國土を奪はむを思ひ、卓勒古に謂つて曰く、我、舊地を離るゝ、すてに久しく、今蒙古往いて、金を征す。今の時に乘じ、我、潰卒を招集すれば、衆必ず來り従はむ。その力を藉りて、本國を衛るべし、と、卓勒古、之を信ず。古出魯克、すてに東行す。乃蠻の舊衆、果して來り附き、遂に劫掠を肆にし、復た花刺子模の使に遇ひ、ともに卓勒

古を謀らむと欲す。即ち約して、東西より夾み攻め、西勝てば、西軍地を拓いて、阿力麻里和闐喀什噶爾に至り、東勝てば、東軍地を拓いて、費那克特河に至る。議すてに定る。古出魯克即ち進んで、西遼の都城八刺沙衮を攻む。卓勒古與に戰つて、之を敗る。古出魯克退いて衆を集む。而して、花刺子模及び撒馬爾干の兵、塔刺思擒に至る。卓勒古の將を塔尼古といふ。古出魯克機に乗じて、再び進み、遂に卓勒古を獲、陽つて尊崇をなし、實は國を篡して自立す。越えて二歳、卓勒古憂悲を以て卒し、西遼終に滅ぶ。德宗より、こゝに至るまで四世、八十八年といふ。

古出魯克の死

古出魯克すてに位を得、西遼の地を分ち、錫爾河以南の地は、花刺子模に與へ、自ら其餘を領し、復た一妃を娶り、勸られて、佛教に従ひ、是に由つて、民に諭令して佛を奉じ、回々教を奉ずるを得ざらしめ、暴斂横徵、一郷長の家ごと、一卒を以て、之を監泄せしめ、自ら和闐に至り、民に諭して、教を改め、出示して、回教徒を招集し、教理を辯論す。衆皆至る。その首たるものを阿拉哀丁といふ。古出魯克と往復申辯し、詞屈せず。古出魯克慚恨惱怒、嘗つて之を縛し、その手足を門に釘す。衆情咸な忿る。而かも如何ともするなく、惟だ成吉思汗の至るを望む。成吉思汗亦た之を聞く。故

に哲別を遣して、往いて征せしむ。哲別、民間に示諭して、各舊教を守らしめ、其先の奉ずる所に從ひ、更易するなからしむ。こゝに於て、各郷長皆監泄の卒を殺して、應を爲す。古出魯克喀什噶爾に在り、軍未だ至らず、先づ遁る。沿路の居民皆納れず、將に巴達克山に入らむとす。而して、哲別追うて撒里黑庫爾山徑窄隘の處に及び、遂に之を殺す。乃蠻西遼、既に全く滅び、蒙古對花刺子模の交渉は、自ら避け得ず。

蒙古對花刺子模の争端

花刺子模王諱罕默德すてに西遼を分ち、又ゴール家の振はざるに乗じて、阿富汗斯坦を奪ひ、大に土を拓きしを以て、中央亞細亞の形勢、全く一變し、尋いて、古出魯克の滅ぶや、東には惟だ蒙古、西には惟だ花刺子模のみ、兩大國、壤錯まり、界接す。時に天山の西北、すてに蒙古に入り、萑苻悉く靖く、行旅阻なし。成吉思汗、さきに志を金に逞うするを得ざりしを以て、はじめより西征の意なく、かつて西域の賈人に囑し、白駱駝、毛裘、麝香、銀器、玉器を齎らし、因つて、其詞を述べしめて曰く、予貴國が極大の邦にして、君が治國の才能、遠く衆に邁ゆるを知る。予の君を慕悦すること愛子に等し、君亦た知るならむ。予すてに女眞を平らげ、盡く諸部族を撫有する

を予が國の兵は武庫の如く、予が國の財寶は金穴の如し、予亦た何ぞ必ずしも再び他人の地を攘まむや。願くは君と交を締し、商賈を通じ、疆界を保たむ。と、謨罕默德、その詞を以て禮なしとなし、心に怒りしと雖も、賈人の言に因つて意釋け、往報して約の如くせしむ。未だ幾ならずして成吉思汗、西域の商、東より還るに會し、親王諾延等に命じ、各賫を出し、人を遣し、隨つて西行し、土物を購はしむ。その衆四百數十、皆畏吾兒人なり、行いて花刺子模の界に入るや、守城の酋、蒙古の細作となし、謨罕默德に告げ、盡く之を殺す。惟だ一人、逸し歸つて報ずるを得たり。これより先、哈里發、又花刺子模の日に疆くして、崇禮舊に似ず、且つ彙に兵を以て脅かせしを怨み、忿を蓄へて報復を思ふ。而して列邦を環視するに謀るべきものなく、蒙古の盛強を聞くに及び、乃ち使を遣し、潛に來り導いて西伐せしむ。然れども、成吉思汗方に鄰好を修めて、兵を用ふるの意なし。すてにして逸者歸り報ぜしに及び、驚怒して慟し、冠を免ぎ、帶を解き、跪いて天に禱り、必ず耻を雪がむことを誓ふ。時に古出魯克の餘孽、未だ靖らず、乃ち使を遣し、往いて謨罕默德を責め、守城の酋を以て償となさむことを求む。謨罕默德可かず、却つて其使の西域人を殺し、蒙古官の鬚

を薙き、之を放ち歸し、兵を撒馬爾干に集め、蔑里吉の餘族を討ちし。蒙古軍と遇ひ、之と戦ひ、勝負略ぼ相當る。蒙古の兵少く、因つて多く燈火を營に燃し、夜に乗じて、疾く馳せて去る。謨罕默德亦た撒馬爾干に歸り、蒙古の大敵たるを知り、心に戦を怯れ、諸將を集めて、計を議し、野戦利あらざるを以て、溝を深くし、壘を高くし、その飽掠して颯げて去るに任かすに如かずとなし、議すてに定るや、乃ち其軍を以て、錫爾、阿母兩河沿岸の諸城を守らしむ。こゝに於てか、蒙古對花刺子模の争端は、すてに開きたり。

第三十三章 成吉思汗の西征 (上)

西遼先づ亡び、乃蠻の餘孽すてに存するものなく、蒙古は、天山葱嶺附近、沃饒の曠土を得、直に境を花刺子模に接せしを以て、西征の師、新に起り、これより成吉思汗の殂落に至るまで、九年の間、中央亞細亞の全土は、兵戈騷擾の區となれり。成吉思汗即位の十四年、宋の嘉定十二年、諸子及び各將帥を集めて、西域を撃つことを會議し、因つて、先づ軍中の章程を定む。その翌十三年、成吉思汗、也兒的、石河

成吉思汗の西征

四軍を分遣す

に在りて、夏を銷し、秋に至りて兵を進む。柯耳魯の主阿兒思蘭、畏吾兒の主巴而朮、阿忒的斤、阿力麻里の主雪格那克的斤、皆途に會し、從つて征し、邊實伯里、保喇阿爾、穆爾を經、亦列河を渡り、呼遜鄂爾多、塔刺思を過ぎて、花刺子模の訛脫刺兒城に至り、軍を分つて四となし、察合台、窩闊台をして、其城を圍攻せしめ、朮赤をして、繼的、因吉懇特に往かしめ、別將をして、忽廝の白訥克特を攻めしめ、自ら拖雷と布哈爾を攻め、その援兵を絶つ。

訛脫刺兒城

四道の兵、すてに部署す。訛脫刺兒の守將を哈伊兒汗といふ。又哈拉札汗あり、二萬衆を率ゐて、助守す。圍まるゝこと五月に至り、城民慌亂し、哈拉札汗、降を議せしも、哈伊兒汗、從はず。哈拉札汗、夜に乗じて、城を出て、遁れむと欲し、我が軍の獲るところとなる。察合台、窩闊台、その不忠を以て之を誅し、遂に其城を下す。哈伊兒汗、親兵三萬を率ゐて、城内の塞堡を守り、屢ば出て、戰ひ、相持すること一月、死亡すてに盡き、僅に二卒を除し、猶ほ自ら屋に登り、瓦を掲げて人に擲つ。すてに獲られ、之を撒馬爾干に檻致し、大軍、銀液を浴かして、その口耳に灌ぎ、以て商を殺し、貨を奪ふの仇を報ゆ。この間、朮赤は先づ撒格納克に至り、忽遜哈赤をして降を諭さしむ。

遏那斯を陷る

殺さる。こゝに於て、令を下し、晝夜更番、迭に攻め、其城を下し、忽遜哈赤の子をしてこれを守らしめ、復た奧斯懇、八兒眞を下し、遏那斯を攻む。城中兵衆く、且つ、盜賊入つて伍するに由り、皆能く戰ふ。然れども、大半陣歿す。警の鄭忒に至るや、守將庫特魯克汗、夜遁れて、錫爾河を過ぎ、沙漠を經、花刺子模に往く。朮赤、成帖木兒をして、繼的に諭降せしむ。この時、城中主なく、衆民皆刃を抜いて相向ふ。成帖木兒、撒格納克使を殺して、禍を致せし事を告げ、且つ兵をして、城に入らざらしむるを許し、乃ち免れて歸るを得たり。朮赤、即ち兵を督して、城下に至り、雲梯を樹て、登り、民を驅つて城を出てしめ、阿里火者を以て、其地を守らしめ、兵を分つて、因吉懇特城を降し、烏羅斯伊的を遣し、其衆を率ゐて、哈刺庫倫に還らしめ、別に土人萬名を募り、台納爾をして、之を統べしめ、その叛亂するや、殺戮大半、餘は逃れて阿母河を渡る。こゝに於て、花刺子模の北境、すべて蒙古に服す。

蒙古の第三軍は、別將阿刺黑諾延、速客圖、托海の帥ゆるところにして、その衆、僅に五千人、往いて白訥克特を攻む。守將伊勒格圖、蔑里克、康里の兵を率ゐて、大に戰

賽渾河の戦

ふこと三日、第四日に至りて、城民降を請ひ、兵民工匠を三處に分つて盡く其民を殺し、民間の壯丁を驅つて往く。忽匪の守將帖木兒蔑里克、精兵千人を分つて、賽渾河中の洲を守り、矢石及ぶ能はず、城守と犄角の勢をなす。阿刺黑等三將、忽匪訛脱刺兒の四郷に於て、民五萬を擄にし、石を山より運び、河を填めて、堤を築き、以て洲に達す。帖木兒舟十二艘を造り、形、穹屋の如く、裏むに濕匪を以てし、泥を塗り、酷を潑し、以て火箭を禦ぎ、每晨兩隊を分つて敵を迎ふ。然れども、河堤漸く成り、砲石紛集、勢支えず、帖木兒七十舟を以て輜重軍士を載せて遁れ去る。

賽兒奴克城

成吉思汗の本軍は、先づ馳せて、賽兒奴克城を襲ひ、晨に城下を壓す、居民咸な城に入つて拒守す。丹尼世們を遣して、招降せしむ。城人將に之を困辱せむと欲す。丹尼世們謂ふ、我は成吉思汗親近の人たり。我亦た木速兒蠻人、特に來つて、一城の生命を救ふ。若し抗拒すれば、滿城血を流さむ。降れば、身家皆保全を得むと。城遂に降り、糧を餽る。惟だ頭目至らず。成吉思汗怒る。はじめて至るや、令を下して殺掠することなからしめ、壯丁を簽して、兵となし、その城を名づけて、庫特魯特八力兒といひ、路逕に熟悉する突克蠻人を募つて、導となし、沙漠の僻路より行く。前鋒の將、塔

布哈爾城

亦兒把河禿兒奴爾城に至り、亦た之を招下し、軍糧を餽り、速不台をして、其城を收撫せしめ、六千人を擇びて、城會伊里火といふものを送つて、搭布瑟の地に至らしむ。成吉思汗、城に至り、每歲稅若干を納むるを問ひ、乘、一千五百的那といふや、數の如く完納せしめ、十五年の春、布哈爾に至り、城を圍む。城の守兵二萬、守將を庫克汗といひ、部將を哈米特巴兒、塔牙達庫、尙赤汗、克什克里汗といふ。夜半衆を率ゐて、圍を突き遁れて、賽渾河濱に至る。成吉思汗の兵追ひ及び、盡く潰散す。城中の伊瑪姆及び文士等、出でて降る。成吉思汗、城に入り、教堂を見、王宮なるを疑ひ、馬を駐めて問ひ、民、教堂を以て對ふるや、成吉思汗、馬を下つて堂に入り、馬飢えたれば、速に馬を飼へと諭し、因つて經箱を取つて、馬槽となし、教士をして馬を守らしめ、又酒甕を以て堂中に置き、謳者を傳集して、歌舞せしめ、蒙古の兵、亦た歌呼して、樂をなす。成吉思汗、時を逾えて、復た城を出て、教士を講臺に上ぼし、民庶を傳集し、告ぐるにサルタン、理に背いて罪を獲るの事を以てして、曰く、爾等須く爾皆罪を天に得たるを知るべし、爾の主、尤も重しとなす。天、我を生じて、鞭を執るの牧人となし、以て群類を筆撻せしむ。汝等罪を上帝に得たるに非ずむば、天何ぞ我を生ぜむと。譯者

をして、其語を述べしめ、衆をして、周ねく知らしめ、又蒙古人をして、大軍を彈壓して、擾害せしむるなく、富民を籍し、窖藏の財物を出さしめ、二百八十人を以て、之を搜括し、餘民は丁賦に出して軍に贖はす。その時、内堡猶ほ未だ下らず、遂に城内の民居を焚き、民を驅つて濠を填め、悉く平地となし、矢砲環攻、堡破れ、守者悉く死す。凡そ三萬人、婦稚免るゝを得たり。その堡を夷げ、民を野に驅り、丁壯を取つて軍に従はしめ、或は撒馬爾干に徙し、或は搭布悉に徙す。春の末、賽拉甫散河に循ひ、遂に撒馬爾干を征す。

撒馬爾干の攻

花刺子模王謨罕默德、先に土耳其人六萬、塔赤克人五萬、大象二十を以て、撒馬爾干を守り、濠を浚ひ、水を蓄ふ。成吉思汗、訛脱刺兒に在り、撒馬爾干、垣堞高峻、守兵充足、一載に非ざれば破る能はざるを聞き、故に先づ兵を分つて、各處を取り、而して自ら布哈爾を取り、然る後に、師を進む。軍鋒至るところ、命に抗するものなし。惟だ色里普勒、搭布悉の兩城、寨のみ下らず、兵を留め、攻めて之を下す。成吉思汗、撒馬爾干に至る。尤赤等、三路の師亦た至る。御營を庫克薩萊に駐め、諸軍分つて城の四面

に駐まり、成吉思汗、城外を周巡し、形勢を相視するもの兩日。謨罕默德、すてに駐夏の地に往きしを聞き、即ち哲別、速不台をして、二萬騎を率ゐて、往いて追はしめ、又阿刺黑諾延、畢速爾、向幹、克石塔力堪をして、二處より兵を進めしむ。第三日の晨、城圍遂に合し、守將阿勒巴爾汗、尙赤汗、巴朗汗等、出でて、戦ひ、兩軍傷亡甚だ衆く、夜始めて戦を罷む。第四日、城を攻むるや、城民恟懼。第五日、又攻む。乃ち喀特社、喝烏里拉、斯拉姆及び伊瑪姆等、城を出て、款を納るゝあり、日を越えて、那馬斯喀、喝門を開き、大軍城に入り、即ち其城を墮し、城民男女百人に分つて、一隊となし、兵を分つて、城外の曠地に押送せしめ、喀特等五百人を率ゐ、入つて城を守る。成吉思汗、令を民間に下し、兵丁を藏匿するものあれば殺して、赦すなからしむ。その後、搜獲誅に伏するもの甚だ衆く、城中の象象、盡く之を曠野に放ち、多く餓死す。この夜、大軍仍つて城を出づ。城内の人免るを得ざるを懼れ、阿兒撥汗、夜千人を率ゐ、潜に出で、營を突いて遁る。次晨、大軍、内城を攻めて、その牆堞を墮れ、城河の源を塞ぐ。夜に至りて、城破る。千人あり、禮拜堂に入つて拒守す。射るに、火箭を以てし、焚くに、火油を以てし、盡く灰燼となし、守兵を驅つて城を出てしめ、兵民を二處に分ち、康里の兵三

萬をして、薙髮結辮蒙古人の如くせしめ、夜乃ち之を殺す。その將巴力世瑪思汗、托海汗、薩兒賽特汗、烏拉克汗以下、裨將二十餘人、皆死す。工匠三萬を取つて、各營に分置し、民丁三萬入つて城を攻め、隊餘の居民は舊居に復すを許し、二十萬的那を輸し、以て命を贖はしめ、降官巴克曷勒蔑里克、哀密兒、阿米特をして、收賦の事を主らしめ、兼ねて、降民を轄し、その後、復た屢ば調發せしが、故に、城民益す寥落たり。

成吉思汗兵を分遣す

この年夏秋、成吉思汗、撒馬爾干の境内に駐まる。軍中屢ば、花刺子模王麾下の人を獲たり、皆言ふ、その主驚惶措くなく、惟だ逃遁を謀り、其子只拉兒、哀丁、父に請ひ、各路の兵を集め、一血戰を決せむと欲し、而かも父允さずと。成吉思汗、先に哲別、速不台を遣し、各萬人を率ゐる往いて追はしめしが、こゝに至りて、復た脱忽察兒、把阿秃兒を遣し、萬人を率ゐて、繼いで進ましめ、三將を戒めて曰く、窮追して捨るすなく、もし彼の勢衆くして、敢て抗し、汝等力薄く、前進するを得ざらば、我が大軍に飛報せよ。屢ば人の言を聞くに、彼畏怯殊に甚しく、諒に必ず敢て抗せざるなり。もし彼勢盛りて遁るれば、山穴に入ると雖も、亦た必ずその往くところを窮め、過ぐる

ところの地、降者は之を安撫し、爲に官吏を置き、我が軍を阻遏するものあれば、必ず之を摧破せよ。三載を以て期となし、戴世特奇卜察克より、軍を天山に歸し、我と相見む。然る後、全軍東に返らむ。汝等の後、我復た拖雷をして、呼拉商蔑而甫、海拉特、爾沙不兒、賽兒黑思等の處を勦撫せしめ、又兀赤、察合台、窩闊台をして、花刺子模の都城を攻取せしめ、天の祐に頼りて、必ず盡く此事を畢り、乃ち凱旋すべしと。

成吉思汗、すてに三將をして、軍を整へて、花刺子模に往かしめ、自ら拖雷汗とし、

ばらく撒馬爾干に息ふ。哲別等三將、謨罕默德の後に従ひ、烹綽布に至り、阿母河を渡る。これより先、謨罕默德、忒耳迷斯河の濱に駐まりしが、布哈爾の陥りしを聞き、繼いで、撒馬爾干亦た陥りしを聞き、即ち河を渡つて遁る。母の族人烏拉匹延等、従ひ行き、之を害せむと欲す。その謀を洩すものあり、謨罕默德、夜、寢處を易へ、その帳を虚らす。次晨帳氈を視れば、皆箭孔、遂に爾沙不兒に奔り、官民を勸めて、嚴守せしむ。哲別、速不台、先づ巴而里に至る。城人軍裝糧糗を餽る、爲に守吏を置き、導者を募つて行き、大石把阿秃兒、前鋒となり、咱窪城に抵り、前の如く收降せむと欲す。城人

門を塞ぎて應ぜず、軍去るや、城人以て怯となし、鼓を鳴して辱置す。軍回つて攻むること三日、梯を樹て、城に下り、人に遇へば即ち戮し、之を焚燬して行き、將に備沙不兒に至らむとす。謨罕默德、先に伊斯法楞に赴いて圍獵せむといひ、警を聞くや、即ち可斯費音に逃れ、その母妻を遣して、喀爾魯克の地に往かしむ。將を塔赤哀丁答勒罕といふ、自ら群下に兵を避けむことを謀る。衆議して、希蘭山に上らむとす。すてに至るや、以て未だ可ならずとなし、羅耳の蔑里克海沙富智謀多しといひ、延いて至つて、計を議す。羅耳の會謂ふ、羅耳法而斯兩界の上に高山あり、帖克帖庫といふ、壤地寛大にして、人迹罕に到る、以て兵を避くべし。羅耳法而斯、舒勒沙班喀雷四處の兵、十萬を集むべく、力敵を禦ぐに足れりと。謨罕默德之を信せず、仍ほ其地に留り、兵を募る。哲別速不台、烹綽兒に抵り、阿母河を渡らむと欲するも、舟なく、木を伐り、枝を編み、幹を箱篋となし、輜重器械を内に置き、羊皮を外に裹み、馬尾を繋ぎ、驅つて水を洒ぎ、將士攀援して、隨ひ以て渡る。備沙不兒に至り、呼拉商部内の各守將に告ぐ、曰く、蔑執兒哀里蔑里克、曷非、曰く、法喝兒哀里蔑里克拉希、曰く、斐里特哀令、曰く、吉牙哀里蔑里克、佐贊、成吉思汗の諭を下して、招降し、並に軍裝糧糧を

謨罕默德の死

備沙不兒に獻ず。三人の來降、糧を餽りしを以て、哲別勸むるに、機を見て、自家を保ち、蒙古の兵、水火の狎玩すべからざるが如く、城あり衆あるを恃むなからむを以てし、復た予ふるに、成吉思汗の示諭を以てし、畏吾兒文を用ひ、哀密兒及び衆民に諭して、知悉せしめて曰く、東より西に至るまで、上天皆以て我に附す、降るものは、その家屬を并せて之を保護し、降らざれば、罪、親族に及び、咸な殺して宥さずと。これより、哲別、者温の路に須つて、徒思に向ひ、速不台は、大路より札姆に向ひ、中途降るもの、皆犯さず、降らざれば、力めて攻む。徒思の東の各塞堡、皆降る。而して、徒思命を拒み、殺傷甚だ衆し。徒思より、拉得康に往く。その地、花木甚だ多し。速不台、その地未だ擾れざるを喜び、官を留めて、主守せしめ、自ら喀部珊に往く。城人慢にして、禮重を加へざるを以て、之を誅し、凡そ呼拉商境内の堅城、多く過ぎて攻めず、沿途皆久しく駐らず、惟だ衣服糧食、牛羊馬匹を取つて行き、晝夜休まず。速不台は、伊斯法楞に向ひ、哲別は、馬三德蘭に向ふ。誅夷最も甚しきものは、阿模爾阿士特拉拔特、速不台、塔沒罕城に至るや、民避けて山に入る。土匪城に踞して守る。盡く之を殺し、又西模曇に至り、攻めて其民を敗り、耳來夷城に至り、亦た此の如し。謨罕默德、正

に阿塔畢奴思拉特哀丁、海沙勒富沙と議計す。而して、耳來夷の警至る、海沙勒富沙に懼れて、即ち羅耳に回り、他會亦た遁る。謨罕默德、喀隆堡に往く、蒙古の軍、知つて亟かに追ひ、中途にして相遇ひ、射つて、其馬を傷く。謨罕默德、堡中に在り、一日潜かに八格達に往く、追兵は、じめ、その堡に在るを謂ふや、之を攻む、すてにして、その已に行きしを知り、復た後より逐ふ。謨罕默德、道を改めて、雖而哲塞堡に入り、又基蘭に奔る。その地の哀密兒迎へて入れ、駐まること七日、又伊西搭耳の地に往く、從者盡く失す。又阿模爾所屬の低押乃に往く、馬三德蘭の哀密兒、亦た懇勸迎接す。然れども、蒙古の兵、蹤を跟ねて、到り、休息する能はず、馬三德蘭の教士に詢ひ、勸められて、嘎斯比海(裏海)内の小島に入る。謨罕默德、之に従ひ、未だ幾ならずして、又他島に易へ、以て蹤跡を掩ふ。哲別の軍、覓獲する能はず、遂に軍を回し、盡くその輜重珍寶を得、撒馬爾干に送致す。謨罕默德、土地財賄、盡く失ひ、又妻女皆虜へられ、幼子すてに刃を飲みしを聞き、悲悻病を成し、目も亦た昏み、終日啼哭、旋つて死し、島内に埋む。越えて數載、只拉兒哀丁、その屍を起し、阿勒的斤堡に送置す。

子 謨罕默德の二

謨罕默德在るの日に當つて、先にその子鄂斯拉克沙を立て、嗣となさむと欲せしが、海島に居るとき、改めて只拉兒哀丁を立て、その死後に及び、只拉兒哀丁、呼拉商、義蘭の境内、すてに蒙古兵なきを聞くや、乃ち芒格世拉克より、陸に登り、馬を覓めて、花刺子模に往く、その弟鄂斯拉克沙、亦た從つて往く。その時、朮赤等の軍、猶ほ未だ至らず、花刺子模の守將、曰く、徒智貝克里灣、曰く、哈勒烏思拉克、曰く、火者的斤、曰く、阿忽勒沙希巴、曰く、帖木兒蔑里克、守兵九萬。只拉兒哀丁、すてに至り、兄弟和せず、各黨を樹つ。衆、只拉兒哀丁の勇を畏れ、奉じて、其主となすを願はず、之を害せむことを思ふ。只拉兒哀丁、その事を聞き、乃ち出て、奔り、唎薩の路より、沙特巴黑に往き、行いて、阿思特畢失賽克の地に及ぶや、蒙古の兵に遇ひ、戰ふこと半時ばかり、先づ軍中より逸し去る。只拉兒哀丁の出奔するに當りて、朮赤等の軍、亦た將に至らむとす。鄂斯拉克沙、阿克沙、亦た奔り、前の戰地を經、亦た蒙古の兵に遇ひ、その將士從者を合せて、皆殺さる。只拉兒哀丁、沙特巴黑に至り、士馬を收集し、居ること三日、將に嘎自尼カズニに往かむとす。而して、蒙古の兵至る。只拉兒哀丁、その將蔑里克、伊勒的力克を留め、城外に在つて、敵を禦がしめ、自ら嘎自尼に往く。行の遠きに追ひ、

伊勒的力克亦た他道より行く蒙古の兵之を追へども及ばず只拉兒哀丁七日にして嘎自尼に至る。その地の兵民多く之を奉ず。こゝに於て、朮赤察合台窩闊台成吉思汗の命を奉じて、花刺子模を伐つ。

花刺子模の陷落

只拉兒哀丁昆弟の出奔するや、將に多從を領して行かむとす。乃ち忽馬爾木忽兒布喀あり、又統兵の將阿里あり、紳民を併せて共に守り、首領なきを以て忽馬爾を公擧して帥となす。その王母の族たるに由るなり。一日、游騎あり、城下に至りて、牛馬を掠む。城人その寡を欺き、城を出て、之を逐ひ、追うて一花園に至るや、伏兵内に在り、突出して圍攻す。追兵死するもの幾んど十萬に及ぶ。敗卒城に入り、蒙古の兵亦た從つて海蘭門に入り、日すてに西に沈みしを以て、仍つて退く。次日城を攻む。城將斐里敦古里五百人を率ゐ、城下に於て、之を拒ぐ。朮赤の昆弟、すてに至り、城の形勢を周視し、招降すれども下らず。城に近づく者なし。大木を伐つて濠を填め、三千人をして、往いて河道を截らしむ。城兵に圍攻せられて、盡く死す。これより、守者膽壯なり。朮赤察合台、素より協はず、師和せず、亦た律なし。城兵是を以て、屢ば

蒙古の兵を敗る。七閏月の久しき、城下らず。時に成吉思汗、塔里堪に在り、三子人を遣し、軍事を以て來り告ぐ。成吉思汗、その實を得て怒り、窩闊台に命じて、諸軍を總べしむ。窩闊台、乃ち兩兄の處に至り、極力和解、軍復た振ひ、攻めて之を下す。城内節を守をなし、巷戰七晝夜、民を驅つて、野に至り、約十萬人、婦稚工匠を以て、軍に從はしめ、壯丁は用ひて、前敵に臨ましむ。凡そ蒙古の兵、一人にして二十四人を分得し。民の兵に充つるものを計り、數五萬に逾ゆ。城中焚毀殆んど盡く、城に教士あり、捏直哀丁克兒費といふ、聞望素より著はる。成吉思汗、之を聞き、人をして、告ぐるに、速に城を出て禍に罹るを免るを以てし、且つ百人を以て從行するを許す。捏直哀丁、親族甚だ衆く、皆城に在り、當に衆と生死を共にすべしといひ、城破るゝに及び、亦た死す。

志耳迷斯城

成吉思汗、其年秋に於て、撒馬爾干より起行し、拖雷汗と偕に那黑沙不に往き、一路遊牧、帖木兒嘎兒哈(鐵門關)を過ぎ、先づ拖雷汗を遣し、往いて呼拉商を定めしめ、自ら志耳迷斯城に至る。河に濱す。攻むること十日にして、之を破り、民を驅つて、城を出てしめ、各軍に分つ。一老婦、大珠を藏す之を索むれども獻ずるを肯せずし。

て、口に呑む。その腹を剖いて、珠を出す。これより、死者の腹、多く剖かる。連格兒、特薩蠻に至りて、亦た殺掠し、軍を分つて、巴達克山を攻め、半は兵力を藉り、半は招撫を藉りて、皆平定し、命に梗するものなく、質渾河北、悉く平ぐ。

第三十四章 成吉思汗の西征 (下)

その翌年春、成吉思汗、巴而黑に至る。紳民禮物を餽る。仍つて、戸口を査閲し、民をして、城を出てしめ、各軍に分ち、すてにして、盡く之を殺し、民居を平毀す。これより、塔力堪に至り、その寨を攻めて、之を取り、又諾司雷脱柯を圍む。寨極めて堅固、守者皆敢死の士、七月未だ下らず。これより先、拖雷、先づ帖木兒、嘎哈兒、哈より、進征し、自ら中軍を統べ、他將左右の翼を率ゐ、蔑兒委察克の路に順ひ、巴哈、黑速兒を経て、皆之を取り、蔑而甫を取り、備沙不見に至り、又寨刺黑思阿陞、攸兒特、捏速徒、思札只關、朱溫、八吉兒、哈甫、賽罕魯特、巴特を取り、亦た備沙不見を取る。皆この年に在り。成吉思汗、塔力堪より、拖雷汗を召し、大暑の前に於て營に回らしむ。拖雷汗、遂に苦喝以斯算より、枯姆折、闌河を過ぎて、海拉特城を取り、乃ち歸つて、成吉思汗を見

汗蔑里克

兵を合して、塔力堪の堅寨を攻め、はじめて之を下す。察合台、察闊台、亦た花刺子模より來り、謁し、朮赤又至る。成吉思汗、復た進んで、八米俺を攻む。察合台の子莫根、矢に傷けられて卒す。この夏、成吉思汗、塔力堪に駐る。時に、只特兒、哀丁、嘎自尼に在り。蔑而甫の會汗、蔑里克、兵四萬を以て來り、從ひ、又突克蠻人、賽甫、哀丁、阿格拉、黑亦、四萬人を以て、從ひ、古耳の地の哀察兒、皆之に從ふ。はじめ、哲別、速不台の謀、罕默德を追ふに當りてや、脱忽察兒、繼いて進む。汗蔑里克、自ら國勢敗壞、蔑里克の地、久しく居るべからざるを以て、乃ち兵を率ゐて、古耳の古兒只、境内に入り、人を遣して、降を成吉思汗に納る。成吉思汗、即ち哲速等の將に令し、もし、汗蔑里克の地を経ば、肆擾を得ざらしむ。二將命の如く犯さずして、去る。脱忽察兒、後れて至り、軍に從つて、劫掠し、徵求一に、彘日の情狀の如し。その地、山居の人、與に戰ひ、脱忽察兒、陣沒す。汗蔑里克、人を遣し、成吉思汗に告げしめて曰く、我、我が主、謨罕默德に勸めて降附せしむ。而して、我が主、悦はずして、乃ち自ら滅亡を取る。我は、一意歸順、哲別、諾延、我が境を過ぐるや、擾さずして、去り、速不台、亦た此の如し。乃ち脱忽察兒、ひとり是の如くならず、山居の人、告ぐるに、歸服を以てせしも、彼聽かず、依然劫奪、八刺克勒の人

及び山居の人を將ゐて、驅逐以て交戦を致して、命を殞す。かくの如きの大事、豈に此等の人を以て兵に將たらしむべけむや、と仍つて衣服を以て成吉思汗に餽つて謝を爲す。然れども、汗蔑里克恐懼して自ら安んぜず、又只拉兒哀丁が奔つて、自兒に至り、衆集まりて勢盛なるを聞き、復た人を遣し、往いて防ぐ。

失吉忽秃忽

時に成吉思汗、古耳只斯坦、札布勒喀、不爾の地を嚴守す、皆要隘なり。失吉忽秃忽をして兵を率ゐて、南征せしむ。部將曰く、謨喀哲曰く、謨兒哈爾曰く、烏克兒古兒札曰く、古都斯古兒札、兵三萬とともに、以上言ふところの地を取つて、只拉兒哀丁を防ぐ。汗蔑里克、駐まるところの地、失吉忽秃忽の軍を距ること遠からず、蒙古の軍中、但だそのすてに降りしを知り、又只拉兒哀丁に歸附せしを知らず、陰かに告げて曰く、君は配爾彎に駐まり、必ずしも軍を移さず、我當に來り合すべし、と、汗蔑里克、潜かに己の衆并に康里人を引いて去るに及び、失吉忽秃忽は、じめてその異心あるを知り、亟かに之を追ひ、夜半追ひ及び、失吉忽秃忽、昏夜なるを以て、敢て浪りに戦はず、次曉を待たしむ。汗蔑里克、即ち夜に乗じて疾く引いて去り、天曉の時、す

失吉忽秃忽の敗

てに只拉兒哀丁の軍と合し、康里人亦た至り、勢益す盛なり、先のこと數日、謨喀哲、謨兒哈爾及び他將、幹里淹城を困しめ、已に將た下さむとす。只拉兒哀丁、忽ち配爾彎より馳せ至り、突攻し、千餘人を傷く、二將衆寡敵せざるを以て退いて河を渡り、營に駐まりて守り、繼いで復た進み、失吉忽秃忽と相合し、仍て前進し、敵亦た前進して、相合ふ。只拉兒哀丁、自ら中軍を率ゐ、汗蔑里克をして、右翼を率ゐしめ、賽甫哀丁、阿格拉黑をして、左翼を率ゐしめ、戦ふこと一日にして、勝負なし。失吉忽秃忽、軍中に令し、氈を縛して人に象り、士卒の身後に置き、連夜製成、以て勢を助けて敵を疑はしむ。次日、又戦ふ、敵軍果して援の至るを疑ふ。只拉兒哀丁、呼んで曰く、我が衆甚だ盛なり、必ずしも畏れざるなり、兩翼を分つて之を繞らすべし、と、こゝに於て、衆奮ひ、圍亦た漸く合す。失吉忽秃忽、軍士をして旗の向ふところを見、敵陣を衝突せしむ。然れども、すてに四面に敵を受けて、力支ふる能はず。遂に奔る。敵騎良多、馳せて追殺し、死者算なし。成吉思汗、敗信を聞き、憂色に形はれず、謂へらく、失吉忽秃忽、素より能く戦ひ、常勝に徃れ、未だ挫折を経ず、今この敗あり、當に益す精細、閱歷を増すべし、と、只拉兒哀丁、すてに勝を得、虜獲するところを分つ。汗蔑里克、賽甫

哀丁、阿格拉黑と一駿騎を争ふ。汗蔑里克策を以て、其面を掃つ。只拉兒哀丁、その王母の族人たるを以て、之を禁ぜず。賽甫哀丁、阿格拉黑怒り、夜、所部を率ゐて起兒漫沙克、闕庫特の山に入つて去る。只拉兒哀丁の軍勢、頓に弱く、又成吉思汗の至るを聞き、益す恐れて、即ち退いて、インド河を渡らむと謀る。

失吉忽秃忽敗れて歸り、成吉思汗を見、烏克兒古兒札、古都斯古兒札、戰陣の機宜を知らず、平日兵事を言ふや、極めて才あるに似たれども、陣に臨むに迫れば、乃ち毫も布置なく、以て敗衄を致すをいふ。成吉思汗、即ち自ら將として、師を起し、全軍皆塔刀堪を離れ、行速かにして飯を炊ぐに及ばず。前の戰處に至り、忽秃忽烏克兒の二將に、陣を何處に列せしか、敵陣の何の處に列せしかを問ひ、その善く地を擇ばざりしを責む。二將同じく訓斥を受け、嘆自尼に至り、只拉兒哀丁が十五日前、すてに行きしを知り、八龍牙里委赤をして、城事を轄せしめ、軍を引いて、亟かに追ふ。時に只拉兒哀丁、すてに船を備へ、將に明日に於て東に渡らむとす。成吉思汗、夜疾く行き、次曉追ひ及びて、之を圍み、生きながら、只拉兒哀丁を獲むと欲し、軍中に令

只拉兒哀丁の
邊

印度の師旋る

して、矢を發せざらしめ、復た烏克兒古兒札、古都斯古兒札をして、敵兵を阻遏し、河岸に近づかさらしむ。すてにして、敵兵漸く退き、河に至る。二將猛にその右翼を攻む。汗蔑里克、支ふる能はず、費薩倭兒に遁れむと欲す。而して、成吉思汗、すてに道路を截守し、汗蔑里克を殺し、右翼全く敗る。只拉兒哀丁、中軍を率ゐ、晨より戰つて日中に至り、左右の翼、皆覆没し、中軍わづかに七百人、左右衝突す。諸軍令を奉ずるを以て、矢を發せず、その圍を突いて出づるが爲に、盾を棄て、旗幟を執るや、只拉兒哀丁、その馬を策して、數丈の高崖より投じて、インド河に入り、水を泳いで逸す。成吉思汗、之を見、口を以て指を咬み、子に謂つて曰く、凡そ子たるものは、皆此の如くなるべしと、諸軍亦た追うて水に入らむと欲す。成吉思汗、之を阻止し、只拉兒哀丁の妻を獲たり。その子殺さる。その輜重、さきに已にインド河に投ず、善く洒ぐものをして、擄取せしめ、八刺諾延を遣し、衆を率ゐ、追うて印度に入らしめ、復た朵兒伯を遣し、同じく往かしむ。すてに印度に入るや、蹤跡を得ず、壁邊城を取り、又木而灘に往く。その地に石なく、木を伐つて筏となし、以て石を運び、攻具すてに備る。而して、暑氣甚だ熾なり、遂に蹠拉火耳壁薩烏爾蔑里克、甫爾の諸城を捨て、去り、大に

掠めてインド河東に回る。

成吉思汗、八剌を遣せし後、翌年春、歸つてインド河の上流に至り、窩闊台をして、往いて印度河下游の諸地を定めしめ、遂に嚙自尼に至り、其民必ず叛せむことを慮り、僞つて、戸口を査閲する爲し、民をして、城を出てしめ、之を俘戮し、工匠を取つて軍に従はしむ。八剌の敗るゝや、海拉脫城亦た叛く。按只吉歹に命じて、往いて攻めしめ、六月餘にして、はじめ下し、城を屠つて、一百六十萬人を殺す。軍旋るや、遣孽あらむを恐れ、復た兵を遣して、突往せしめ、再び二千人を殺し、惟だ十六人郷に居るを以て免るを得たり。成吉思汗、自ら印度河の西岸に循うて、北行し、只拉兒哀丁の餘黨を捕へ、醜類盡く平らぐ。窩闊台、すでに嚙自尼を定め、又人を遣し、命を稟けしめ、往いて昔義斯軍を攻めむと欲す。成吉思汗曰く、天すでに是、宜しく即ち回るべく、別將を遣して往いて攻めしむべしと。窩闊台、遂に該勒姆西北の路よりして回る。この夏、成吉思汗、暑を配爾鬱に避け、以て八剌諾延を待ち、悉くその進處を掠む。八剌、朵兒伯の至るや、成吉思汗、遂に古腦温庫爾干に往く。窩闊台亦た至り、配

克部爾に至りて冬を過ぐ。その地の會を薩拉爾阿黑默特といふ。自ら縛して來り降り、並に軍糧を饋る。地熱にして士卒多く病むを以て、民をして、毎戸黍米百斤を春き、士卒三人の食を供せしむ。士卒病癒ゆるに至るに及び、成吉思汗、印度より唐古特の路に至つて回らむと欲す。行くこと未だ數程ならず、唐古特又叛きしを聞く。一路山荒く、林密、道途險巖、水土惡劣、行旅病み易し。乃ち回つて、費薩倭兒に至り、仍ほ來時の路に循つて返る。傳ふるものは云ふ、成吉思汗の印度より還つて、鐵門關に次するや、侍衛一獸を見る。鹿形馬尾、綠色にして、獨角、能く人言をなし、これに謂つて曰く、汝の君、宜しく早く還るべしと。成吉思汗、之を怪み、以て耶律楚材に問ふ。對へて曰く、この獸は、角端と名づけ、四夷の語を解す。これ殺を惡むの象、今大軍西征すてに四年、蓋し上天殺を惡み、之を遣して陛下に告ぐ。願くは、天心を承け、この數國の人命を赦さば、實に無疆の福なりと。成吉思汗、遂に師を班へす。然れども、その説荒唐、誕に近く、殆んど信ずべからざるに似たり。

翌年、八米俺の山路に順つて行く。南征の時、輜重を八格闌に留めしを以て、之を取つて行き、質渾河を渡り、冬撒馬爾罕に至り、謨罕默德灘の母妻をして、輜重の前

成吉思汗軍を
圖へす

に在つて先行せしめ、故土に辭別して哭せしむ。諸軍後に在り、その哭をして聞か
しめざるなり。成吉思汗、費那兒河に至り、朮赤を除いて、外の諸子皆至り、會議すて
に畢り、徐行軍を回す。只拉兒哀丁、備沙不兒より嘆自尼に通る。時に哲別、速不台、人
を遣して、命を成吉思汗に請はしめて曰く、謨罕默德、すてに死し、只拉兒哀丁、すて
に通る。我等何の處に往き、命を待つて行くべき。惟だ望む、一二年間に於て、仰いて
天祐に頼り、主上立つるところの期限に違ひ、奇卜察克の地を繞り、蒙兀里斯單に
往かむと。

哲別・速不台
の西北遠征

その後、又屢ば人を遣して、事を奏せしむ。時に西域の地、亂多し、每次事を奏する、
皆三四百人を以て護送す。軍、義拉克に入り、哈耳城と百摸囊城とを取り、立亞城に
至つて之を掠め、枯姆城に至つて大に殺掠し、西、哈馬丹に行く。その酋、賽特密哲哀
丁、阿拉曷都勒、衣騎を餽る。官を遣して、入つて守らしめ、別隊薩哈斯に至り、其酋塔
勒沙拉赤庫赤布克汗の敗るところとなりしを聞き、遂に贊章に至りて大に屠戮
し、又可斯費貴に往き、民城を守つて罵詈せしを以て、力めて攻めて之を下す。民な

ほ力戦し、兩軍ともに五萬人を亡ひ、義拉克の境内、多く兵鋒に罹る。この年冬、寒最
も甚しく、兵、立亞境内に在り、成吉思汗、忒耳迷斯那黑沙不の地に在り、すてにして、
兵、阿特耳佩占に入り、過ぐるところ、殺掠し、將に台白利司に及ばむとす。部主阿塔
畢、鄂思伯克、匿れて敢て出でず、人を遣して、迎降し、牛羊馬及び衣服を餽る。二將即
ち阿而俺に入つて、冬を駐まり、谷魯斤に入らむと欲す。その部萬人來り禦ぎ、陣に
臨んで痛罵するに遇ひ、戰つて、其衆を敗る。その境内、路隘く林密なるを以て、退い
て、梅拉喀に往く。路、台白利司を經、部主復た官を遣す。薩木斯哀丁、土格雷といひ、出
て、軍資を餽る。進んで、梅拉喀を攻む。城主は婦人にして、戰事に習はず、城民乃ち
丁壯を募つて守となす。蒙古の軍、俘獲の衆を驅つて、城に爬し、退縮するものは斬
り、數日城破れ、大に殺掠し、的呀別起耳哀而陞耳に入らむと欲す。而して、哈馬丹城
に、謨罕默德の舊將、只馬哀丁、阿比亞あり、衆を糾めて、亂を作し、置くところの守吏
を殺し、並に、阿拉曷都勒を擒にして、獄に下す。二將復た哈馬丹に回り、その城を破
る。只馬哀丁、阿比亞、來り降る。仍つて之を戮し、哈馬丹を平毀し、那希拉嚮に往いて、
其城を破る。城酋降を乞ふ。之を允るす。又阿而俺に入り、苦拉白城を下し、貝列堪に

奇ト察克人

蒙古の兵はじめて歐羅巴に入る

往き、その城を屠り、甘札城を取り、又谷魯斤に入る。兵來り禦ぐ、哲別五千人を以て伏を設け、速不台迎へ戦つて、伴り敗れ、敵追ふや、伏起り、その衆三萬を殺し、失兒灣部に入り、得耳奔特の關門を破り、使を遣して、失兒灣沙に告げ、速に郷導の人を宛めて來らしめ、導者十人至るや、その一を殺し、善く路を導かざるもの、此例の如しといひ、阿蘭部に入る。阿蘭人、奇ト察克人を糾合して、來り戦ひ、勝負なし。二將、奇ト察克人に告げて曰く、我等皆一類、阿蘭は異類たり、我等當に約を立て、和を議し、相侵犯せざるべく、もし財物を欲せば、皆致餽すべしと。因つて、厚く之を遣る。奇ト察人、引いて去り、是に由つて、戦つて、阿蘭に克ち、大に殺掠す。奇ト察克人、散じ歸つて、備を爲さず。二將不意に出で、攻めて、其部に入り、盡く遣りしところの物を返す。敗衆多く逃れて、俄羅斯に入る。遂に速達克城に往く。城は海濱に在り、康里の但丁諾白爾城と相對す。其衆を敗つて、その城を下し、遂に俄羅斯界上に至る。俄羅斯は即ち今の露西亞、時にノルマンの基を開きしルリク家は、イルメン湖南トニエベルの流域、アルガ以南の地を領し、その正統はウラデミル太公たりしも、威令行はれず、諸州皆自立す。こゝに於て、警を聞いて、集り、蒙古の軍を禦がむとす。二將、その勢

の盛なるを見、兵を按じて動かさず。敵以て怯となし、亟かに進む。蒙古の兵退き、因つて追ふこと十二日、蒙古の兵、忽ち回り戦ひ、大に之をガルガ河畔に敗る。南俄の將士皆戦没し、生きて還るもの、十の一に過ぎず。全土の民震駭し、十字架を立て、祈禱をなし、又蒙古軍を迎へしも、蒙古軍、之を赦さず。ニカテルノスキタウラ地方を剽掠し、更に東北に轉じ、不里阿耳を陥れ、直に南下し、サカシンを経て、東し、成吉思汗命ずるところの路に違つて還る。

成吉思汗、親ら塔亦克を征して回り、その翌年、路に在つて、夏に駐まり、冬を過ぎ、行いて己の境に及ぶ。皇孫忽必烈、旭烈兀等、來り迎ふ。成吉思汗、行いて布哈蘇赤忽に至り、金帳を支へ、大に三軍を犒ひ、その翌年春、遂に回る。

第三十五章 宋金夏三國の均衡

はじめ蒙古の南侵するや、西夏は之に降り、その主襄宗、戦亂に乗じて、頻りに金を侵し、宋の嘉定七年、保安慶陽を攻め、涇州を取り、尋いて臨洮を取り、又書を以て宋に來り、金を夾攻し、以て故疆を復せむことを議せむとせしも、宋人之に應ぜず。

金兵、宋を攻む

同時に宋は起居舍人眞德秀の言を納れ、歲幣を罷めしを以て、金は愈よ衰微せり。然れども、すでに蒙古の兵を却け、成吉思汗又尋いて西征の途に上るや、邊警はじめて緩みしに因り、金の宣宗頻りに恢復の志を起し、先づ夏を討たむとせしも、左丞胥鼎異議ありしに因り、之を止め、歲幣を輸せざるを名とし、宋を伐つて償を取らむと欲す。こゝに於て、嘉定十年四月、烏庫哩慶壽完顔薩布に命じ、師を帥ゐて南征せしめ、遂に淮を渡り、光州中渡鎮を取り、兵を分つて、棗陽光化軍を圍み、別に完顔阿林を遣して、大散關に入り、西和階州を攻めしむ。

二路金軍の敗

張柔、蒙古に降る

その翌、嘉定十一年、金人棗陽を圍むや、宋將孟宗政、扈再興と兵を合し、之を禦ぎ、三月を経て、大小七十餘戰、大に金兵を敗る。而して、金の別軍は、大散關を焚き、進んで、西和成階州に入りしが、宋將吳政、之を敗り、二路の兵、皆潰えて、其志を果さず。この間、蒙古の穆呼哩は、成吉思汗に代て南征の任に當り、太原を陥れ、頻りに河東の諸州郡を取り、金の元帥烏庫哩德升等、之に死す。而して、金の中都經略副使賈瑄は、苗道潤と隙ありしに因り、計を以て之を殺せしが、道潤の將張柔、之を襲はむとし、紫荆關に至りて、蒙古の兵と遇ふや、戰敗れて、執へられ、因つて降つて河北都

金主の窘困

元帥となり、兵を帥ゐて南下し、遂に雄易保安の諸州に克ち、賈瑄を獲て、之を殺し、心を割いて、苗道潤を祭り、次いで滿城に次し、金將武仙と戰つて、大に之を敗り、完州を取り、祁陽曲陽の師を降し、遂に中山府を圍み、南して、金鼓城深澤、寧晋の諸縣を掠め、深冀以北、鎮定以東の三十餘城、風を望んで降附し、柔の威名、河朔に震ふ。嘉定十二年、夏、使を宋に遣し、師を會して、金を伐たむことを請ひ、宋之を許し、安丙兵を遣して、之に會す。すでににして、張林は、山東諸郡を以て李全に附して、宋に降り、金の威、愈よ衰へしに因り、宋は同時に並び攻め、先發して、之を制せむと欲し、趙方便、扈再興、許國、孟宗政等をして、道を分つて金を伐たしむ。宣宗四面敵を受けて、策の出づるところを知らず。こゝに於て、權を專にするの臣右丞相珠赫呼高琪を誅し、先に使を遣はして、和を議せしも、成らざりしに因り、又蒙古に使して和を求め、蒙古王を呼んで兄となさむとす。成吉思汗、西域に在り、允さず。尋いて、使を遣して、報せしめて曰く、向きに汝の主をして我に河朔の地を授け、彼此兵を罷めしめむと欲せしも、汝の主、從はず。今、汝の遠く來るを念ふに、河朔すてに、我が有たり、關西數城、未だ降らざるもの、割いて我に附せば、汝の主をして、河南王たらしめむと。

金又使を夏に遣して、和を議せしむれども、皆成らず。

穆呼哩の軍功

穆呼哩の兵、滿城に至り、金の恒山公武仙城を擧げて降る。史天倪、説いて曰く、今中原すでに略ぼ定る、而して、大兵過ぐるところ、猶ほ鈔掠を縦にす。王者民を弔ひ罪を伐つ、の意に非ず、且つ王天下の爲に暴を除く、豈に他軍爲すところに效ふべけむや、と。穆呼哩、之を善とし、即ち令を下して、標掠を禁じ、俘にするところの老幼を遣はす。軍中肅然たり。穆呼哩、すでに、士卒を戢め、州郡悦付し、遂に輕騎を以て、濟南に入る。金の嚴實、所部三府六州戸三十萬を以て、軍門に詣つて降る。時に金兵二十萬、黃陵岡に屯し、步騎二萬を遣りて、穆呼哩を襲はしむ。穆呼哩、之を破り、遂に黃陵岡に薄り、金兵を河に陥らしめ、進んで楚邱を破り、進んで東平を圍む。金將石珪、亦た來り降る。

穆呼哩の死

その翌、嘉定十四年、東平糧道絶えて陥り、穆呼哩、因つて、嚴實、石珪をして、之を守らしめ、自ら東勝州より、河を涉り、兵を引いて西し、夏を攻めむとす。夏人大に懼れ、兵を以て、之に附く。穆呼哩、金將哈達を敗り、之を追うて、延安府を圍み、自ら兵を分

穆呼哩死後の形勢

つて、南鄭坊等の州を取り、翌十五年十月、遂に金の河中を取り、又同州を取り、次いで、鳳翔府を攻めしが、晝夜苦戰四十餘日にして、下す能はず。將に河中より北に還らむとす。金の元帥都監侯孝順、河中を襲うて、之を破り、守將石天應を殺し、浮橋を焚いて退く。穆呼哩、天應の子應科をして、伐つて其衆を領せしめ、還つて、解州聞喜縣に至り、疾を以て卒す。穆呼哩、雄勇善謀、博爾濟、博勒呼、齊拉袞と俱に、忠勇を以て成吉思汗の創業を佐け、號を賜うて、都爾本庫魯克といふ、華言四傑といふが如し。四人の子孫、皆宿衛を領し、四集賽と號し、宮を出づれば、輔相となる。

穆呼哩、成吉思汗の依託を受け、獨り留まりて、東方を經略すること五年、金を弱め、夏を脅し、その功をなせしこと、少からず。その死後、蒙古南下の勢、一頓せし觀ありと雖も、この年、成吉思汗、恰も西征の師を旋せしを以て、蒙古の東方亞細亞に於ける、その勢力、毫も消損することなかりき。

宋金夏の三國

嘉定十四年、宋は、はじめて使を蒙古に遣して、好を通じ、將に遠交近攻の策を爲すに意あらむとす。而して、金の宣宗、夏の神宗、偶まその翌年を以て卒し、金の哀宗、

夏の獻宗、嗣いで立ち、其國に君臨せしが、兩國ともに兵戈に惱み、衰廢愈よ甚しからむとす。こゝに於て十七年、金は和を宋に請ひ、宋之を納れしに因り、軍民に榜諭して、更に南侵せしめず。この年、宋の寧宗亦た崩じ、史彌遠詔を矯めて、沂王の子貴誠を立て、名を更めて昀といふ。これを理宗皇帝となす。

理宗の即位

理宗はじめの名は與莒、宗室希樞の子にして、太宗十世の孫なり。はじめ、寧宗子多けれども、育せず。故に宗室の子を鞠ふ。名は詢を立て、太子となせしが、次いで堯、皇從弟沂の靖惠王亦た子なく、かつて宗室の子を以て、名を貴和と賜ひ、之が後となす。太子詢を失ふに及び、遂に貴和を立て、皇子となし、名を竑と賜ひ、濟國公に封ず。竑慧にして、輕なり、かつて史彌遠の權を專にするを疾み、異日容るべからずといふや、彌遠聞いて之を惡む。故に陰に之が計をなす。與莒、幼にして弄を好ま、群兒聚嬉すれども、輒ち獨り高に登り、坐して動かず。長上見るもの、指して群兒に語つて曰く、汝曹、この人に效はざれ。恰も一大王に相似たりと。群兒毎に其下に羅拜す。遂に趙大王の號あり。彌遠、物色して、之を得。かつて、取つて、舉に應じ得たり。特旨官に輔す。竑、すてに寧宗の子となるや、遂に與莒を以て、沂王の後となし、名を

三國の和

貴誠と賜ひ、邵州討禦使に除す。こゝに至りて、史彌遠遺詔を宣べて、位に即かしめ、竑を濟陽郡王に進め、出で、寧國府に判たらしむ。後、湖南の藩土、兵を起して、竑を立てむとして、敗れしに由り、竑亦た遂に殺さる。

宋金夏の三國、すてに主を易へ、宋金早くすてに和す。夏は、貞祐の初より、金と小故を以て、釁を生じ、難を構ふること十年、一勝一敗、遂に精銳ともに盡き、兩國皆弊するに至る。こゝに至り、夏主好を金に修し、弟と稱して、臣とせず。各本國の年號を用ふ。金亦た使を遣して、之に報じ、三國の和將に成らむとす。この時、若し蒙古の兵の、再び來襲する微つせば、東方の三故國は、平衡の勢を持續せしならむに、成吉思汗、西方征戍七年にして、旋り、形勢又一變せり。

第三十六章 夏の滅亡

宋の寶慶元年、成吉思汗、振旅してその故土に歸り、甲を卸し、しばらく兵を休めしが、穆呼哩の死後、東方の形勢漸く變ぜむとするを見るや、夏が仇人齊拉克和雙琨を納れ、又質子を入れざるを名とし、その冬十月、夏を伐つて、甘肅州西涼府を取

夏の獻宗の死

り十一月、靈州を取り、進んで鹽州川に次す。夏の獻宗、五十營の兵を以て來り援く。成吉思汗、直に兵を移して、往いて迎ふ。河水皆合し、兵皆氷上より行き、大に戦ひ、兩軍死傷多く、蒙古は十の一を失ひ、夏は之に倍す。夏主逃れてその都城に回る。成吉思汗曰く、彼この敗を經、力復た振ふ能はざらむと、甚だ意を措かず、往いて他城を取る。夏主之を聞いて憂悻し、その翌二年七月、終に卒す。國人その弟睨を立つ。

成吉思汗、盡く夏の城邑に勝ち、その民土石を穿鑿して、鋒鏑を避けしも、免るもの、百に一二なく、白骨野を蔽ふ。成吉思汗、暑を六盤山(甘肅鞏昌府附近)に避けて、月を踰ゆ。夏主睨、力屈して、出て、降り、遂に繋いで歸り、夏全く亡ぶ。時に宋の寶慶三年六月なり。夏は、元昊帝と稱してより、こゝに至るまで、凡そ十王、合せて二百一年。時に諸將争つて子女財帛を掠む。耶律楚材、ひとり書數部、大黃兩駝を取るのみ。すてにして、軍士疫を病むや、惟だ大黃を得れば、愈すべく、楚材之を用ひて、活かすところ萬人といふ。

この年春より、成吉思汗、身甚だ健ならず、夢に死期將に近からむとするを知る。

夏の滅亡

成吉思汗の沮落

この時、諸子側に在るもの少し。因つて、窩闊台、拖雷の今何に在るかを問ひ、拖雷等を召して、至らしめ、諸子及び從官を却け、之に謂つて曰く、我殆んど壽終るの時に至る。我、汝等の爲に、この基業を扞む。東西南北に論なく、この首より彼の首に至るまで、皆一歳の程期あり。我が遺命、他なし。汝等能く敵を禦がむと欲せば、多く民人を得よ。必ず須らく衆心を合して、一心となすべく、方に永遠の國祚を受くべし。我が死後、汝等窩闊台を奉じて、主となせ。と。又曰く、汝等各歸つて事を理むべし。我、この大名を享く、死すとも、憾むところなし。我願くは、故土に歸らむ。察合台、側に在らずと雖も、我が遺命に背いて亂を生ずるに至らざるべし。すてにして、六盤山に至りて、暑を避け、夏の降を納るゝや、病革る。その大臣に告げて曰く、我死するも且らく喪を發せず、敵をして知らしむる勿れ。夏主の來るを待ち、即ち盡く之を殺せ。と。又その左右に謂つて曰く、金の精兵、潼關に在り、南は連山に據り、北は大河に限らる。以て遽かに破り難し。もし道を宋に假らば、宋は金の世讎、必ず我に許さむ。兵を唐鄧に下し、直に大梁を擣かば、金急に必ず兵を潼關に徵さむ。然れども、數萬の衆を以て、千里赴き、援く。人馬疲弊、至ると雖も、戦ふ能はず。之を破る、必せりと。言訖つ

て崩ず。時に宋の寶慶三年(千二百二十七年)七月十五日なり。年七十五。後に廟を號して太祖といふ。

蒙古の諸將遺命に遵ひ、夏主來り調するや、之を殺し、然る後に喪を發し、柩を奉じて、老營に歸る。四鄂爾多、同日に哀を擧げ、遠近信を得るや、亦た皆喪に奔り、三月にして後、畢く集る。先時成吉思汗、一處に至り、孤樹を見て、之を愛し、樹下に盤桓すること、良や久しく、左右に謂つて曰く、我死せば、即ち此に葬らむと。その後、人あり、前命を述べて、遂に卜して樹下に葬る。葬後、樹皆叢生、後に密林となり、墓、何の樹の下に在るを辨ぜず。當日送葬の者と雖も、亦た能く識るなし。拖雷汗等、後に皆こゝに葬る。

成吉思汗の志

成吉思汗、深沈にして大略あり、兵を用ふること、神の如く、故に能く四十餘國を滅ぼし、遂に西夏を平げ、奇勳偉績、甚だ衆く、今傳ふるもの、散缺甚だ多しと雖も、嘉言懿行、往々にして書に見ゆるものあり、その詳は、一一擧げず。成吉思汗、かつて博爾朮等に問うて曰く、人生何者か最も樂しきと。博爾朮曰く、名鷹を臂にし、駿騎を

控へ、華服を御し、暮春の天出て、野に獵す、これを最も樂しとなす。と。博爾朮曰く、鷹の空より飛禽を搏撃するや、搏ち落さざれば止まず、騎に憑つて之を觀る、これを最も樂しとなす。と。虎必來曰く、圍獵の時、衆獸驚突、觀るもの最も樂しと。成吉思汗曰く、然らず、人生の樂は、仇敵を殲滅し、木の根を抜くが如く、その駿馬に乗じ、その妻女を納れ、以て後宮に備ふ、乃ち最も樂となす。と。成吉思汗は、天成の征服者なり。その敵に對する殺掠を恣にし、往々にして慘虐を極めし形跡ありと雖も、之を當時の風習に照らせば、必ずしも責むるに足らず。而して、その内治、殊に衆部の團結を牢固ならしむる方法に至りては、特に考察を値するものあり。

蒙古の民俗

蒙古には獨特の召集會あり、呼んでクリルタイといひ、王侯諸將より以下、諸部酋君長を會して、大汗の推戴は言ふに及ばず、其他の諸大事を議決す。之を概言すれば、さながら今日の獨逸等に見る聯合帝國の如く、重んずるところは輿論に在り。而して重望を大汗に歸せしめ、大汗の下には萬戸ありて、萬兵を指揮し、千戸二百戸十戸各長あり、上の命は決して違背するを得ず。故に號令嚴肅にして、遲滯の患なし。之に加ふるに、その俗、婦人は家政を處理して、内を齊へ、男子をして内顧の

憂あらしめず。成吉思汗又かつて曰く、人は日光の如く遠近燭らざるなくすること能はず。家事は内佐あるに頼る。夫或は外に出て、客その家に至るも、款接食飲、必ず豊腆を致して後に、婦職を盡したりといふ。遐邇稱譽、その家を視て其人を知るべしと。男子すべてに家政に與らず、その勉むるところは、狩獵に臨み、騎射に習ふに在り。故を以て、一旦事起れば、一人數馬を從へて、馳奔したとへば、驚駭掣電の如く、向ふるところ前なく、且つ専ら敵國の糧に依るを以て、兵數年に亘るも、内貨盡さず、財源缺乏することなし。成吉思汗が懸軍萬里、征戍四年の久しきを経て、中央亞細亞を戡定したる、豈に其故なしとせむや。後に、拔都の歐洲に於ける、旭烈兀の西部亞細亞に於けるや、皆亦た然り。

(四) 蒙古の隆昌

第三十七章 金の滅亡

太宗の即位

成吉思汗の第三子、窩闊台、和博より至り、察合台亦た西方より來つて、喪に會す。耶律楚材、太祖の遺詔を以て、諸王を召して、畢く會し、窩闊台を立てむを請ふ。時に少子拖雷、國を監し、諸王意猶豫して、未だ決せず。楚材、監國に言つて曰く、これ社稷の大計、もし早く定めざれば、恐らくは他の變を生ぜむと。拖雷乃ち諸王とともに、窩闊台を奉じて、位に和林的、東奎騰阿嚕の地に即かしむ。是を太宗となす。時に庶事草創、儀制簡率、楚材はじめて冊立の禮儀を立て、皇族諸王尊長をして、皆班列に就いて拜せしむ。又中原新に定まりて、未だ號令あらず、長吏皆自ら生殺を專にするを得、稍や意に忤ふあれば、刀鋸之に隨て、全家禍を被るものあるに至る。楚材以て言となし、命じて、之を禁絶せしむ。

蒙古帝國の分封

太宗都を哈刺和林に定め、諸弟に分つに、土を以てし、卓齊特は、花刺子模海北の地を得、察罕台は、海押立より、天山葱嶺一帶の地方を得、拖雷は、康核山、鄂諾河間の

地を得たり。耶律楚材専ら内治の任に當り、はじめて算賦を定めて、十路の課税所を置く。楚材かつて間に因つて太宗に周孔の教を進説し、且つ謂ふ、天下は之を馬上に得と雖も、馬上を以て治むべからずと、太宗深く之を然りとす。是に由つて、文臣漸く進用せられ、蒙古の文治はじめて觀るべきものあり。

太宗の南征

はじめ成吉思汗、朔漠の一隅より起り、西方經略をなし、亞細亞の大部分を征服せしと雖も、一日も東方を忘れたるに非ず。故を以て、太宗即位、専らその遺志を紹きて、兵戈を東に移せり。陝西山東の地、穆呼哩等の籌畫に因りて、早く蒙古に入りしを以て、史天澤劉瑒瑪爾蕭札拉を萬戸となし、漢兵を分統せしめ、將に金を視はむとす。この時、金は汴京に都し、僅に河南の地を保ち、潼關の險によりて、蒙古を防ぐのみ。宋の紹定三年の末、太宗、その弟拖雷とともに兵を帥ゐて、陝西に入り、京兆同華の間に翺翔し、諸山砦柵六十餘所を破り、遂に鳳翔に趨く。金人大に恐れ、平章事完顏哈達及び伊喇豐阿拉をして、省事を關郷に行はしめ、以て潼關に備ふ。その翌、宋の紹成四年、太宗、哈達豐阿拉と戰ひ、之に克ち、遂に鳳翔を取り、降將李

拖雷の征蜀

昌國の言を用ひ、兵を分ち、路を宋に借り、淮東より河南に趨き、之を夾攻せむとせしも、宋の沔州統制張宣、その使を殺せしを以て、別に策を定め、拖雷は、騎兵三萬を分つて、大散關に入り、鳳州を破り、華陽に趨き、洋州を屠り、興元軍を破り、別軍を派して、河州に入り、嘉陵を渡り、西水縣に至るまで、城寨百四十を破つて還らしめ、軍を合し、饒風關を攻めて、之に入り、金州より東して、將に金都汴京に趨かむとす。金人議して、城守せむとす。金主太息して曰く、南渡二十年、所在の民、田宅を破り、妻子を鬻ぎ、以て軍士を養ふ、今敵至るも迎へ戦ふ能はず、徒に以て自ら保つ、京城存すと雖も、何を以て國をなさむ、天下其れ我を何とか謂はむ、朕之を思うて熟せり、存亡天命あり、惟だ吾が民に負かざれば可なりと。仍て諸將に詔して、襄鄧に屯せしむ。十二月、蒙古の兵、漢江を渡り、金軍と戰ひ、大に之を敗り、哈達豐阿拉等、逃れ還つて鄧州城に入り、其敗を隠し、大捷を以て聞す。こゝに於て、民の城堡を保つもの、皆散じて、郷社に還り、數日ならずして、蒙古の游騎突至し、所在多く俘獲せらる。

汴京の合圍

この間、太宗は、河中を攻め、松樓を築き、高さ二百尺、城中を下瞰し、土山地穴、百道

三峰山の戦

並ひ進み、晝夜力戦し、遂に之を陥れ、次いで、西夏の人實克の計を取り、河中より、河清縣白坡に至りて、河を渡り、人を遣して、馳せて拖雷に報じ、師を以て、來り會せしめ、遂に鄭州に入り、その將、速不台を遣して、汴城を攻めしむ。金人議して、計を決し、外城を守り、樓櫓器具を修す。時に京城の諸軍、四萬に充たず、而して、城周百二十里、徧なく守る能はず、故に遷避の民を以て、軍に充て、又諸方より召集して、四面に分置し、每面千人の飛虎軍を選び、以て専ら救應せしむ。然れども、亦た軍する能はず。拖雷の軍、散漫して北し、過ぐるところの州縣、降破せざるなく、遂に唐州より汴京に趨く。金の完顔哈達、伊喇豐阿拉等、又鄆州より、赴き、援け、步騎十五萬、蒙古騎三千を以て之に屬し、金軍をして、休息するを得ざらしめ、然る後、金軍の三峰山に次するや、大軍を以て、之を圍み、金軍因つて大に敗れ、哈達は執へられて殺され、忠孝軍總領完顔禪嘉善、屈せずして死す。金の健將銳卒、これより俱に盡きて、復た爲すべからず。

鐵嶺金軍の覆

こゝに於て、圖克坦烏登、納哈塔赫仲、完顔重喜等、陝西の諸金將、潼關を棄て、東に還る。その衆、はじめ十一萬騎五千あり。蒙古の兵、之を追うて、及ぶ。山路積雪、晝日

和議敗る

蒙古、宋と約す

凍釋、泥淖涇に及び、軍に隨ふの婦女は、棄擲せられ、老幼哀號、路に盈つ。鐵嶺に至りて、戰はむとせしも、饑餓し、烏登赫仲、重喜、皆殺さる。三月に至りて、蒙古砲を立て、洛陽を攻む。金の警巡使強仲、力戦して之を却く。

太宗南征すてに二年、因つて、將に北に還らむとし、使を遣して、金主に諭して、下らしむ。金主、皇弟曹王鄂和を以て質となす、使未だ行かず。蒙古の速不台、力戦して、之を攻む。然れども、その遂に取るべからざるを知つて、止め、兵を退けて、河洛の間に散屯す。金の平帝政事完顔博索、恒怯無能、性復た貪鄙、軍士怨憤す。博索自ら安んぜずして致仕す。すてにして、金の飛虎卒申福等、蒙古の行人唐福等三十餘人を殺すや、金主問はず、和議遂に絶ゆ。時に蒙古の國安用、徐州軍亂れたるに乗じて、入つて據りしが、蒙古の帥鄂卓囉と隙を生ぜしに由り、金に降る。金、封じて堯王となし、東京尙書省事を行はしめ、姓名を賜うて完顔用安といふ。こゝに至りて、金主再び兵の至らむことを懼れ、復た民兵を僉して守禦の備をなし、遂に汴京の粟を括す。

十月、蒙古の拖雷卒す。六子あり、長は蒙哥、次は默爾根、三は瑚圖克圖、四は忽必烈、五は旭烈兀、六は阿里克布克。蒙哥は即ち憲宗にして、忽必烈は世祖なり。後に拖雷

を追駭して、睿宗といふ。十二月に至り、蒙古再び王楫を宋に遣し、夾攻して金を伐たむことを議す。京湖制置使史嵩之、以聞す。朝臣皆以爲へらく、復讎の舉を遂ぐべし、とひとり趙范喜ばずして曰く、宣和海上の盟、その初甚だ堅きも、以て禍を取るに至る、鑑みずむばあるべからず、と。理宗従はず、嵩之に命じて、使に報じて之を許す。嵩之乃ち鄒伸之を遣して、報謝せしめ、且つ汴京を夾攻するを議す。蒙古、成功を俟ち、河南の地を以て、宋に歸さむことを約す。

金主、河朔に走る

すてにして、汴京糧盡き、援絶え、勢益す危急、諸臣入つて議し、或は歸德を保つべしといひ、或は西山に沿うて、鄆に入るべしといひ、或は陳蔡の路を取つて、鄆州に往くべしといふ。右司郎中白華、必ず一決戰をなすべしといふ。金主従はず、翌日軍士を大慶殿に會し、諭すに、京城食盡き、今親出に擬するを以てし、遂に右丞相薩布平章事博索等をして、軍を帥ゐて扈從せしめ、參政納蘇肯、樞副兼知開封、薩尼雅布等をして、留守せしめ、乃ち汴京を發して、太后皇后妃主と別れ、大に働し、開陽門に至りて、留守の兵士に招諭して曰く、社稷宗廟、こゝに在り。汝等壯士、進發の數に預

博索を誅す

崔立の降

らざるを以て、便ち功なしといふ勿れ。もし保守虞なければ、將來の功賞、豈に戰士の下に在らむや、と聞くもの、皆泣を灑ぐ。すてにして、京西三百里、井窰なく、往くべからざるを聞くや、遂に意を決して、東行し、黃陵岡に次し、諸將の請に依つて、河朔に向ふ。蒙古の速不台、之を聞き、乃ち復た進んで汴京を圍む。
紹定六年正月、金主河を渡る、會ま大風あり、後軍濟る能はず。蒙古の輝爾古納、南岸に追撃し、金の元帥賀德希、力戰して死す。金主北岸に次し、之を望んで、震懼し、灑麻岡に次し、博索をして、衛州を攻めしめしが、功なくして退く。史天澤、騎兵を以て、白公廟に敗り、博索東に通れ、金主の魏樓村に次して、決戰せむとするや、之を阻みしに由り、副元帥阿里哈等六七人と、師を棄て、夜、舟に登り、潜に河を渡つて、歸德に走る。金軍皆潰ゆ。すてにして、金主歸德に入り、人を汴京に遣して、太后及び后妃を奉迎せしめ、諸軍怨憤するの故を以て、遂に博索を誅す。
汴人敗報を聞き、且つ金主の兩宮を奉迎するに會し、人情益す安んぜず。西面元帥崔立、性淫狡、民の洵々たるに因りて、潜に亂を爲さむを謀り、完顔訥蘇肯及び薩尼雅等凡そ十餘人を殺し、遂に兵を勦して、宮に入り、衛紹王の子從恪を以て、梁王

となし、國を監せしめ、自ら太師尙書令都元帥となり、欸を速不台の軍に送り、父を以て之に事へ、城に還つて、樓櫓を燒き、次いで天子の袞冕后服を以て速不台に進め、又在城の金銀を括し、搜索董滿、訊掠慘酷を極め、因つて又太后に諷し、天時人事を陳し、金主の乳母を遣し、歸德に入つて招降せしめ、遂に太后王氏、皇后圖克坦氏、梁王及び荆王守純諸妃嬪、凡そ車三十七輛、宗室男女五百餘人を以て、青城に赴く。速不台、二王及び族屬を殺し、后等を和林に送る。道に在るや、艱楚萬狀、尤も徽欽の時よりも甚し、速不台、汴城に入るや、立時に城外に在り、兵先づ其家に入り、その妻妾寶玉を取つて出づ、立歸つて大に働するのみ。

金主、蔡州に逃る

金主の歸德に在るや、富察固納、亂をなし、元帥什嘉紐、勦軍左丞相李蹊等を殺し、參知政事に拜せられ、益す暴横をなし、金主を照碧堂に幽す。金主日に悲泣し、近侍に語つて曰く、古しへ亡びざるの國、死せざるの君なし、但だ恨むらくは、我、人を知らず、此奴の困しむところとなるのみと。時に蔡州城に幸するを勸むるものあり、金主之を以て固納に諭せども、聽かず。衆、金主に諷して、早く計を爲さしめ、遂に固

宋軍金を撃つ

納を殺す。時に洛陽亦た陥り、中京留守強伸、屈せずして殺さる。金主、元帥王壁を留めて、歸德を守らしめ、遂に蔡州に如く。時に久雨、朝士扈從するもの、泥水中を徒行し、青棗を撥して、糧となし、足脛盡く腫す。明日、亳州に至る。金主、黄衣、皂笠、金兎鶒帶、青黄旗二を以て前に導き、黄繖後を擁して、従ふもの二三百人、馬五十匹のみ。すてに行いて、城中に次するや、父老道左に拜伏す。金主諭して曰く、國家汝等を涵養すること百有餘年、今朕徳なく汝をして塗炭ならしむ。朕亦た言ふに足るものなきも、汝輩祖宗の徳を忘るゝなくむば可なりと。皆萬歳と呼び泣下る。留ること一日、進んで亳南六十里に次し、雨を雙溝寺中に避く。蒿艾滿目、一人迹なし。金主太息して曰く、生靈盡くと。之が爲に、一働す。蔡に入るに及びて、父老道に羅拜し、金主の儀衛蕭條たるを見て、欲泣せざるなし。金主亦た歎歎す。遂に完顔呼沙呼を以て、尙書右丞となす。呼沙呼、金主を奉じて、秦鞏に幸せむと欲す。近侍之を欲せず。時に蒙古の兵、蔡を去ることや、遠く、商販頗る集り、金主之に安んじ、使を遣して、諸道に分遣し、兵を選せしめ、精銳萬餘を得、兵威稍や振ふ。

金主使を宋に遣して、糧を借らむとし、説かしめて曰く、蒙古國を滅ぼすこと四

蔡城の攻守

十、以て西夏を亡ぼし、夏亡びて我に及ぶ、我亡ぶれば必ず宋に及ばむ、唇亡うて齒寒きは、自然の理、若し我と連和せば、又宋の爲にするなり、と、宋許さず、これより先、宋將孟珙、金の武仙を順陽に撃つて、之を破走せしめ、遂に鄆州を復し、又馬蹬山に戦つて、遂に武仙を降し、これに次いで、史嵩之、兵を以て、蒙古の都元帥塔齊爾に會し、金を伐つて、鄆州を取り、紹定六年十月、二國の師、遂に蔡州を圍む。

金人はじめ蒙古の軍を敗りしを以て、塔齊爾、復た城に薄らず、長壘を分築して、之を圍む。宋將孟珙の來り會するや、益す攻具を修め、木を斲るの聲、城中に聞こえ、往々にして、投降を議するものあり。呼沙呼、之を激勵す。すてにして、宋軍、柴潭樓を陥れ、汝水を決し、蒙古の軍亦た練江を決し、外城を破つて、土門に逼る。金の總帥富珠理中、洛索崔出で、擊ち却つて敗れ、僅に身を以て脱る。呼沙呼、又日夕戰禦を爲し、金主御用の器皿を以て、戰士を賞し、又廐馬を殺して、之を犒ふ。然れども、勢すてに爲すべからず。

金主の禪位

幾もなくして、金の徐州、蒙古に降り、右丞相完顏薩布、之に死す。翌くれば、宋の端

金主の殂落

平元年正月、蒙古、元旦を以て會飲し、歌吹の聲、四望相接す。城中は饑窘して、歎息するのみ。宋將孟珙、黑氣城上を壓し、日に光なきを見る。降者言ふ、城中糧を絶つこと、すてに三月、降らむと欲するもの多し、と、珙乃ち令を諸軍に下し、枚を銜み、雲梯を分運し、城下に布いて、之を攻む。この夕、金主百官を集め、位を宗室、東面元帥承麟に傳ふ。世祖の後、博索の弟なり、承麟、拜泣して、敢て受けず。金主曰く、朕の卿に對する所以のもの、豈に已むを得むや。朕肌體肥重、鞍馬馳突に便ならず、卿平日趨捷にして、將略あるを以て、萬一免るを得、宗祚絶えざれば、これ朕の志なり、と、承麟起つて、璽を受け、明日即位す。これを末帝となす。時に孟珙の師、すてに南門に向ひ、萬衆競ひ進む。金の百官、賀を稱し、禮畢つて、亟かに出て、敵を提ぐ。而して、南城の陣、すてに宋の旗幟を立つ、俄頃にして、四面鼓噪、夾攻、聲、天地を震ふ。孟珙、塔齊爾の師を招いて、入らしむ。金の呼沙呼、精兵一千を帥ゐて、巷戰せしも、禦ぐ能はず。金主事の急なるを知り、即ち寶玉を取つて、幽蘭軒に竄き、之を環らすに、草を以てし、近侍に命じて曰く、死せば便ち我を火せよ、と、遂に自經す。呼沙呼、之を聞いて、將士に謂つて曰く、吾が君、すてに崩す、吾何を以て戰を爲さむ。吾亂兵の手に死せず。吾、汝水に赴い

て吾が君に従はむ。諸君其れ善く計を爲せと。言訖つて、水に赴いて死す。將士皆曰く、相公能く死す、吾輩ひとり能はざらむやと。こゝに於て、參政富珠理小洛索、烏凌噶瑚圖克總帥元志、元帥裕色爾赫舍哩栢壽烏庫哩和勒端、及び軍士五百餘人、皆從つて死す。承麟退いて、子城を保ち、金主の殂せしを聞き、群臣を帥ぬ、入つて哭し、衆に謂つて曰く、先帝在位十年、勸儉寬仁、舊業を復せむことを謀り、志あるも、未だ就らず。哀しむべきなり。宜しく諡して哀といふべしと。奠して未だ畢らず。城すてに陥る。諸將禁近ともに火を擧げて、之を燒き、京錫を奉御し、哀宗の骨を收めて、之を汝水の上に葬らむとす。蒙古の軍、宮に入り、參政張天綱を執らふ。孟珙、金主の在るところを問ふ。天綱曰く、城危き時、自經すと。珙乃ち塔齊爾と哀宗の骨及び寶玉諸物を分つ。この日、承麟亦た亂兵の殺すところとなり、金亡ぶ。

金の滅亡

金は、宣宗の世より、宰相樞密たるもの、往々事に臨んで、推讓し、低言緩語、以て相體を養ふとなし、四方の兵革災異ある毎に、輒ち聖主心困しむといひ、或は再議を俟ち、因循苟且、以て時日を度り、兵を出すに、及び、近侍を以て戰を監せしめ、事に臨んで牽制するところ多し。故に師出づるも功なく、國亂るも聞せず、以て亡ぶるに

底る。加ふるに、南渡汴に都してより後、兵を宋夏に連ね、内困憊を致す。哀宗の世、爲すに足るものなく、區々生聚し、存を亡に圖り、力盡きて乃ち斃る。まことに哀しむべきのみ。然りと雖も、國君社稷に死するは、殷紂以後、久しく聞くなく、哀宗愧づるなし。その後、宋の末路、亦た頗る相似たるものあり。金は、太祖阿古達、國を建て、より、承麟の亡ぶるに至るまで、凡そ十王合せて百二十年、ツングス族の勢力は、一朝にして、地を拂ふに至れり。

第三十八章 宋元の争端

金抽の分割

金、すてに亡び、穆延烏登、息州を以て降り、蒙古に殺され、徐州の完顔用安は、自殺し、武仙は、澤州に奔つて殺され、餘孽復た存するものなし。こゝに於て、二國は、前約に因り、陳蔡西北の地を以て、蒙古に屬し、宋は其餘を取る。蒙古劉福を以て、河南道總管となし、宋將史嵩之、孟珙をして、京西に分屯せしめ、端平元年、金の俘を太廟に獻じ、功を論し、賞を行ふこと、差あり。監察御史王遂言ふ、史嵩之、本と兵を知らず、功に矜りて、自ら侈り、身を謀ること、詭秘、君を欺き、國を誤る、之を襄陽に留むること

一日なれば、一日の憂ありと、洪杏襲亦た言ふ、殘金滅ぶと雖も、鄰國方に疆く、益す守備を嚴にするも、猶ほ、速ばざるを恐る、豈に色を動して相賀すべけむや、渙然として解體すれば、方に來るの憂を重くせむと。

宋、蒙古と戦ふ

金を滅ぼす、宋軍力戰の功、固より少しとせず、こゝに於て、趙范、趙葵、時に乘じて中原を撫定せむと欲し、河を守り、關に據り、三京を收復するの議を立つ、朝臣多く以て未だ可ならずとなす、ひとり、鄭清之、力めて其説を主とし、乃ち趙范に命じて、司を黃州に移し、日を刻して兵を進め、知廬州、全子才に詔し、淮西の兵萬人を合せて、汴に赴かしむ、范が參議官、丘岳曰く、方に興るの敵、新に盟つて退く、氣盛にして鋒銳なり、寧んぞ、肯て得るところを捐て、人に與へむや、我が師若し往かば、彼必ず、突至せむ、惟に進退據を失するのみならず、聲を開き兵を致すは、此より始まらむ、且つ千里長驅、以て空城を争ふ、之を得ば、餽餉を勤むべく、後必ず之を悔むと、范聽かず、史嵩之、亦た荆襄方に饑饉、未だ師を興すべからざるを言ひ、杜果亦た出師の害を陳す、范葵は、故の荆湖制師、趙方の子、兵に習ひ、攻取に銳意、山東の忠義を募るに、皆響應す、鄒仲之、さきに使して、未だ回らず、宋の師出て、仲之等、殆んど羈留

蒙古の南侵

せらる、金の故將、李伯淵等、崔立を殺して降り、子才、汴に次す、趙葵、又、滁州より淮西の兵五萬を以て、泗州を取り、泗より汴に趨いて、之に會し、次いで、葵、其將、楊誼を遣して、七月、遂に洛陽に入る、蒙古之を聞き、復た兵を引いて南下し、その翌日、之を復し、黃河寸金堤の水を決して、宋軍に灌し、宋軍多く溺死し、皆師を引いて南に還る、その十二月、蒙古、王楫をして、來つて宋を責めしめて曰く、何すれぞ、盟を敗るや、これより河淮の間、寧日なからむと、その翌二年、蒙古の太宗、その子、廬騰將、塔海等に命じて、蜀を侵さしめ、特穆德克及び張柔等をして、漢を侵さしめ、現布哈及び察罕等をして、江淮を侵さしむ、金の亡びて、郡縣皆降るや、ひとり、鞏昌德帥、汪世顯、堅守して下らず、こゝに至りて、蒙古、庫騰の軍を迎へて、降り、所部を帥ゐて、從征し、遂に嘉陵を截り、進んで太安に趨き、次いで、沔州に入り、知州事、高稼を殺し、又進んで青野原を圍む、利州統制、曹友聞、兵を將ゐ、救うて之を却け、兵を引いて、仙人關を扼す、すてにして、兵を移し、陽平關に戰つて敗死し、蒙古の兵、成都に入る、これより先、趙范の襄陽に在るや、北軍の將、王晏、李伯淵、樊文彬、黃國弼等を以て腹心となす、晏、

兩軍の勝敗

伯淵等亂をなし、其地の城郭倉庫を焼き、相繼いで、蒙古に降る。

十月、蒙古の庫騰、文州を破り、知州事劉銳等、之に死す。これより先、特穆德克の軍は、江陵を攻め、隨、鄂州及び荆門軍を破り、復た還つて江陵を攻めしが、孟珙兵を引いて之を撃ち、遂に蒙古の二十四砦を敗り、民二萬を還へして歸る。察罕の軍、眞州を攻め、その知州事丘岳善く防いて之を却け、その翌年十月、琨布哈、黃州より退き、火礮を以て安豐を攻むるや、知軍事杜杲力戰して之を却け、次いで、察罕の兵八十萬と號し、廬州を圍むや、杲亦た力を極めて、守禦し、大に蒙古の軍を敗り、江淮の間幸に安し、孟珙復た襄陽を復す。

孟珙蜀を守る

二路の兵、すてに功なく、蒙古の兵は、はじめ連りに蜀中に克ちしが、搭海の軍、宋の制置使丁黼の爲に、成都の石筍街に敗るゝに及び、遂に漢、邛、簡、眉、閬、蓬州、遂寧、重慶、順陽を取つて、引いて還る。次いで、搭海の兵、八十萬と號して、南侵せむとするや、孟珙謀して之を知り、豫め備をなし、蜀口に敗り、夔州以て全く、珙因つて、上流の事宜を條具し、蒙古が順陽の積聚を火し、遂に四川安撫使に拜し、屯田を制置し、夫を調

して、堰を築き、農を募つて種を給し、又南陽、竹林、兩書院を修す。こゝに於て、民皆戰守を知り、馳逐を善くし、無事なれば耕し、敵至れば戰ふ、蜀中仍つて安く、守備すてに成り、數ば蒙古の兵を敗る。

蒙古一撃して、金を擧げしと雖も、宋と兵を交ゆるに及んで、大に其志を得ざりしもの、同時に、東には高麗の征戍あり、西には成吉思汗の遺烈を紹ぎ、懸軍萬里、遠く師を出し、其力を集むるを得ざりしに因る、固より兵力相敵せざるに非ざる也。

第三十九章 高麗の形勢

高麗の内亂

高麗の仁宗、恭孝王、さきに金と和をなして後、その子毅宗、莊孝王、淫虐を以て、普賢院の變、廢放せられ、その弟明宗、光孝王、群臣に擁立されしが、郡縣の守將、前王の爲に義を唱へ、兵を起すもの多く、騷擾日に甚し。すてにして、前王毅宗は弒せられ、武臣愈よ權を弄するや、その跋扈に堪へずして、之を除くを謀るものあれども、皆成らず。將軍崔忠獻、政柄を執るに及び、遂に明宗を廢し、その弟神宗、靖孝王を立つ、この間、金は常に國事に干涉し、高麗の國威、愈よ衰ふ。すてにして、神宗の子熙宗、成

孝王に至り、崔忠獻亦た擁立の功を以て、恩門相國と稱せられ、興寧府を立て、便服蓋を張つて宮禁に出入し、侍從門客殆んど三千人に至る。熙宗その制を受くるを憤り、之を除かむことを謀りしも、事泄れて、紫燕島に遷され、明宗の子康宗元孝王を立て、次いで、その子高宗安孝王に至る。この時、忠獻國を擅にすること、すてに久しく、荒淫國政を恤まず、金亦た衰へしが、忽ち大遼の入寇あり。

大遼の入寇

これより先、遼の遺種金山金始の二王子、金の衰へたるに乗じ、國を建て、自ら大遼收國王と稱し、天成と改元して、金兵を避け、東方を席卷せしが、こゝに至りて、遼に鴨綠江を渡り、寧朔定戎等の境を侵せり。上將軍盧元純、大將軍金就礪、三軍を統べ、一時之を朝陽驛に禦ぎしが、後、涓州に敗れ、將軍李陽升等、之に死し、京師哭するもの、城に滿つ。遼兵勝に乗じて、西京を指し、大同江を渡り、西安道より進んで、溧州を犯し、更に長驅して、高州に寇し、豫州を陷る。宰相重房、奏して、太祖の苗裔及び文科の出身を論ずるなく、悉く軍に従はしめ、仍つて、趙冲をして、兵を順天館に點せしむ。然れども、驍兵勇卒、すてに忠獻父子の門客たるを以て、點し得たるものは、唯

契丹場

だ老少麻弱のみ、守禦愈よ難からむとす。
こゝに於て、蒙古の元帥哈真、使を遣し、同じく大遼を伐つを約し、金就礪、趙冲等、之と力を合せ、遼兵を伐つて、江東城に至り、遂に之を降し、且つ捕虜を各道州縣に分送し、閑曠の地を撰び、聚居し、土田を給して、農作を務めしむ。俗、これを契丹場といふ。

蒙古朝鮮を伐つ

これより先、崔忠獻、すてに死し、その子瑁、專恣父よりも甚しく、政事堂を己の第中に置き、以て政柄を掌握し、百官を黜陟し、その妻鄭氏の死するや、王后の例を以て、之を葬る。他は、知るべきなり。而して、その蒙古に對するや、反覆常ならず。かつてその使珠古を殺せしに由り、宋の紹定四年、蒙古兵を起す。高麗盡く蒙古署するところの官を殺す。蒙古の薩里台、來り侵し、龜州を圍む。高麗、兵馬使朴犀及び分道將軍等を遣し、一時之を拒ぎしが、蒙古の軍、大舉して、平州より京に入り、京城四門外に分屯するに至る。高麗大に驚き、閔曦を遣して、和親を結ばしめ、又上將軍趙叔昌を遣し、上表して、臣と稱し、方物を獻せしむ。すてにして、崔瑁、王を脅して、都を江華島に遷して、亂を避けむとするや、忽ち物議を招き、蒙古兵を以て來寇せしこと、幾

崔瑀父子

回なるを知らず。

この間、崔瑀は、晋國侯となり、勢に倚つて、威を作し、守宰を凌辱し、無賴の惡僧を集め、貨殖を事とし、宗室佞臣を其第に聚め、宴を張り、酣歌舞蹈、至らざるなし。瑀死するや、その子沈、葬に及び、門を杜ぢて出でず、父の愛妾に悉し、後亦た權威を弄し、國內の争擾を醸し、蒙古の侮を招きしこと、少からず。

蒙古の管府

高宗の末年、蒙古の車羅大復散吉大王等、亦た兵を領して、來侵し、古和州(咸鏡道永興府)の地に屯し、守將慎執平を殺す。當時、崔氏三世、權を弄し、國內疲弊し、蒼生塗炭に苦しみ、却つて、蒙古の來攻を喜ぶものあり、和州迤北は、大抵蒙古に附く。乃ち總管府を和州に置く。宋の淳祐元年、高麗復た蒙古に入貢して、平を請ふ。蒙古、高麗王をして、親ら朝せしむ。王、その族子を以て質となし、和成る。この年、蒙古の太宗崩ず。高麗の高宗、又幾もなくして薨じ、その子元宗順孝王立ち、蒙古に對する和親は、これより續き、唯だ其命に順服し、兵戈を交へざりしが、同時に我が日本との交渉を生じたり。

日本との交渉

はじめ、崔瑀の權を恣にせしとき、我が日本の邊民、高麗に入り、防護監廬と金州に戦ひ、轉じて、熊神縣に入り、その將鄭金德等と戦ひ、連りに沿海州縣を苦しむ。高麗王、深く之を患ひ、行人朴寅を我邦に遣し、牒文を送り、好を修め、邊民の侵掠を禁ぜむことを請ふ。その書、頗る無禮なり。太宰少貳武藤資頼、之を咎めず、又朝に請はず、直に其請を容れ、松浦の民九十人を斬り、答書を并せて、高麗王に送れり。後に其事露はるゝや、朝議之を不可とし、相摸守北條泰時に命じて、資頼の罪を處理せしむ。

倭寇の起原

我が日本は、源平氏以後、武人頻りに跋扈し、その志を得ざるもの、西陲に在りて、賊を爲し、一葉の舟、直に溟渤を凌ぎ、朝鮮近海に寇するもの、常に絶えず。元宗即位の初、大官署丞洪彦詹事府錄事郭王府を遣し、日本に如き、賊を禁ぜむことを請ひ、且つ牒して曰く、兩國交通以來、歲常に進奉すること一度、船は二艘に過ぎず。もし他船あり、托して我が沿海村里を擾さば、嚴に懲禁を加ふることを定約す。今春、貴國船一艘、熊神縣勿島に入り、その貢船を掠め、又椽島に入り、我が民産を奪ふ、甚だ交通の意に乖けり。請ふ掠めしところのものを懲して、兩國和親の義を固めむと、留

まること數月にして、洪汗等、日本より還り、復命して曰く、海賊を窮推せしに、對島の倭なり、と。

弘安元寇の遺因

この寇盜は、謂ゆる倭寇の祖たるものにして、その後、益々強大にして、我が戰國の末、支那の明末、朝鮮李氏の初に至るまで、絶ゆることなかりき。こゝに於て、高麗は、愈々我が邦を怨み、恨を呑むこと、すでに久しく、その後、元の世祖の支那を統一し、更に威を四境に耀かすや、之に訴へて、兵を起さしめ、自らその嚮導となり、遂に弘安の役、西海の颶風、十萬の船を覆滅し、却つて、我が日本の勢威を振ふの大事機を見るに至れりき。

蒙古の高麗に於けるや、略ぼ此の如く、その西征に至りては、功績の大、前古に比なきのみならず、世界史上、罕に觀るところ、次章之に就いて、やゝ詳細なる紀述を試むべし。

第四十章 拔都の歐洲經略

成吉思汗西征の志、未だ終へず、西夏の警を聞いて、東に還り、次いで、太宗その遺

拔都の即位

言を奉じて、自ら南侵して、金國を亡ぼすに暇なかりしが、故に、西方の經略は、すべて之を拔都に任したり。拔都は、朮赤の次子、太祖の孫なり。兄鄂爾達と相友爱し、父に従つて、西北の軍中に駐まる。朮赤すでに薨ずるや、皇弟斡赤斤、太祖の命を奉じて馳せ至る。鄂爾達、自ら才の弟に如かざるを以て、位を讓らむことを願ひ、乃ち拔都を定めて、嗣となす。未だ久しからずして、太祖の崩ずるや、斡赤斤、馳せ歸り、拔都亦たその兄弟と共に東に來りて、喪に會し、太宗を奉じて、位に即かしむ。而して、拔都の西征は、實に太宗の七年に始まる。

只拉兒哀丁の終始

はじめ、只拉兒哀丁、印度河を渡り、蒙古の追撃を免るゝや、殘卒を收めて、デルヒに入り、その公主を尙し、兵を借りて、西に向ひ、しきりに、克復を圖り、遂に也里を陷る。時にその主アシラフは、兄志利亞王モアザン、殞して、埃及のサルタンカミルより、ダマスカスを賜り、轉封の爲に去りて、其地に在らず。ルーム王アライブツデ、好を只拉兒哀丁に通ぜむとし、却つて、退けられしを以て、怨を衝み、使を志利亞に遣して、與に只拉兒哀丁を夾撃せむことを約し、兵を連ねて、大に之を敗る。只拉

兒哀丁乃ちアゼルバイジャンに奔り、その相シエリフ、ウルムルクをして、敵に當らしむ。蒙古の太宗之を聞き、綽兒馬罕を遣して、只拉兒哀丁を討たしむ。その報、一たび至るや、志利亞、ルーム皆和を講じ、只拉兒哀丁とともに、蒙古軍に當らむとす。只拉兒哀丁は、後宮珍寶をタブリツに止めて、自ら裏海の濱、阿蘭の兵を集めしが、蒙古の軍、急に至りしを以て、防ぐに暇あらず。又アゼルバイジャンに走り、急を告げて、援をアシラフ及び相シエリフ、ウルムルクに求む。この時、アシラフは埃及に之きて、來り救はず。ウルムルクは、叛を謀りて、誅せられ、ともに功なく、綽兒馬罕の大軍、蒲華に集まる。只拉兒哀丁、策の出づるところを知らず、乃ち使を遣して、也里を誘ひしも、來らず。蓋し蒙古ひそかに諸王公に諭せしが、爲めといふ。こゝに於て、只拉兒哀丁は、意を決し、赤思法杭の險を嬰守せむとせしも、アミド城主説くに、ムールを取り、奇ト察克と連和して、蒙古を制するを以てし、因つて意大に動き、アミドに向ひしが、その途上、蒙古軍に圍まれ、身を挺して、纔に逃れしが、チクリス、エウフラト、兩河分水嶺の地に走りて、グルド土人の爲に殺さる。時に宋の理宗紹定四年、秋、拔都の西征に先つこと四年なり。史に只拉兒哀丁の人と爲りを稱して曰

く、身は中人に逾えず、言笑寡く、膽略に饒陣に臨んで機を決し、衆寡敵せずと雖も、意氣自若、然れども、自ら其勇を恃み、示整に過ぎ、暇あれば酒を飲んで樂を爲し、往々にして事を誤る。しかも、嚴厲以て下を馭し、將士亦た多く怨む。蓋し、戰將の才、人に君たるの度に非ざるなりと、只拉兒哀丁、すでに死して、花刺子模朝の王統、全く絶ゆ。

拔都東歐に入る

東に於ては、金すでに滅び、西に於ては、只拉兒哀丁、すでに死し、西方亞細亞、概ね剿平に歸せしも、歐州の地、奇ト察克、俄羅斯の諸部、未だ定らず。こゝに於て、太宗議して、諸王を遣して、師を下す。朮赤位下の者は、鄂爾達、拔都、昔班、唐古成、察合位下の者は、貝達爾不里。太宗位下の者は、古余克、合丹、拖雷以下の者は、蒙哥、撥達にして、太宗の弟、闊列堅、亦た預り、拔都を以て、統帥となし、速不台、之に副たり。その兵、凡そ五十萬。その翌(一二三六)兵行き、速不台先づ布而嘎爾を平げ、翌(一二三七)奇ト察克に至り、その別部の會人、赤蠻を擒殺す。こゝに於て、浮而嘎に濱する諸部族、波爾塔斯の如き、毛而杜因の如き、薩克孫の如き、皆震懾、款服し、裏海以北、咸な定まり、この年

勒治贊克羅
納訥の二城

遂に俄羅斯の本地に入る。

はじめ俄羅斯の兵を破り、カルガ河畔に哲別の爲に敗るゝや、師を外に喪ひしと雖も、境内は恙なく、こゝに至るまで、十四載、諸侯王惟だ内鬪を事とし、復た外患を慮らず、毛而杜因人、俄と兵怨あるに因り、大軍を導いて、東南より南境に入る。その地の諸王、曰く幼里、曰く羅曼、勒治贊克羅、納訥の二城を分守し、援を物拉的迷爾の共王、攸利第二王に請ふ。而して、兵亟に至らず、蒙古の軍、勒治贊城を招降せむとし、民の賦十分の一を出して、歳貢となさしむ。幼里従はず、乃ち長圍を築き、その出路を絶ち、力攻五晝夜、六日に至りて、城破れ、幼里圍門之に殉し、城亦た焚かる。次いで、蒙古の全軍、克羅、納訥城に至るや、攸利第二王、その子、務賽服洛特をして來り援けしむに會し、ともに城下に戰ひ、守將羅曼陣没し、務賽服洛特逃れて物拉的迷爾に歸り、未だ幾ならずして、城又下り、その南の勃樂斯科城亦た下り、遂に北、莫斯科城に至る。

攸利の死

莫斯科城、建つてより、はじめて百年、守具未だ備らず、蒙古の兵、長驅して直に入り、攸利二王の孫を獲、東して、物拉的迷爾に趨く。こゝに於て、攸利第二王、その子、務

北俄の平定

賽服洛特、木思提、思拉甫をして城を守らしめ、自ら兵を引いて、錫第河畔に至り、南俄諸王の救を待つ。蒙古の軍、城に至るや、攸利第二王の孫、城下に在り、招降すれども肯んぜず、乃ち之を殺し、軍を分つて、蘇斯達耳城を降して歸り、物拉的迷爾を合圍し、その翌年(一二三八)春、城破れ、二守王戰没し、嬪御宮紳皆禮拜堂に入つて、拒守するや、焚くに火を以てし、薰灼して盡く死す。これより、數軍を分つて諸城を下し、北して錫第河に至り、背より敵營を衝き、攸利第二王、二姪と皆戰没し、兵士脱するを得るもの、僅に十の二三、乃ち軍を北に移して、諾拂郭羅特に趨きしが、天暖にして雪消け、道路泥濘なるを以て、その城に及ばずして退く、これを俄羅斯の極北境となす。はじめ、國を立つるとき、城を建て、都を此に定む、列城中、この城、歸服最も後る。

諾拂郭羅特、すでに兵を用ふるに足らず、乃ち轉じて、東南し、浮而嘎河、端河の下流に向ひ、行々、奇卜察克部を破る。その倉庫灘、西北、馬札兒に通れ、餘衆逃るゝに及ばざるもの、皆降り、遂に撒耳柯思阿速等の部を平げ、十一年春、阿速の蔑怯思都城を拔き、軍を分つて、東して、浮而嘎河を渡り、右而嘎爾の北境を略し、直に烏拉嶺の

南俄の平定

西北の地に至る。

拔都すでに士馬を休息し、乃ち南俄を謀る。計拔甫は南俄の大城なり、先時都を此に建て、三百載を歴、後乃ち物拉的迷爾を以て上邦となせしが、攸利第二王すでに戦没し、計拔甫王雅洛斯拉甫往いて援けむとせしも及ばず、蒙古の軍退くに乘じ、遂に物拉的迷爾に入りて、其兄の位を嗣ぐ、而して、扯耳尼哥王米海勒亦たその北行に乗じて、計拔甫に據る。十二年、拔都の軍、四耳司拉弗哀城に至り、之を降し、攻めて、扯耳尼哥城を下せしが、沸湯を以て、城に澆さしを以て、士卒を傷くること頗る衆く、仍つて退いて東し、嘎魯和城を掠め、東端河に至り、すでに計拔甫の旁援を絶つ、而して、帖尼博耳河、渡るを得ず、蒙哥師を河東に駐め、人を遣して、諭降せしむ、使者殺さる。冬に至り、河の凍合するや、拔都全軍を以て河を渡り、米海勒逃れて波蘭に入り、その將狄米脱里をして居守せしむ、蒙古の軍、攻具早くすでに備はり、晝夜力攻して、之に克ち、狄米脱里、傷いて未だ死せず、拔都その忠勇を以て釋るして、誅せず、復た哈力赤城を下し、達尼爾王復た遁れ、南俄の地、略ぼ定まる、乃ち波蘭馬札兒を謀る、皆俄羅斯南面の國なり。

波蘭

この時に方り、波蘭は、未だ強大ならず、一百年前、ピアスト朝のポレスラウ三世殂して、領土を諸子に分ちしより、子孫諸姪、相争うて擾亂熄まず、時にポレスラウ五世位に在り、克拉克城に治し、他に三部あり、康拉成は撒洛赤克城に治し、亨力希は伯勒斯洛城に治し、米夕司拉弗哀は拉低貝爾城に治す。十一年冬、一二四〇、拔都五軍を分ち、極北の一軍は、貝達爾、之を統ぶ、すてにして、前鋒、波蘭の柳勃林城に入り、外斯拉河の氷合に乗じて、河を涉り、森地米爾城を掠め、直に克拉克に至り、未だ城に及ばずして、返りしも、擄獲算なし、克拉克の將烏拉的米爾、來り追ひしも、敗れて退き、蒙古の軍亦た哈力赤に歸り、未だ幾ならずして、大隊波蘭の克拉克に入り、森地米爾の軍、來り禦ぐ。十二年、一二四一、の春、夕特羅物城に戦ひ、波蘭の軍大に敗れ、その王波勒司拉弗哀、土拉斯城に遁れ、蒙古の軍、遂に克拉克を焚き、進んで、拉低貝爾を取り、その酋米夕司拉弗哀、禦ぐ能はずして、北勒基逆赤に遁れ、その兄亨力希の軍に合す。こゝに於て、亨力希の伯勒斯洛城に、至れば、民自ら城を焚いて、河洲中の堅壘を守り、攻め易からず、蒙古の軍、引いて去る。これより先、分軍は、枯雅弗以

蘭斯克等の城を踏せるが、こゝに至りて、來り合し、勒基逆赤に至る。

この時に當り、亨力希シレンシ諸方の援を得、衆三萬を聚めて五軍に分つ。第一軍は日耳曼人、二三軍は皆波蘭人、四軍亦た日耳曼人、五軍は亨力希自ら所部を統べ、勒基逆赤城の西南瓦而司達忒ワルツニクに戰ふ。日耳曼人先づ進むや、蒙古人伴り敗れて、之を誘ひ、すてに、その後軍を離るゝこと遠きに及び、乃ち突騎を以て圍攻し、その衆盡く没し、その後、他の四軍先後來り援けしも、亦た敗れ、亨力希矛に中り、騎より墜ちて殺され、首を竿に懸けて、その部地を徇へ、敵の耳を割くこと、凡そ九巨捆、勒基逆赤城、すてに民自ら之を焚きしが、内堡甚だ固く、招下すれども、従はざるに由り、捨て去り、南して倭特馬赫城に至り、軍を駐むること半月、四鄰を分掠し、又拉低貝爾に至り、又西南不威迷亞に入り、倭耳默次城を困しめ、誘戰すれども出てざるに由り、遂に東南し、以て拔都の軍に應ず。

瓦而司達忒の大戦

馬札兒の征討

拔都の志は、馬札兒に入らむとするに在り。馬札兒は即ち今の匈牙利にして、匈奴アツチラの後裔その土に君臨せり。はじめ、アツチラ、黒海の北より轉徙して此

に至り、國を其地に立て、羅馬と戰鬥して境甚だ廣大、一時覇業を成せしも、その後甚だ振はず、アルバト王朝すてに幾世を経たる後、この時貝拉ベラ第四王、正に位に在り、その人と爲り、太平の明君たるも、亂世の英王たらず、馬札兒の地たるや、三面に山を環らし、險阨四塞、尤も兵を用ひ易からず、故に東南北の五道より入り、その一軍は、すてに波蘭を略したり。拔都の未だ馬札兒に入らざるや、先づ麾下の英人をして、諭降せしめ、自ら哈力赤に留まる。而して、馬札兒の部長貝拉、歸附を願はず、亦た備を設けず、わづかに、將士を遣して、喀而巴特山隘を守らしめ、木の伐つて、路を塞ぎ、以て戎馬を限る。これより先、奇ト察克の酋、庫灘、四萬戸を率ゐて、來り投じ、貝拉收めて、天主教に従はしめ、乃ち境に入るを許し、すてに命の如くす。貝拉自ら衆を得たるを以て善となす。而して、民間主客和せず、その主、非族を招致せしを怨み、蒙古の降を納れて來り攻むるを聞くに及び、民乃ち大に譁す。貝拉止むを得ずして、庫灘を獄に下す。十二年春、守隘の將、逃れ歸り、蒙古の軍、木を斬り、道を開いて入り、守兵盡く潰ゆといふや、貝拉、亟かに令を下し、兵を集む。はじめ、三日にして、遊騎すてに、派斯特城下に至る。貝拉、援助の大に集るを待つて、後に出て、戰はむと

欲す。天主教士烏孤領、以て怯となし、衆を率ゐて城を出づ。蒙古の軍、退く。之を逐うて、渾に入る。然れども、蒙古の軍、路徑を識り、游行礙なく、而して、追者皆客兵にして、土著なく、且つ鐵甲を擯し、身重くして行滯し、渾中に陥るや、之を擯射して悉く死す。惟だ烏孤領、逸して歸る。民又大に譁ぎ、蒙古軍、奇卜察克人多きが故に、庫灘を殺さざれば、將に内變を爲さむとすといふ。こゝに於て、庫灘遂に獄に死す。その部衆、散じて、布而嘎里亞國に之く。拔都の大軍、すてに馬札兒に入り、その威、森城を破り、速不台の軍、亦た東南より山を踰えて大軍に合す。貝拉の兵、集つて出づるや、拔都引いて退き、賽育阿東を過ぐ。色克河は、南杜惱河に匯し、而して、賽育、喝拉忒の兩河、又合して、色克河に入る。兩河合流の下游に、橋梁を爲りて、往來を通ず。時に夏初に、屆り、喀而巴特の山雪、融化して、溪河皆漲る。大軍こゝに駐まり、三面に水を環らし、險あり、阨すべく、且つ林中叢雜、敵の窺望を蔽ふ。貝拉追うて至り、橋東に守兵あつて、過ぐる能はざるを見、乃ち賽育河西に駐まり、千人を以て、橋界を守り、車を環して、營を爲り、盾を上懸け、儼として、壁壘の如く、而して、設備甚だ懈り、且つ林木の擁蔽なく、舉動瞭然たり。相持すること數日、拔都敵衆乘すべきを見、夜、一軍を進め

貝拉の敗走

て橋を過ぎ、一軍は繞つて、下游より潜に渡る。掠められし俄羅斯人あり、逸して馬札兒の營に入り、敵人夜に乗じて掩襲するを以て相告ぐ。而かも、仍ほ豫防せず。惟だ貝拉の弟廓洛曼、烏孤領と、その言を信じて、軍を引いて、夜巡し、橋西に至る。蒙古の軍、すてに橋を争ふ。兩かに攻めて、之を退け、卒を守界に増して、營中に歸り、益す酣寢し、以て患なしとなす。すてにして、蒙古の軍、櫛を以て、守兵を逐ひ、凌晨河を渡り、下游の軍、亦た騎りて、列をなし、その營を環圍し、矢下ること雨の如く、持して午に至り、西南の圍を開いて逸せしめ、而して後より馳逐す。衆すてに瓦解し、或は泥渾に陥り、逸するもの、幾もなく、賽育河水、盡く赤し。烏孤領、之に死し、廓洛曼、傷重く、逸すと雖も、旋つて卒す。貝拉は、良騎ありしを以て、遁れて深林中に入り、輾轉して、土拉斯台に至り、その婿波勒司拉弗哀に合し、馬札兒の君相、皆殺さる。その尸を檢するに、王印あり、拔都、馬札兒の降人をして、僞つて貝拉となし、四境に示諭せしめて曰く、居民安堵して、恐るゝなかれ、我少しく挫くと雖も、祐を天に求め、終には必ず大に勝たむと。且つ蒙古を嘗つて獐犬となし、人をして疑はざらしめ、降人を遣して、四出資諭、馬札兒の民、戰事の確耗を得ず。すてに示さるゝや、皆遷徙せず。軍至

合丹の戦功

る比、乃ち大に俘掠せらる。大軍賽育河より、派斯特に至り、その城を下す。合丹の一軍は、馬加の東南、馬拉荅境内の間道より、山を踰えて林に入り、魯丹城に至る。民兵出て、禦ぐ。軍すてに退くや、民兵以て怯となし、城に還つて燕樂し、陣に登らず、又城を閉ぢず、而して、軍大に至り、長驅して直に下し、日耳曼人の勇敢なるもの、六百を選購して、導となし、蝸拉丁城を破り、俘獲算なく、復た生托麻斯、札納特、丕勒克の諸城を下し、皆俘獲者を以て前驅となし、後より督攻し、積尸城濠に滿つるや、即ち尸上に於て仰登し、軍鋒及ぶところ、殘破せざるはなく、すてにして、古余克不里、撥綽と、拔都の大軍に合し、駐營休息、土人を分遣して、各城を主治せしめ、民賦を歛して、軍食に供す。

格蘭城

杜惱河を過ぎて、格蘭城を取らむと欲せしも、舟なくして、渡ることを得ず。冬、水はじめて冰り、格蘭の守兵、冰凌を捶鑿して、西渡を阻む。兩軍數ば、冰上に戰ふ。すてにして、寒甚しくして、冰合し、蒙古軍、堅否を驗せむと欲し、牛馬を河干に牧し、軍を移して、他に駐まる。隔岸の兵來つて、牛馬を奪ひ、驅つて河を過ぐ。水澤腹堅、敵之が險をなす。こゝに於て、萬騎齊しく進み、向ふところ、拔離す。拔都、合丹の兩軍、皆杜惱

貝拉の走踪

河を過ぎ、餘軍は、仍ほ河東に駐まる。拔都自ら格蘭を攻め、合丹を遣し、往いて貝拉を追はしむ。

貝拉の土拉斯に通るゝに當つてや、旋つて服を易へて、西行し、奧斯太里亞の境に入り、その主に伯勒司貝而城に遇ふ。勸むるに、杜惱河を過ぎ、蒙古軍、未だ能く西渡する能はず、復た危に乗じて、財賄を取り、奥界に近きの三城を以て質となす。以てせしに因り、貝拉、章敦貝而克城に至りて、その妻孥に遇ひ、ともに南境阿格拉姆城に往き、敵の動靜を待つ。こゝに於て、合丹、格蘭より布達に至りしも、貝拉に遇はず、城を焚いて去り、土度耳外生貝而克城に遷し、すてに南境に遁れしを聞き、進んで阿格拉姆に至れば、貝拉、司巴拉土城に遁れ、復た特勞恩城に遁れ、旋つて地中海島上に入る。合丹後より逐ひ、遇ふところの城堡、皆攻めず。すてに、特勞恩城に至れば、貝拉又海島より舟に乗じて、北に往る。軍を駐むること一月、乃ち引いて東し、塞而維亞國の耳拉孤薩城に趨き、大に喀滔城を圍み、旋つて拔都の令を奉じて東に返る。拔都、格蘭を攻め、礮三十架を立て、牆堞を毀ちて、内堡に入る。守將は、日斯巴尼牙人にして、錫門と名づく、設備甚だ密、乃ち去つて、麻訂耳司貝而克城、章敦貝

欽察汗國

而克城を困しめしが、皆下らず、その分軍は西、奥境に循ひ、直に地中海北の維尼斯國界に至り、又一軍は奥境の柯倫貝而克城、韋而乃斯達特城を擾し、皆旋つて退く。拔都の軍、東歐の地に滯ること七年、向ふところ、敵なく、將に北して日耳曼諸邦を蹂躪せむとす。すてにして、太宗の凶問、軍中に至るや、乃ち東歸の止むを得ざるに至れり。然れども、その地は、永く欽察汗國として存し、蒙古の威を歐亞の間に振へり。拔都は、後に憲宗二年を以て薨ず。なほ欽察汗國の始終は、後章別に述ぶるところあるべく、こゝに、再び蒙古大汗の東方亞細亞に於ける經略を續叙せむ。

第四十一章 太宗崩後汗位の繼承

太宗の文治

蒙古の太宗は、天資溫厚にして、頗る守成の英王たるに適し、内治の美をなせしこと、少からず。而かも又、成吉思汗の雄圖を繼紹し、南は金を亡ぼして宋と争ひ、東は高麗を屈し、西は遠く兵を出して、東部歐羅巴を蹂躪せり。宋の端平二年、和林を以て、會同の所となし、之に城づき、周五里ばかり、その翌年、成つて入慶し、その翌、宋の嘉熙二年、又和林の北に掃鄰城を築き、迦堅察殿を營む、耶律楚材、専ら政を掌り、

はじめ、交鈔を行ひ、萬錠を以て資となす。はじめ、蒙古唯だ進取を事とし、降戸は皆以て將士に與へ、一社の民、各主とするところありて、相統攝せず。こゝに至りて、詔して戸口を括し、賦税を定む。諸道の官符の如き、その初、自ら符印を爲り、僭越度なし。耶律楚材、中書省に請ひ、式に依つて鑄給し、名器はじめて重し。時に諸王貴戚、皆自ら驛馬を起すを得、道路騷擾、至るところ、須索百端。楚材復た請うて、牌劄を給し、分例を制定し、その弊、はじめ、革る。次いで、楚材又奏して言ふ、器を制するものは、必ず良工を用ひ、成を守るものは、必ず、儒臣を用ふ。儒臣の事業、數十年を積むに非ざれば、殆んど成し易からざるなりと。太宗曰く、果して然らば、其人を官すべし。請ふ之を校試せよと。乃ち課税使劉中、楊奐に命じ、隨郡考試せしめ、經義詞賦論を以て、分つて三科となし、儒人俘にせられて奴となりしもの、亦た試に就かしめ、その生匿して遣らざるものは死す。士を得ること、凡そ四千三十人、奴たるを免れしもの、四の二。楚材又衡量を一にし、鈔法を立て、均輸を定めむことを請ひ、庶政略ぼ備はり、民稍や蘇息す。次いで、宋の嘉熙二年に至り、太極書院を燕京に立つ。はじめ、濂溪周子の學、未だ河朔に至らず。楊惟中、師を蜀湖荆漢に用ひて、名士數十人を得、

はじめて其道の粹を知り、乃ち伊洛の諸書を収集して、燕京に載送し、師還るや、姚樞と謀り、太極書院及び周子の祠を立て、二程張楊游朱の六子を以て配食せしめ、趙復を請うて師となし、俊秀にして識度あるものを選びて道學を爲さしむ。これより、河朔はじめて道學を知る。

太宗の粗落

太宗性酒を嗜み、晩年尤も甚しく、耶律楚材數ば諫むれども、聽かず。乃ち酒槽鐵口を持して獻じて曰く、この鐵酒の爲に蝕せらるゝこと、かくの如し。況んや、人の五臟をや。と。太宗乃ち少しく減ず。宋の淳祐元年二月、疾篤くして脈絶ゆ。六皇后爲すところを知らず、楚材を召して、之に問ひ、依つて大赦し、十一月に至りて、疾愈ゆ。楚材太乙數を推して、田獵に宜しからざるをいふ。左右皆曰く、騎射せざれば、何を以て樂となさむ。と。出て、田獵すること五日、還つて、烏特古呼蘭に至り、誘多拉哈瑪爾酒を進めて、懼飲し、夜を極めて罷め、翌日殂す。在位十三年。はじめ、太宗旨あり、孫錫哩瑪勒を以て嗣となす。こゝに至りて、第六后孛羅瑪錦氏、楚材を召して問ふ。對へて曰く、これ外姓の臣、敢て知るところに非ず。自ら先帝の遺詔あれば、幸に之を遵

耶律楚材の人

行せよ。と。后從はず。遂に制を和林に稱す。

皇后、すてに制を專にし、鄂多拉哈瑪爾政を專にし、權中外を傾く。后、御寶空紙を以て、自ら書填せしむるに至る。耶律楚材曰く、天下は先帝の天下、朝廷自ら憲章あり、今之を紊さむと欲す。臣敢て詔を奉ぜず。と。又旨あり、凡そ鄂多拉哈瑪爾、建白するところ、令史爲に書せざるもの、その手を斷つ。楚材曰く、國の典故、先帝盡く老臣に委す。令史何ぞ預からむ。もし理に合へば、自ら奉行すべく、もし不可なれば、死を行ふも且つ避けず。何ぞ況んや、手を截つをや。と。后悦ばず。楚材憤悒、疾を成して卒す。或は之を譴して曰く、楚材相となること二十年、天下の貢賦、半は其家に入ると。后近臣に命じて、之を覆視せしむ。惟だ琴玩十餘及び古今書畫金石遺文數千卷のみ。楚材、字は晋卿、遼の東丹王突欲八世の孫、金の尙書右丞履の子なり。成吉思汗、天下を一にするの志あり。かつて、遼の宗室を訪ひ、楚材を召し、之に謂つて曰く、遼金の世讎、吾、汝の爲に之を報む。楚材對へて曰く、臣の祖父以來、かつて北面して之に事へ、すてに臣子たり。豈に敢て二心を懷かむや。君父を讎とせむや。と。成吉思汗、その言を重んじ、命じて左右に置き、以て訪問に備ふ。楚材博く群書を究め、天文地

理、律、歷、術、數、釋、老、醫、卜、知らざるものなし。成吉思汗、かつて太宗に語つて曰く、この人、天、我が家に賜ふ、爾後軍國の庶政、悉く之に委ぬべし、と。楚材、天資英邁、實かに人の表に出て、色を正うして、朝に立ち、勢の爲に屈せず、國家の利病、生民の休戚を陳する毎に、辭色懇切、太宗かつて曰く、汝又百姓の爲に哭せむと欲するか、と。楚材毎に言ふ、一利を興すは、一害を去るに若かず、一事を生ずるは、一事を減ずるに若かず、と。人、以て知言となす。至順の初に至り、太師を贈り、廣寧王に追封し、文正と諡す。元の創業、楚材の力、その最も多きに居る。

定宗の即位

宋の淳祐六年に至り、蒙古の諸王百官、太宗の長子庫裕克を立てむことを議し、その七月、昂吉蘇里默托里の地に即位す。然れども、朝政なほ六皇后に出づ。是を定宗となす。定宗在位三年にして、杭錫雅爾に殂す。皇后烏拉海額錫、庫春の子錫哩瑪勒を抱いて政を聽く。諸王大臣皆服せず。時に國內大旱、河水盡く涸れ、野草自ら焚け、牛馬死するもの十の八九、人生を聊んぜず。諸王及び各部又使を諸部に遣して、貨財を徵求し、或は西域回鶻に於て珠璣を索取し、或は海東に於て鷹鳥を取り、驛

憲宗の即位

騎晝夜絡繹絶えず、民力益す困しむ。この時、宗室親支、拔都を以て長となす。こゝに於て、諸部、河、勒、塔の地に會し、拖雷の子蒙哥(薛賚扣)を推戴し、次年又斡難克魯倫兩河發源の地に會し、宋の淳祐十一年、六月を以て遂に即位す。これを憲宗となす。この時、衆議一ならず、神器を覬覦するもの亂を謀らむとす。その大計を定め、内變を弭め、惟だ拔都に頼る。憲宗亦た諸王異同あるものを察し、並に之を羈縻し、主謀者を取つて、之を誅し、遂に便宜の事を國中に頒ち、不急の役を罷め、凡そ諸王大臣、濫りに牌印詔旨宣命を發する、盡く之を收め、政はじめて一に歸す。之に次いで、憲宗、諸王かつて錫里瑪勒を立てむと欲せしを以て、乃ち太宗の後克勒奇庫塔納を奎騰傲拉の西に徙し、諸王を各邊に分遷し、太宗后妃の家貴を以て、諸王に分賜し、定宗の後及び錫哩瑪勒の母厭禳を以て、並に死を賜ひ、錫里瑪勒を摩多齊の地に禁錮す。こゝに於てか、太宗の子孫と憲宗の親近とは、長く怨敵となり、後、遂に海都の離叛を起し、蒙古大汗國分裂の遠因となれり。

蒙古大汗國分裂の遠因

第四十二章 忽必烈の南侵

忽必烈、姚樞
を擧ぐ

憲宗即位、復た南方に事あらむとし、先づ其弟忽必烈に命じて、漠南を總治せしめ、府を金蓮川(宣化府赤城縣獨石口北)に開く。忽必烈、主として隱士姚樞を召し、待つに客禮を以てす。樞乃ち嘗數千言を造りて、之を上り、首に帝王の道と治國平天下の大禮とを陳し、彙して八目となす。曰く修身、力學、尊賢、親親、畏天、愛民、好善、遠佞と。次いて救時の弊に及び條三十を爲る。忽必烈、その才を奇とす。樞因つて又曰く、今土地人民財賦、皆漠地に在り、王若し盡く之を有せば、天子何をか爲さむ。後必ず之を問するものあらむ。若かず、惟だ兵權を持し、凡そ事之を有司に附すれば、勢順にして理安からむと。忽必烈、之に従ふ。はじめ庫騰の漠上諸軍を取つてより、因つて軍を留めて、境上に戍し、繼いで襄樊壽泗、復た降り、而して壽泗の民、盡く軍官の分有となる。これより、降附路絶え、歲に淮蜀を侵すと雖も、軍將唯だ剽殺を主とし、城に居民なし、野皆榛蕪。こゝに至りて、忽必烈、姚樞の請に従ひ、請うて、經略司を汴に置き、韓暉、史天澤、楊惟中、趙壁を以て使となし、唐鄧等の州に屯田せしめ、之に兵牛を授け、敵至れば戦ひ、退けば田を耕す。西は襄鄧に起り、東は清江桃源に運り、障を列して之を守る。

大理の平定

宋の寶祐元年、忽必烈、烏特哩哈達を以て諸軍事を總べしめ、三道に分れて大理に向ひ、臨洮より進み、山谷を經行すること二千餘里、金沙江に至り、革囊及び楫に乗じて、濟る。摩訶登主、迎へて降り、進んで、大理城に薄り、大に其兵を破り、其王般智輿を虜にす。般氏、石晋天福の初、はじめて、國を建て、大理といひしより、宋の熙寧中に至りて、般氏絶えて、高氏代り、元符の初、般氏復た興り、大理國と號せしが、こゝに至りて、遂に亡ぶ。こゝに於て、兵を分つて、附都部善、烏爨等の部を取り、進んで吐蕃に入る。

吐蕃の征定及
喇嘛教

吐蕃は、夙に佛教に歸依し、唐の天寶前後、その國に、唃唃雙提贊王あり、威令四方に行はれ、西は揭職、浩罕を服し、東は支那を脅し、使を印度に遣して、善海大師をベシガルより招きしが、蓮華生上師、即ち巴特瑪撒巴は、西北印度より、多くの陀羅尼秘密修法を齎らして、吐蕃に入りて、喇嘛密教の一派を起せり。蓋し喇嘛は、無上の義にして、高僧の稱なり。爾來その教、隆興するに従ひ、喇嘛の勢力、また增長し、時に或は君主を凌駕するに至り、吐蕃王朗達爾瑪、かつて之を抑壓せしを以て、弑せら

れ、その弟乞噶徠巴膽代り立ち、子孫又この教を信ぜしが故に、喇嘛教僧の勢力益す熾にして、蒙古の新に興る頃、拵底達喇嘛の威令吐蕃を掩ふ。忽必烈の入るや、その主蘇固圖懼れて出て、降り、因つて拵底達と和し、兵威加ふるところ、款附せざるもの鮮し。忽必烈乃ち烏特哩哈達を留めて、諸夷の未だ附かざるものを攻めしむ。これより先、西域竺乾國の僧納摩は、その兄鄂托齊とともに、浮圖を學び、定宗かつて鄂托齊に命じて、金符を佩び、使を奉じて、民瘼を省し、憲宗復た納摩を禮し、天下の釋教を總べしめ、鄂托齊亦た貴くして、事を用ふるに及び、喇嘛教、蒙古に入るの端を發せり。

交趾の征定

すてにして、烏特哩哈達は、吐蕃より進み、白蠻烏蠻鬼蠻の諸部を攻め、向ふところ風靡す。羅羅斯及び阿伯の兩國、大に懼れ、國を擧げて降り、又勝に乗じて、阿魯諸酋を攻め下し、西南夷悉く平らぎ、五城八府四縣蠻部三十七を得たり。こゝに於て、宋の寶祐五年、遂に交趾に入る。これより先、交趾は、仁宗乾德、宋と和して、後、國威漸く振はず、姪神宗陽煥、神宗の子英宗天祚を經、英宗の子高宗龍翰位に即き、内亂あ

り、陳季といふもの、之を平げて、勢威あり、次いで、高宗の子惠宗昂立ちて、在位十四年、位を女佛金に讓るや、陳季の孫嬰、之に尙し、仍つて禪を受け、國を安南と號す。李氏は九帝凡そ二百六十年にして、亡ぶ。陳季の代興は、宋の理宗即位元年に在り、西夏と金と未だ滅びず、成吉思汗復た西征に暇なし。こゝに於て、太宗陳嬰は、師を出し、外、占城を攻め、又宋の南境を侵して、國威や、揚りしが、こゝに至りて、烏特哩哈達、先づ使を遣して、降を諭さしむ。皆囚らへらる。兵、姚江に至るに及び、交人戰敗れ、陳嬰海島に走り、蒙古は前に遣はせしところの使を獄中に得たり。破竹を以て體を束ねて、膚に入る。縛を釋くに及び、一使死す。因つて其城を屠り、留ること九日、熱堪ふることを能はざるを以て、師を班へし、翌年安南歲幣を納れて、和を約す。

第四十三章 旭烈兀の西征

旭烈兀の西征

忽必烈が、南方交趾、大理、吐蕃を略し、宋室に逼り、大に其功を爲せしと同時に、その弟旭烈兀も亦た、命を受けて、西方回々教徒の叛亂を鎮定せむとし、憲宗即位の四年、宋の寶祐二年を以て、征途に上れり。時に波斯には、回々教亦思馬因派の教主

ジエラルエツチン、ハサムの後、ロツクエツチンといふもの、コヒスタンに據りて、威を西方亞細亞に振へり。然れども、裏海南岸の木刺夷部、しきりに凶虐を逞うし、久しく、蒙古の累をなし、且つ背後より來襲するの虞あるを以て、旭烈兀は、先づ兵を移して、之を殲滅せむことを圖れり。

木刺夷の起原

木刺夷は、元と國名に非ず。釋義、正路を捨て、迷途に入るの意。蓋し同教の人、之を嘗つて言ふなり。木刺夷人、亦た固より回々教を奉ず。はじめ教祖マホメット、在世の時、かつて、その門徒に語つて曰く、火教(即ち波斯祆教)は異派七十あり、猶太教は七十一あり、耶蘇天主教は七十二あり、我が教、將來殆んど必ず七十三に至らむ。と。然れども、その後、異派の數、百に踰ゆ。大抵上帝を論じ、神魂を論ずるや、意見路岐、喧嘩即ち起るも、未だ大に異ならず。その顯然、幟を樹て、相攻むるものは、教主の位を以ての故なり。マホメットの婿阿里、すでに戕せられ、次子忽辛、復た位を失ひ、教徒中に不平をなすものあり。すでに、哈馬發ありと雖も、仍つて、別に伊瑪姆を立つ。伊瑪姆、亦た教會の謂、特に哈馬發の權勢の如くならざるのみ。伊瑪姆は、必ず阿里の後、他族をして、擾越することなからしめ、阿里の靈魂、一脈相傳へ、伊瑪姆の體

木刺夷の版圖

に集るといひ、その説を穿鑿するもの、上帝の靈、亦た之に式憑すといふに至り、その位、益す變易すべからず。阿里の後、五世にして、札非而沙體に至り、すでに、その長子伊思馬哀耳を定めて、位を嗣がしめしが、その酒を嗜み、教規に背きしを以て、之を黜け、その次子を以て嗣となす。阿里の一派、十葉教中の徒、異議又起る。謂へらく、教主の位は、帝鑒こゝに在り、朝令夕改すべきに非ず、と。乃ち伊思馬哀耳の子を群奉す、これを伊思馬哀耳教となす。即ち木刺夷の自つて起るところなり。

北宋中葉の時、その教人、相率ゐて、波斯の地に至る。その頭目を哈山沙巴哈といひ、低楞に居る。宋の哲宗元祐五年、阿速模忒堡の長官を逐うて、其堡を奪ひ、又鹿忒巴耳堡を占め、同黨を裏海西南、山内險隘の處に分遣し、堡を築いて居らしめ、裏海東南、苦亦斯單の地、亦た此の如し。すでに、裏海の南岸を奄有す。塞而柱克王瑪里克沙、兵を發して、捕逐せしが、偶々卒せしによりて、兵亦た罷み、その勢、愈よ熾なり。

木刺夷の俗

哈山沙巴哈の教規、殊に慘毒を極む。謂ふ、凡そ徒黨は、必ず教を奉じて、仇人を殺すべく、陰謀刺を行ひ、必ず死を致して止む、と。塞而柱克の相、尼匝姆烏而瑪里克、首

として、刺さる。塞而柱克の後王散者耳、屢ば兵を遣して、往いて攻めしが、夜寝ぬるとき、人ありて、刃を地に卓ひ、書を案に遺すや、天曉之を見て、大に恐れ、遂に復た敢て兵を出さず。哈山沙巴哈死し、位を倫白賽耳堡主に傳へ、基牙布速而克烏米特といふ。刺客を蓄ふこと、益す盛にして、人を殺すこと、益す多く、與に交つて好きもの、仇とするところあれば、皆請うて忿を洩らすべし。その刺客を蓄ふの法、頭目居るところの堡内に、宮室苑囿を築き、務めて華美を極め、音樂佳麗、供奉奢侈、力を出して人を殺すを肯んずるものは、乃ち入つて蓄はるゝを得、童子十二歳より二十歳に至るまで、皆膽略ありて、死を畏れざるものを擇び、日に諭すに、天堂福地享用の樂を以てし、すてにして、醉はしむるに異醜を以てし、昏迷の時に乗じて載せて入らしめ、欲するところを縱恣し、その後復た飲んで醉はしめ、仍つて載せて出づ。醒後遇ふところを詢へば、乃ち謂ふ、教祖マホメツトの云ふところ、天堂福地も、殆んど以て過ぐるなく、この郷に終老すれば、大に快なるに庶幾からむと。乃ち命ずるに、往いて、某某を殺すを以てし、事成れば、その故處に復し、事成らず、不幸にして身喪ふも、魂は天に升り、樂亦た是の如くなるべし、といふ。こゝに於て、その人皆踊躍

木刺夷の交渉

して、命を用ひ、或は商賈となり、或は奴僕となり、千里を遠しとせずして、その志を行ひ、百發殆んど誤らず。回々、教、飲酒を戒む。而して、木刺夷人、ひとり禁せず、これ同教の冒稱名の由つて來るところといふ。

宋の寧宗慶元四年、木刺夷人、復た可斯費音左近の阿斯蘭庫沙堡を占む。花刺子模王塔喀施兵を以て至るや、僞つて降り、夜、地道より入つて、その兵を殺す。未だ幾ならずして、兵再び至るや、又降を請ひ、先後を分つて行き、以て侵地を納還せむことを請ひ、先行者、殺害されざれば、次を以て堡を出て、然らざれば、死守之を諾し、前隊去る後、繼ぐものなく、蓋しすてに盡く行く。その詭譎、概ね此の如し。

成吉思汗の西征するや、大軍すてに阿母河を渡る。木刺夷人、人を遣して、款を輸し、兵を免る。その後、花刺子模王只拉兒哀丁、印度より西に還つて、國を建つるや、その將鄂而堪をして、呼拉商を轄せしめ、その部人を侵掠す。鄂而堪、甘札に往き、刺されて死す。太宗即位、蒙古五將、西伐の役、木刺夷機に乗じて、塔密干を占む。只拉兒哀丁、將に之を伐たむとし、使至る。その相使者と同じく、飲み、醉ふに至つて、使者乃ち曰く、公等の軍中、皆我輩の人あり、特に公等、嘗然たるのみ、信ぜざれば、請ふ之を證せ

ひ、と従者その五僕を呼んで至る。一を印度人となす、謂ふ、某月某日、某處左右他人なし、即ち刃を加ふべく、未だ命を奉ぜざるを以て、故に發せず、と。その相大に懼る。只拉兒哀丁、之を聞いて、五僕を火に投じ、兵を用ひむことを議す。賦を輸し、貢を納るゝを以て、免るを得たり。

吉兒都苦

憲宗即位の二年、木刺夷の凶悍にして無道なるを以て、皇弟旭烈兀をして、軍を統べて西征せしむ。乃蠻の人怯的不花、萬二千人を率ゐて、先づ行き、次年苦亦斯單に入りて、その數堡を下し、復た塔密干に至りて、吉兒都苦堡を攻む。高く山嶺に踞して、徑攀援を絶ち、矢石仰いて攻むるも、及ぶこと能はず。怯的不花、營兩重を築き、深兩道を堀り、その將布里をして、駐めて守らしめ、自ら兵を引いて、左近の城堡を攻む。未だ幾ならずして、吉兒都苦の守者、營を劫して、布里を殺し、士卒を傷くこと頗る衆し。怯的不花、營を聞いて、亟かに回り、別に他將を遣し、回に往いて攻掠せしむ。吉兒都苦、病疫あり、木刺夷の酋長、阿刺愛丁、謀罕、默德、精銳百餘人を遣し、藥及び鹽を備へしめ、營を突いて入り、完守すること、故の如し。

木刺夷の國王

憲宗五年の冬、阿刺愛丁、謀罕、默德死す。阿刺愛丁は、じめて位を嗣ぐに當つて、僅に九歳、すでに長して、疾あり、癡に類す。醫、敢て治せず。阿瑪姆は天の如し、天豈に治すべけむやといふのみ。十八歳にして、子を生み、兀克乃丁庫沙と名づけ、定めて嗣となす。衆望之に屬す。而して、其父忌を懷き、之を虐待す。兀克乃丁庫沙、衆に告げて、謂ふ、我が父、事を理むる能はず、以て人心離渙、蒙古兵の來るを致すと。衆以て然りとす。一日、父酔うて、林間に臥し、人の殺すところとなる。威な其子主使せしむといふ。兀克乃丁庫沙、すでに位を嗣ぐや、遷つて梅門迭司堡に居る。憲宗六年、旭烈兀自ら西域に至り、怯的不花、庫喀伊而喀をして、苦亦斯單各城堡を力攻めしめ、遂に枯姆城に克つ。旭烈兀、噶部珊に使を遣して、兀克乃丁庫沙を諭降せしむれども、至らず。すでに進んで、波斯單に至るや、使を遣して、來り求めしめて云ふ、寬に一歳を限れば、當に自ら來り謁すべく、吉兒都苦堡、及び他堡は當に諭して、歸順せしむべし。と。旭烈兀、その意、兵を緩うするに在るを知り、且つ冬寒に及べば、蒙古の騎兵、山に入つて攻戰するに艱むを以ての故に、仍つて、西行して、その屬堡を下し、迭馬溫脫城に抵り、再び招降す。然れども、仍ほ至らず。梅門迭司、阿刺模忒、倫白賽耳の

木刺夷の降服

三大堡完守故の如し、旭烈兀乃ち三軍を分ち、布喀帖木兒、庫喀伊而喀をして、馬三德蘭より進んで、北軍たらしめ、台古塔兒怯的不花をして、胡瓦耳、西姆囊より進んで、南軍たらしめ、自ら中軍を將ゐて、東路となり、塔勒干城より進む。兀克乃丁庫沙又その幼子を遣し、來つて、款を諭せしむ。尙ほ十齡に及ばず。旭烈兀遣し歸し、軍を合し、進んで梅門迭司に至り、形勢を周視し、合攻を議す。衆將冬寒くして馬食に乏しきを以て、しばらく返らむことを請ふ。布喀帖木兒以て然らずとなす。乃ち復た人を遣して諭し、五日を限つて、出で降らしめ、許すに不死を以てす。兀克乃丁庫沙計窮り、その臣とともに出て、降る。時に憲宗六年の冬なり。盡く、その藏を獻じ、金玉寶貨甚だ多しといふ。

遲日、大軍堡に入り、兀克乃丁庫沙をして、人を遣し、蒙古官と偕に四十餘堡を諭下せしめ、盡く之を降つ。而して、阿刺模忒、倫白賽耳の二堡、仍ほ命を拒む。旭烈兀、自ら阿刺模忒に至り、力攻はじめて降り、その内藏書籍測量儀器等を得たり。時に苦亦斯單、亦た平らぎ、五十餘堡を下す。乃ち將を遣し、倫白賽耳を困しめ、久うして、之に克ち、又木刺夷人のシリヤに在るものを諭降し、其地全く定まる。

木刺夷の殲滅

木刺夷人、兇悍犇猛を以て稱せらる。故に兀克乃丁庫沙の降るや、衆皆之を殺さむと欲す。然れども、すでに誓約せしを以て、未だ果さず。幾もなくして、その自ら入朝を請ふや、乃ち之を途中に殺す。憲宗、かつて旭烈兀に諭し、盡く其地の人を除かしむ。こゝに於て、之を各營に分ち、その會の行くを俟つて、後に令を下し、少長となし、悉く誅し、苦亦斯單に在つては、一萬二千人を殺し、他處亦た此の如し。間ま脱するを得しものあれども、皆逃竄し、餘孽幾もなし。そのシリヤに在るものは、木刺夷といはずして、哈施身といふ。哈施身は、哈施設、即ち麻葉にして、其人善く之を以て酒を醸すが故に、名づけしといふ。歐人、哈施身といふ能はず。訛して、阿殺辛といひ、西人、暗殺を謂うて、阿殺辛といふは、蓋し此に本づくといふ。後に埃及の滅するところとなり、その族、全く滅ぶ。

旭烈兀、波斯を降す

木刺夷の殲滅するや、旭烈兀、直に軍を移して、マヒスタンを圍み、回教主ロツクエツデンを降して、波斯を滅し、進んで、八吉打に逼り、宋の寶祐六年、之を陥れ、哈利發モスタシム、ヒラを降す。こゝに於て、西方亞細亞に於ける回教國、すべてに滅び、サ

ラセン統、全く絶つ。而して、モスタシムの疏族密昔兒今の埃及に遁れて、なほ哈利發と稱す。こゝに於て旭烈兀、その軍を分つて、二となし、郭侃を總統とし、別に轉じて印度の伽濕彌羅地方に入り、奴隸王朝を侵略して、後顧の患なからしめ、自ら將として、西に向ひ、シリヤを襲ひ、密昔兒の兵をアレルボに敗り、更に回教徒の手より聖土エルサレムを奪ひ、之を耶蘇教徒に與へ、之と連和して、必ず回教の餘孽を殲滅せむと欲す。偶々憲宗不豫の報を得、尋いで訃音至りしを以て、果さず、なほ當年の拔都が太宗の殂落に際して兵を收めしと一般。こゝに於て、師を班し、使を遣して捷を獻ぜしめ、自ら既服の地に留まり、その子孫ウルミア湖東のアラグアに都し、阿母河外の地を領す、謂ゆる伊兒汗國、即ち是れなり。

第四十四章 憲宗の出師と世祖の即位

蒙古の形勢

東は高麗すてに款を送り、南は大理吐蕃交趾皆降服し、西は歐州に至るまで、數度の征伐、その功を爲し、遂に抗敵するものあらず、蒙古の版圖は、今や歐亞の二大陸に跨り、ひとり存するものは、喜馬拉耶以南と印度と、楊子江南の宋とのみ、こゝ

忽必烈の治績

に於てか、先づ意を専にして、宋を謀るの機會に逢着せり。忽必烈の吐蕃を伐つて歸るや、姚樞を以て、京兆勸農使となし、民に耕植を教へ、又輝和爾の人廉希憲を以て、京兆宣撫使となす。はじめ、此地、隴蜀を控制し、諸王貴藩、左右に分布し、戎羌を雜へ、尤も治め難しとなす。希憲、民病を講求し、強を抑へ、弱を扶け、境内大に安し、許衡といふものあり、河南に居り、幼にして、異質あり、稍や長じて、學を嗜むこと、飢渴の如し、然れども、世亂に遭ひ、且つ貧にして、書なく、かつて日者の家に從つて、書の疏義を得、難を徂徠山に避け、王弼の易略例を得て、夜は思ひ、晝は誦し、言動必ず禮儀を揆る。すてにして、亂少しく定まるや、河洛の間に往來し、姚樞に從つて、程朱の書を得て、益す得るところあり、尋いで蘇門に居る。かつて人に語つて曰く、綱常は一日も、天下に亡かるべからず、苟くも、上に在るもの、以て之に任ずるなく、むば下に在るもの、任なりと、忽必烈之を徵して、京兆提學となす。この時、秦人新に兵を脱し、學ばむとするも、師なく、衡の來るを聞くに及びて、喜幸せざるなし、こゝに於て、郡縣皆學を建て、民大に之を化す。忽必烈、専ら文治を以て、中土を經略す、その志、遠に在りといふべし。

忽必烈、譏を被る

忽必烈又邢臺の人劉秉忠を擧げ、征伐謀議皆與らしむ。こゝに至りて、憲宗、城市を建て、宮室を修め、都會の所となさむとするや、忽必烈、秉忠を以て薦め、乃ち命じて地を相せしめ、因つて、桓州の東、灣水の北、龍岡に城づき、命じて、開平府といひ、三年にして功を畢ふ。すてにして、或は、忽必烈を譏するものあり、仍つて、阿拉克岱爾に命じて、省事を京兆に行はしむ。忽必烈、樂まず。姚樞曰く、帝は君なり、大王は弟として、臣たり、事與に較べ難し、遠ければ將に禍を受けむとす。若かず、王邸の妃主を盡くして、自ら朝廷に歸せむには、と。忽必烈、憲宗を見るや、皆泣下り、竟に白するところあらしめずして止む。然れども、忽必烈の置署するところの諸司、皆廢す。

蒙古の南侵

宋の寶祐五年八月、蒙古の諸王伊遜克、駙馬約索爾等、宋を伐たむことを請ふ。憲宗又前に使囚らへられしを怒り、乃ち諸王阿里克布克に命じて、和林を居守し、阿拉克岱爾をして、之を輔けしめ、自ら南侵せむとす。軍四萬、十萬と號し、三道より分れて入る。憲宗は、隴州より散關に趨き、諸王穆格は、洋州より米倉に趨き、萬戶布爾察克は、潼關より沔州に趨く。その翌六年九月、憲宗遂に劍門に入り、十一月、鵝頂堡

忽必烈の南進

を攻めて、守將を殺し、穆格、塔齊爾、並に地を略して還り、兵を引いて來り會し、十二月、關州に入り、守將楊大淵を降し、その翌、開慶元年二月、合州を圍む。この時、忽必烈、又用ひられ、兵を悉くして、淮を渡り、遂に自ら將として、大勝關、河南汝寧府羅山縣南に由らむとし、張柔は、虎頭關に出で、道を分つて並に進み、烏特哩哈は、交趾より還り、その子阿珠とともに、潭州、湖南、長沙府を圍む。諸方の警、愈よ急にして、宋の社稷、命すてに旦夕に逼りしが、忽にして、一事變あり、しばらく、其餘命を延ぶるを得たり。

憲宗の殂落

憲宗、合州を圍むこと久しく、守將王堅、力戰して、之を禦ぐ。七月に至り、憲宗軍を督して、之を攻めしが、克たず、偶ま疾を得て、城に殂す。諸王大臣、二驢を用ひ、蒙らすに、輜輳を以てし、之を負うて北行し、合州圍解く。憲宗、沈斷寡言、宴飲を樂まず。自ら祖宗の法に遵ふといふ。回鶻かつて、水精盤、珍珠傘を獻ず、銀三萬餘錠に値すべし。憲宗曰く、方今百姓疲弊、急とするところは、錢のみ、朕ひとり之を有するも、何を用以む、と。之を却く。太宗の末年、群臣權を專にし、政出づる門多し。憲宗に至りて、凡そ詔旨必ず親ら起草し、更め易ふること數四、然る後に、之を行ふ。群臣を御す

ること甚だ賤かつて諭して曰く、汝が輩もし朕の獎諭を得ば、即ち志氣驕逸災禍未だ随つて至らずむばあらず、汝が輩其れ之を戒めよと。然れども、酷だ巫覡卜筮の術を信じ、凡そ事を行ふや、必ず謹んで之を叩き、殆んど虚日なく、その殂するや、或は飛矢に中りしが故なりといふ。

忽必烈、江を渡る

宗王穆格、合州より人を遣し、憲宗の凶計を以て、忽必烈に告げ、北に遶り、以て人望を繋ぐことを請ふ。忽必烈、出師未だ功を成さざるを以て可かず。その將董文炳の言に従ひ、遂に江を渡りて、鄂州(湖北武昌府)を圍む。こゝに於て、宋は中外大に震ひ、内侍董宋臣、都を四明に遷し、以て其鋒を避けむことを請ふに至る。軍器大監何子舉曰く、若し上行幸すれば、京師百萬の生靈、何の依頼するところと。御史朱貔孫亦た曰く、變輿一たび動けば、三邊の將士瓦解して、四方の盜賊、蠶起せむと。皇后亦た蹕を留め、以て人心を安ぜむことを請ふ。帝遂に止まる。寧海節度使判官文天祥、宋臣を斬らむことを請へども、報せず。

賈似道

賈似道といふものあり、賈貴妃の弟なり。少にして落魄し、游博をなし、操行を事とせず。はじめ、蔭を以て、嘉興司倉に補せられ、累りに籍田令に至り、同知樞密院事

賈似道、忽必烈と和す

を加へられ、樞密使、兩淮宣撫使となり、龍遇日に隆に、權勢當るなく、蒙古の南侵するや、右丞相兼樞密使に拜し、漢陽に軍して、鄂を援く。忽必烈、使を遣して、鄂州を招諭せしむ。守將張勝、その使を殺し、出でて、戰つて死す。時に諸路の重兵、咸な鄂に聚り、蒙古の兵、永全より潭に至り、江西大に震ふ。似道乃ち黃州に入る。すてにして、蒙古鄂州を攻むること益す急にして、城中死傷者萬三千人に至る。似道大に懼れ、乃ち密に宋京を遣して、蒙古の營に至らしめ、臣と稱して、幣を納れむことを請ふ。忽必烈許さず。會ま合州の守臣王堅、阮思聰、踔急流をして、鄂に走り、蒙古王の計を以て聞かしむ。似道再び京を遣して、往かしむ。忽必烈亦た阿拉克岱、斡等が阿里克布克を立てむと謀るを聞き、托郭斯をして、民兵を括せしめ、因つて、群臣を會して議す。郝經策を獻じて曰く、もし彼果して遺詔と稱し、便ち位號を正し、詔を中原に下し、赦を江上に行はせ、歸らむと欲するも、得ひや。願くは、天王社稷を以て念となし、師を班して、和を議し、輻重を置き、輕騎を率ゐて歸り、直に天都に至り、二軍を遣し、大行靈身を迎へ、皇帝の璽を收め、使を遣して、旭烈兀、阿里克布克諸王を召し、和林に會興し、官を諸路に差して、安輯し、長子精吉木に命じて、燕都に鎮守し、示すに形

勢を以てせば、大賚歸するあり、社稷安からむと、憲宗の后、亦た使を馳せて、鄂に至り、速に歸らしむ。忽必烈、以て然りとなし、宋京の至るや、臣と稱し、江南を割いて、界となし、歲に銀絹各二十萬を奉ずるを許し、遂に砦を抜いて去り、張傑、閻旺をして、烏特哩哈達に諭して、潭州の圍を解かしむ。而して、その還るや、賈似道、夏貴をして、殿卒百七十人を、新生磯に殺さしむ。

世祖の即位

忽必烈の北に還るや、諸王合丹、穆格塔齊爾ともに、開平に會し、旭烈兀は西域より使を遣して、勸進し、惟だ阿里克布克のみ、至らず。廉希憲等、力めて言ふ、先づ發すれば、人を制し、後れて發すれば、人に制せらる。逆順安危、間髪を容れず、宜しく早く、大計を定むべしと、忽必烈之を然りとし、正當なるクルルタイの決議を経ずして、遂に位に即く、是を元の世祖となす。時に宋の景定元年三月なり。

蒙古の内訌

はじめ、憲宗の定宗に嗣ぐや、察合台の孫哈喇帖魯の寡婦オルガナをして、定宗の爲に立てられし、也速蒙哥に代りて、察合台汗國の主たらしむ。こゝに於て、皇弟阿里克布克は、オルガナを退け、也速蒙哥の姪アルグイを立つ。すてにして、忽必烈

の立つを聞くや、阿拉克岱爾に命じて、兵を漠北諸部に發せしめ、心腹を遣して、將佐を易へ置き、金帛を散じて、士卒に賚し、又劉太平、霍魯懷に命じ、關中の錢穀を拘收せしむ。時に渾塔噶、先朝より兵に將として、六盤に屯す、太平等、陰に相結納す。渾塔噶、復た人を分遣し、成都の密喇卜和卓、青居の奇塔特布哈に約して、事を舉げしめ、漠北居住の宗族は、クルルタイを開いて、阿里克布克を和林に擁立す。五月に至り、京兆廉希憲は、その陰謀を知り、人を分遣して、太平魯懷等を掩捕し、仍つて、劉瑤爾を遣して、密喇卜和卓を成都に誅し、汪惟正は、奇塔特布哈を青居に誅し、又總帥汪良臣に命じ、秦鞏諸軍を帥ゐて、渾塔噶を討たしむ。渾塔噶、京兆の備あるを知り、西河を渡つて、甘州に趨き、阿拉克岱爾、和林より、兵を帥ゐて、適ま至り、遂に軍を合して南す。時に諸王哈丹、亦た騎兵を率ゐ、巴崇、汪良臣の兵と合し、三道に分れて、之を拒ぎ、すてに陳するや、大風沙を吹くに因り、直に敵を衝き、大に甘州の東に戦ひ、渾塔噶、阿拉克岱爾を殺し、關隴悉く平らぐ。希憲、自ら劾せしと雖も、世宗その意を知りて、金虎符を賜ひ、平章政事に進む。蒙古大汗兄弟の争は、こゝに熄み、主權一に歸せしと雖も、定宗、憲宗の二族は、互に快らず、世祖の即位、國の慣例に因らざり

しを辭とし、臣禮を執らず、蒙古大汗國分裂の兆、すでに成れり。

正 蒙古内政の更

蒙古は太祖より以來、諸事草創、設官甚だ簡、斷事官を以て、至重の任となす。位三公の上に在り、之を大必且齊といふ。兵柄を掌るは、左右萬戸のみ、後稍や金制に倣ひ、行省及び元帥宣撫等の官を置く。こゝに至りて、世祖すでに立つや、大に制作を新にし、遂に劉秉忠許衡に命じ、古今の宜を酌し、内外の官制を定め、その政務を總ぶるを中書省といひ、兵柄を乗るものを樞密院といひ、黜陟を司るものを御史臺といひ、その次は、内に寺監院司衛府あり、外に行省行臺宣慰廉訪あり、その民を牧するには、路府州縣あり、官に常職あり、位に常員あり、食に常祿あり、その長は、蒙古人之を爲して、漢人南人貳たり。こゝに於て、一代の制は、じめて備はる。阿哈瑪特廉希憲相次いで、平章政事となり、姚樞は中書左丞となり、吐蕃の喇嘛帕克巴を國師として、釋教を總べしめ、太廟を燕京に建て、後穆呼哩四世の孫安圖を右丞相、宋子貞を平章政事となし、その後、阿里克布克の歸降するや、都を燕京に遷して、之を大都となし、開平を上都となす。

第四十五章 宋の滅亡(上)

蒙古の南征

蒙古の内訌、すでに平らぎ、復た宋との交渉を生ぜむとす。はじめ、賈似道の和を成すや、一に專斷に出て、理宗固より知らず、似道深く和を議し、臣と稱し幣を納るゝ事を匿し、殺獲せし俘卒殿兵を以て上表し、諸路大捷、鄂の圍はじめて解け、江面肅清、宋社危うして復た安く、實に萬世無疆の休なりといふ。帝、似道を召して、朝に還らしめ、百官郊迎、一に文彥博の故事の如くし、少師衛國公を加へ、將士官を進むること差あり、似道の權、愈よ重く、群小を進用し、法制を變更せしこと、少しとせず。その七月に至り、蒙古翰林侍讀學士郝經を遣して、好を修めしむ。似道、その謀の泄れむことを恐れ、經を眞州の忠勇軍營に拘留す。經、屢ば上書すれども、皆報せず。驛吏の防守、獄犴よりも嚴なり、介佐或は堪ふる能はず、經、之に語つて曰く、命を得て此に至る、死生進退、その彼に在るに聽かず、節を守つて屈せず、盡く其れ我に在り、豈に能く不忠不義にして、中州の士大夫を辱かしめむや。但だ公等不幸、須らく死を忍んで、以て待つべく、之を天時人事に揆るに、宋祚殆んど久しからず、と、衆その

言に感じて、皆自ら振勵す。こゝに於て、景定三年に至り、蒙古主遂に意を決し、阿珠を以て征南都元帥となし、詔して曰く、さきに使を宋に遣し、以て和好を通ず。宋人遠圖を務めず、反つて邊釁を啓く。諸大臣皆南征を以て請となす。重んずるに、兩國生靈の故を以てし、猶ほ信使南より歸り、庶くは和議を成さむことを待つ。留めて至らざるもの、今又半載。彼かつて衣冠禮樂の國を以て自ら居る。理かくの如くなるべきかと。

劉整
景定二年、瀘州守劉整、叛いて蒙古に降る。これより先、遷驛の議を止むるものは、吳潛守城の力を盡すものは向士璧、斷橋の功を奏するものは曹世雄、劉整、而して似道功を妬み、士璧、世雄を譖し、皆貶死す。整すてに禍を懼る、而して、蜀帥鄭興復、宿憾を以て吏を遣し、瀘に至らしめ、軍前の錢糧を打算す。適ま北軍境を壓するや、遂に叛いて去る。

襄陽の桂
これより先、宋將呂文德、數ば蒙古の兵を敗り、瀘州を復し、又襄陽を守り、黒灰團と號す。劉整、世祖に謂つて曰く、南人唯だ呂文德を恃むのみ。然れども、利を以て誘ふべきなり。請ふ遣るに、玉帶を以て之に餽り、榷場を襄陽城外に置かむことを求

めむ。と、世祖之に従ひ、人をして鄂に至らしめ、文德に請ひ、文德之を許す。使曰く、南人信なし、願くは土城を築いて貨物を護せむ。と、文德許さず。使者復た至るや、爲に朝に請ひ、景定四年七月、榷場を樊城外に開き、土牆を鹿門山に築き、外は互市を通し、内は堡壁を築く。蒙古又堡を白鶴に築く。これに由つて、敵守るところあり。以て南北の勢を遏め、時に兵を出して、襄樊城外を哨掠し、兵威益す熾なり。文德の弟文煥、蒙古の賣るところとなりしを知り、書を以て諫止す。文德はじめて悟る。然れども、事すてに及ぶなく、惟だ自ら咎むるのみ。

賈似道の專横

その翌五年十月、理宗崩じ、太子祺即位す。是を慶宗となす。理宗在位四十一年、寶慶、紹元は史彌遠十年の政、端平の初元は善類朝に滿ち、眞德秀、魏了翁等、執政侍從人たり。以て慶曆、元祐に比す。嘉禧より以後、淳祐に至るまでは、史嵩之數年の政、嵩之すてに去り、淳祐より寶祐に至るまでは、正人邪を指して邪となし、邪人正を指して邪となし、互に消長をなして、狼狽す。開慶、丁大全の政、固より稱すべし。景定、改元、大全と吳潛と、人品同じからざれども、各竄を以て死し、賈似道、ひとり相とし、遂

に國政を執り、末年には、浸や君臣相猜むの跡あり、未だ更變に及ばずして崩す。帝賈似道が定策の功あるを以て、毎朝必ず答拜し、之を稱して、師臣というて名いはず。朝臣皆稱して、周公といひ、因つて、太師を加へ、魏國公に封ぜられ、次いて特に平章軍國重事を授けられ、一月三たび經筵に赴き、三日一たび朝して、事を都堂に治め、第を西湖の葛嶺に賜ひ、其中に迎養せしむ。似道、こゝに於て、五日一たび湖船に乗じて、入朝し、都堂に赴いて事を治めず、吏文書を抱き、第に就いて、呈署し、大小の朝政、一切館舎に決し、專横比なし。

襄陽の圍

蒙古の都元帥阿珠、さきに既に南下す。劉整、世祖に言つて曰く、襄陽は吾が故物、棄て、戍せざりしに由り、宋をして、竊かに築いて、疆藩たらしむ。若し之を復し、漢に浮ひて、江に入らば、宋は平ぐべきなり、と。世祖之に従ひ、詔して、諸路の兵を徵し、阿珠に命じ、整と襄陽を經略せしむ。阿珠、馬を虎頭山に駐め、漢東の白河口を顧みて曰く、若し壘を此に築き、以て宋の餉道を斷てば、襄陽圍るべきなり、と。遂に其地に城く。呂文煥、大に懼れ、人を遣し、蠟書を以て、文德に告ぐ。文德以て意となさず。その翌、咸淳四年に至り、劉整、阿珠に計つて曰く、我が精兵突騎、當るところのもの

破る。惟だ水戰、宋に如かさるのみ。彼の所長を奪ひ、戰艦を造り、水軍を習はぶ。事濟らむと、乃ち船五千艘を造り、日に水軍を練り、雨出づる能はずと雖も、亦た地に齎して船と爲し、之を習ひ、練卒七萬を得。その九月、遂に圍城を築いて、襄陽に逼る。その翌五年、蒙古諸路の兵を括し、以て襄陽の師を益し、史天澤と宗王大臣とを遣して、往いて、之を經畫せしむ。天澤の至るや、長圍を築き、萬山より起つて、百丈山を包み、南北をして、相通せざらしめ、又峴山、虎頭山に築いて、一字城と爲り、諸壘に聯互し、以て久駐必取の基を建つ。

宋軍の敗

蒙古の樊城を圍むや、京湖都統張世傑、之を拒いて、赤灘圃に敗績し、沿江制置副使夏貴、又阿珠を新城に襲うて敗れ、范文虎、舟師を以て貴を援けむとし、灌子灘に至りて、又敗れ、ひとり輕舟を以て遁る。呂文德、さきに蒙古に許して、樞場を置きしを以て、恨となし、毎に曰く、國家を誤りしものは我なり、と。因つて、疽背に發し、遂に死す。賈似道、范文虎その婿に當るを以て、殿前副都指揮使となし、禁兵を總べしむ。前參知政事江萬里、襄樊を以て憂となし、屢ば師を益して、往いて、救はむことを請へども、似道答へず。遂に力めて去るを求め、出で、福州に知たり。

似道、帝聽を
獻ふ

時に似道屢ば病と稱して、去らむことを求む。帝至り、涕泣之を留むれども従はず。詔して六月一たび朝し、一月兩たび經筵に赴かしめ、尋いて、又詔して入朝拜せず。朝退くや、帝必ず起つて席を避け、之を目送し、殿庭に出づるやはじめて坐す。繼いて、復た詔して、十日に一たび朝せしむ。襄樊圍急なり。似道日に萬嶺に坐し、樓閣亭榭を起し、半間堂を作り、羽流を延いて、己の像を其中に塑せしめ、宮人葉氏及び娼尼美色ある者を取つて妾となし、日に淫樂を肆にし、故の博徒と縱博す。人敢て其第を窺ふものなし。これより、或は累月朝せず。朝すと雖も、景靈宮に享すれば、亦た駕に従はず。邊事を言ふものあれば、輒ち貶斥を加ふ。一日帝問うて曰く、襄陽の圍すてに三年、奈何。似道云く、北兵すてに退く、陛下何より此言を得たる。帝曰く、女嬪あつて之を言ふと、似道その人を詰り、誣ゆるに他事を以てし、死を賜ふ。これに由つて、邊事日に急なりと雖も、敢て言ふものなし。似道、權人主を傾け、諛者動もすれば、周公成王を輔くるを以て之に擬し、親王外戚宦官近習、皆箝制せられて、敢て恣にせず。當世望士、亦た引用し、朝に登つて、儀羽となす。而して、服心在らず。外に在

るの監司郡守、亦た廉介を參用す。その人に非ずして、進むを得るもの、各蹊徑あり。最も客賞誅貨を以て、將帥の心を失す。劉整すてに北に還り、策を獻じて、東南を取るや、謂ふ、緩く取れば、經略して蜀より下らむ、急なれば、襄淮より直に進まむ。時に諸將北に降り、國の虛實を知るもの、相繼ぐ。似道方に太平を粉飾するを以て、事となし、略ぼ意を加へず。

咸淳六年十月、范文虎に詔して、中外の諸軍を總べ、襄陽を救はしむ。十一月、蒙古萬山に築き、その將張弘範の軍を徙し、襄樊の道絶ゆ。范文虎の至るや、漢水溢れしを以て、已むを得ず。衛卒及び兩淮の舟師十萬を將る、進んで、鹿門に至る。阿珠、江の東西を夾んで、陣を爲し、別に一軍をして會丹灘に趨かしめ、大に文虎の軍を敗り、其軍を俘にし、戰艦甲仗を獲る、勝げて計るべからず。

宋の咸淳七年十月、蒙古國を建て、大元と號す。詔して曰く、誕いて、景命を膺けて、四海を奄して、尊に宅する、必ず美名あり。百王に紹いて、統を紀するは、肇めて隆古よりし、ひとり我が家のみに匪ず。且つ唐の言たるや、蕩なり、堯之を以て著稱す。

元の國號

二城の聯絡

虞の言たるや、樂なり、舜之に因つて號と作す。禹興つて湯造す、夏は大にして以て殷は中なるを互名す。世降つて以て還事殊にして古に非ず、時に乘じて、國を有すと雖も、義を以て制を稱せず。秦となし、漢となすもの、蓋し初めて起るの地名に従ふ。隋といひ、唐といふもの、又始封の爵色に附く。これ皆百姓見聞の狂習に徇ひ、一時經制の權宜を要す。樂するに、至公を以てせば、少しく貶することなきを得むや。我が太祖聖武皇帝、乾符を握つて、朔土より起り、神武を以て、帝圖に膺り、四に大聲を振ひ、大に土宇を恢にし、輿圖の廣、歴古無きところ、頃日者宿廷に詣り、奏章伸請して謂ふ、すでに大業を成す、宜しく早く鴻名を定むべし、古制に在つて、以て當れりと。然れども朕が心に於て、何かあらむ、國號を建て、大元といふべし。蓋し易經乾元の義に取る、茲に大に治り、庶品に流形す、孰れか資好の功を名づけむ。予一人萬邦を專爲するを底す、尤も仁を體するの要を切にす。事、因草に従ひ、道人に協ふ。於戲、義に稱うて名づく、固より、之が爲に溢美なるに匪ず、予休して、惟れ永かれ、尙ほ艱に投ずるに負かず。敷天とともに、大號を隆にするを嘉す。咨爾有衆、予が至懷を體せよ、と。太保劉秉忠の議に従ふなり。

李庭芝、さきに京湖制置大使たり、又襄樊を救けむとし、鄂州に屯し、舟を襄陽西北の清泥河に造り、重賞を出して、死士を募り、三千人を得、張順、張貴を以て統制となし、七年五月、漢水方に生ずるに乗じ、夜、江に出て、風に乘じ、浪を破り、徑に重圍を犯し、元兵皆披靡し、黎明、襄陽城下に至る。城下踊躍、望に過ぎ、勇氣百倍す。然れども、張順戰没し、張貴は、驍勇を恃んで、鄂に歸らむとし、元兵之を知りて、遂に擒殺し、屍を昇して城下に至る。陣を守るもの皆哭し、城中氣を喪ひ、これより復た振はず。樊城圍まるゝこと、すでに四年、守將范天順、牛富力戰す。富又數ば書を襄陽城中に射り、呂文煥と期し、相與に固守して、唇齒を爲す。はじめ、襄樊兩城、漢水その間より出づ。文煥、木を江中に植ゑ、鎖すに鐵繩を以てし、上に浮橋を造り、以て援兵を通ず。樊亦た之を恃みて、固となす。九年正月、阿珠、機鋸を以て、木を斷ち、斧を以て、繩を斷し、其橋を燔く。襄兵援くる能はず、乃ち兵を以て江を截つて、銳師を出し、樊城に薄る。城遂に破る。天順、天を仰いて歎じて曰く、生きて宋臣となり、死して宋鬼とならむ、と。遂に縊死す。富又重傷を被り、頭を以て柱に觸れ、火に赴いて死す。樊城遂に元兵の掌中に落つ。

樊城陷る

襄陽陷る

襄陽久しく困み、援絶え、屋を撤して薪となし、鬪會を緝して、衣となす。呂文煥、一たび城を巡る毎に、南望慟哭して下り、數ば急を朝に告ぐ。賈似道、累りに上書して、邊に行かむことを請ひ、又陰に臺諫をして、上章して、己を留めしむ。樊城すてに陥るや、監察御史陳堅等、以爲へらく、帥臣出て、襄を顧れば、未だ必ずしも淮に及ぶ能はず、淮を顧みれば、未だ必ずしも襄に及ぶ能はず、中に居て、以て天下を運らすに若かずと、帝之に従ふ。これより先、阿爾哈雅の樊城を攻むるや、西域の人獻ずるところの新礮法を用ひ、遂に外廓を破りしが、その二月、之を移して、襄陽に向ひ、一礮その譙樓に中り、聲、震雷の如く、城中洶洶、諸將城を踰えて降るもの多し。阿爾哈雅、乃ち身城下に至り、元主の詔を宣へ、文煥に諭す。文煥狐疑未だ決せず、因つて、矢を折つて、之を誓ふ。文煥乃ち出て、降り、阿珠襄陽に入る。阿爾哈雅、遂に文煥とともに燕に朝す。元主、文煥を以て、襄漢大都督となす。事聞こゆ、似道帝に言つて曰く、臣はじめ屢ば行邊を請ふ、陛下之を許さず、さきに早く臣に聽いて、出てしむれば、當に此に至らざるべしと。

第四十六章 宋の滅亡 (下)

恭帝の即位

その翌十年七月、慶宗崩す、賈似道、宮に入つて議し、帝の次子嘉國、公島立つ、時に四歳、是を恭帝といふ。謝太后、朝に臨んで詔を稱す。

元軍の南侵

その八月、元主、賈似道盟に背き、使を拘するの罪を數め、史天澤、巴延に命じ、諸道の兵を總べ、阿珠、阿爾哈雅、呂文煥と荆湖に行省し、博囉干、安塔海、劉整達、春、董文炳、淮西に行院し、兵二十萬、元主之に諭して曰く、古しへの善く江南を取るものは、唯だ曹彬一人のみ、汝能く不殺ならば、是れ吾が曹彬なりと。天澤郢に至り、疾を以て還り、尋いで卒す。これより先、元主、醫を遣して、馳せて視せしむ。天澤附奏して曰く、臣大限終ることあらむ、死は惜むに足らず、たゞ願くは、天兵江を渡るとき、殺掠を以て戒となせと。言訖つて卒す。天澤、忠亮にして、大節あり、將相に出入すること五十年に近く、四朝に柱石として、百辟に師表たり。社稷の臣といふべし。その富貴權勢を視るや、跡を歛めて退避し、之に洩されむとするもの、如く、故に能く始を善くし、終を全くし、開國の元臣となる。こゝに於て、諸軍並に巴延の節制を聽く。巴延

巴延、江を渡

因つて大軍を分つて、兩道となし、自ら阿珠と襄陽より漢に入つて江を濟り、呂文煥を以て舟師を將ゐて前鋒たらしむ。博囉干は東道より淮東の兵を監し、劉整を以て騎兵を將ゐて先行せしむ。尋いで、巴延の一軍、自ら三道に分ち、索多は襄陽より司空山に哨し、翟招討は老鴉山より荆南を徇へ、而して、自ら阿珠とともに阿樓干、張弘範の諸軍を帥ゐて、水陸鄂に趨き、旌旗延袤、前後數百里。

巴延の鄂に薄るや、宋の張世傑、備を設けて力戰す。阿珠乃ち兵を潛まして、沙洋に至り、日暮礮を以て廬舎を焚いて、城を破り、守將王虎臣、王大用を生擒し、遂に新鄂に薄り、守將邊居誼自殺し、所部三千人盡く死す。巴延轉じて、江を渡り、陽邏堡を攻めて、之を拔き、夏貴師を棄て、走り、尋いで阿珠と會して、鄂州に趨く。權守張晏然等、守る能はず、遂に降る。巴延自ら大衆を率ゐ、阿珠と東下し、直に宋都臨安に趨かむとす。

宋、都督府を設く

こゝに於て、宋の朝廷、大に震ひ、三學生及び群臣、上疏して請ふこと切なり。賈似道、已むを得ず、はじめて都督府を臨安に開き、仍つて封樁庫に於て、金十萬兩、銀五

十萬兩、關子一千萬貫を撥して、その公用に充て、王侯の邸第皆輸して、軍の錢穀を助け、且つ釋道の租税を覈して、之を收め、以て用に備ふ。似道、呂師夔を以て參贊都督府事となす。師夔、命を受けず、江州を以て叛いて、元に降る。この時、元の劉整は無爲軍を攻め、久しく下らず、巴延が鄂に入るを聞き、憤を發して、城下に死せしが、知安慶府范文虎は、人を遣して、江州に如いて、元軍を迎へしめ、城を以て降る。

賈似道、劉整の死を聞いて、大に喜び、以て天助となし、上表して、師を出し、諸路の精兵十三萬を以て行き、金帛輜重の舟、舳艫相衝むこと二百里、行いて、蕪湖に次し、人を遣して、呂師夔に通じて、和を議し、又宋京を遣して、元軍に如き、臣と稱し、歲幣を奉ずること、開慶の約の如くせむことを請ふ。巴延答書して曰く、未だ江を渡らざりし時、和を議して、入貢すれば可なり、今沿江の州郡、皆内屬す、和せむと欲せば、來つて面議すべし、と、遂に許さず。

宋軍の大敗

すてにして、池州又陥り、權守張卯發夫妻、節に殉す。時に似道、精銳七萬人を以て、盡く孫虎臣に屬し、池州下流の丁家洲に軍し、夏貴戰艦千二百艘を以て、江中に横亘し、似道自ら後軍を將ゐて、魯港に軍す。巴延、巨礮を發して、虎臣の軍を撃ち、阿珠

舟を以て進む。虎臣の軍遂に亂れ、夏貴戰はずして走る。似道之を聞いて、錯愕措を失し、鉦を鳴して、軍を攻め、その亂るゝや、宋軍死傷勝へて計るべからず。水之が爲に赤し。似道、虎臣と單騎奔りて揚州に還る。こゝに於て、鎮江、寧國、隆興、江陰の守臣皆城を棄てゝ走り、太平和州無爲軍、ともに相繼いで元に降る。元軍、饒州、知州を略す。知州事唐震、節を守つて死す。故相江萬里、止水亭に在り、遂に水に赴いて死す。世、その忠烈を稱す。

賈似道の死

陳宜中はじめ賈似道に付き、驟かに政府に登るを得たり。似道の敗るゝや、宜中上疏して、似道を誅し、以て國を誤るの罪を正さむことを乞ふ。太皇太后曰く、似道三朝に勤勞す安んぞ、一朝の敗を以て、大臣を待つの禮を失ふに忍びむや。と。詔して、似道に醴泉觀使を授け、平章都督を罷め、その政次第に之を除き、公田を以て田主に給還し、その租戸を率ゐて、兵となさしめ、諸の鼠竊の人を放ち還す。後數月、三學生及び臺諫侍從、皆上疏して、之を誅せむことを請ひしにより、三官を降して、婺州に居住せしむ。其地の人、之を逐ひ、因つて建康府に徙る。翁合及び方應發、王應麟等、之を遠く荒昧に投じて、魍魎を禦がむことを乞ふ。許さず。陳景行、孫燦、叟等、又之

を斬らむことを乞ひ、因つて、循州に安置し、其家を籍せしむ。ずてにして、監揮官鄭虎臣、之を護して、漳州木綿菴に至るや、乃ち曰く、吾、天下の爲に似道を殺す。死すと雖も、何ぞ憾みむ。と。遂に其子と妾とを別館に拘へ、厠上に即いて、其胸を拉して、之を殺す。

勤王の師

これより先、勤王の詔出づるや、張世傑は、兵に將として、入衛し、遂に饒州を復し、江西提刑文天祥、又兵を起し、湖南提刑李常、兵を遣して、入つて援く。陳宜中、知樞密院事兼參知政事となる。

三月、元の巴延、遂に建康に入る。時に江東大疫、居民食に乏しきを以て、倉を開いて之に賑はし、且つ醫を遣して、疾を治めしめ、民大に悦ぶ。元主、時方に暑なるを以て、秋を俟つて再舉せしむ。巴延、上言して曰く、百年の逆敵、すてに其吭を扼す。少しく遅回すれば、奔つて海島に播して、後悔を遺さむ。と。元主之に従ひ、巴延をして、建康に駐せらしめ、阿珠は兵を分つて、揚州に駐まり、博囉干、達春と、宋の淮南の援を絶つ。

宋室の窮蹙

四月に至り、阿爾哈雅、岳州より江陵を侵し、朱禔孫高遠、城を以て降り、盡く荆南の州縣を取り、同時に、阿珠は眞揚州を侵し、李庭芝、守將苗再成、姜才を遣し、之を禦ぎしも、皆敗績す。すてにして、成都の安撫使萬壽は、嘉定諸城を以て、叛いて元に降り、張世傑は、夔に都督府諸軍を統べ、道を分つて、出て、援ぎ、七月舟師萬餘艘を以て、焦山に次し、必死の勢をなすや、元の阿珠、火矢を以て、之を焚き、因つて大に敗れ、宋の境域、日に蹙る。

巴延、功を以て右丞相となり、阿珠は、左丞相となり、巴延は直に臨安に趨き、阿珠は仍ほ淮南を攻め、阿爾哈雅は、湖南を取り、萬戶蘇都爾岱及び呂師夔、李恒等は、江西を取る。巴延又兵を分つて三道となし、十一月、遂に常州に克ち、其民を屠り、知州事姚嵩、通判陳炤、都統王安節、皆之に死す。その翌、德祐二年正月、阿爾哈雅は潭州を破り、湖南鎮撫大使知州事李常、之に死し、湖南の州軍、皆元の有となり、諸關の兵皆潰え、援兵臨安に至らず、宋室の亡、正に旦夕に迫まれり。

これより先、陳宜中、國に當るも、時の多難に遭うて、一策を措く能はず、惟だ蒙蔽を事とし、將士離心、郡邑降破す。因つて、工部侍郎柳岳を遣し、巴延を見て和を議せ

宋の和議

しむ。巴延曰く、汝の國、我が行人を執、殺す、故に我師を興す、錢氏士を納れ、李氏出て、降る、皆汝の國法なり、汝の國天下を小兒に得、亦た小兒に失ふ、天道かくの如し、尚ほ何ぞ多言せむと、次いで、宗正少卿陸秀夫、呂師孟を遣し、姪と稱して幣を納れ、ひことを求む。こゝに至りて、秀夫還り、巴延が伯姪の稱に従ふを肯んぜるを言ふ。太后命じて、臣禮を用ひしむ。陳宜中、之を難んず。太后涕泣して曰く、苟くも、社稷を存すれば、臣と稱するも較ぶるところに非ざるなりと。因つて、監察御史劉岳を遣し、表を奉じて、臣と稱し、尊號を上り、歲に銀絹二十五萬兩匹を貢し、境土を存し、以て、悉嘗を奉ぜむを請はしめ、且つ巴延に約し、長安鎮、海寧縣西北に會して、平を輸せしむ。この間、宜中計出づるところなく、宮に入つて、都を遷さむことを請ふ。太后許さず、宜中慟哭して請ひ、太后具裝以て俟つことを命ず。暮に及びて、宜中入らず。太后怒つて曰く、吾は、はじめ遷るを欲せず、而して、大臣數ば以て請をなす、願るに我を欺くかと。簪珥を脱して、地に投じ、遂に閣を閉ぢ、群臣見るを請へども、皆納れず。蓋し宜中、實は翌日を以て行かむとし、倉卒奏を失せしのみ。

元の巴延、長安鎮に至る。陳宜中、約に違ひ、往いて、事を議せず。巴延乃ち進んで、阜

宋、降を請ふ

亭山に次す。阿樓干董文炳の師皆會す。游騎臨安府の北關に至る。時に張世傑の軍五萬、諸路勒王の兵四十餘萬、文天祥、世傑と議して云ふ、兩軍堅く閩廣を守り、全城の王師血戦し、萬一捷を得ば、猶ほ爲すべきなり、と。世傑大に喜び、議して師を出さむとす。宜中許さず。太后に白し、監察御史楊應奎を遣し、傳國の璽を上り、以て降らしむ。巴延之を受け、使を遣し、宜中を召し、降事を議せしめ、又疊加特をして璽表を奉じて、上都に赴かしむ。應奎すてに行く。この夜、宜中遁れて温州の清澳に歸る。この時、張世傑、劉師勇等、降を欲せざるを以て、各所部を帥り、去つて海に入る。師勇、時事爲すべからざるを見、憂憤酒を糲にして卒す。

文天祥拘へらる

楊應奎の還るや、巴延、執政と面議せむと欲するを言ふ。陳宜中、すてに遁る。乃ち文天祥を以て、右丞相兼樞密使となし、吳堅と偕に往かしむ。天祥辭して拜せず。遂に行いて、巴延に説いて曰く、北朝もし宋を以て與國となさば、請ふ兵を平江或は嘉興に退け、然る後、歲幣を議し、金帛を與へて師を犒ひ、北朝兵を全うして還る。策の上なり。もし、その宗社を毀たむと欲せば、淮浙閩廣、尙ほ多く、未だ下らず、利鈍未だ知るべからず、兵連り禍結ぶは、必ず此より始まらむ、と。巴延聽かず、之を軍中に

拘ふ。

巴延、府庫を封ず

二王の逃奔

巴延制を承け、臨安を以て兩都督府となし、蒙固岱范文虎に命じて城に入つて都督府事を治めしめ、又程駟飛をして太皇太后の手詔及び三省樞密院の檄を取り、州郡に諭して、降附せしむ。巴延、進んで湖市に屯し、復た呂文煥及び范文虎等をして、太皇太后を慰諭せしめ、張惠、阿樓干、董文炳、張弘範、索多等をして、府庫を封じ、史館、禮寺、圖書及び百司符印告勅を封ぜしめ、官府及び侍衛軍を罷め、尋いて、復た宮女内侍及び諸樂官を求めしむ。宮女水に赴いて死するもの、百を以て數ふ。張世傑、さきに逃れて海に入り、次いで駟馬都尉楊鎮等、皇兄益王昱、皇弟廣王昀を奉じて、婺州に走り、楊淑妃、秀王與擇、亦た從つて行く。文天祥、巴延に拘へられ、因つて元使とともに北行せしが、鎮江より亡げて、真州に入り、遂に海に汎んで、温州に如き、二王を求む。この時、巴延、二王が浙江を渡つて南せしを聞き、范文虎を遣して、之を追はしむ。楊鎮駐まつて執へられ、楊亮節等、二王及び楊淑妃を負ひ、徒歩して、山中に遁る。こと七日、統制張全の兵數十を得、遂に温州に走る。宋の夏貴、淮西

宋主の北行

を以て降り、江南殆んど平らく。

宋の帝焜徳祐二年三月、巴延湖州の市より城に入り、大將の旗鼓を建て、左右翼萬戸を率ゐて城を巡り、潮を浙江に觀、又獅子峰に登り、臨安の形勢を觀、諸將を部分す。太皇太后及び帝、與に相見むと欲す、巴延固辭し、明日臨安を發す。安塔海等、宮に入りて、元主の詔を宣べ、羊を牽いて頸に繫ぐの禮を免じ、帝及び太后を趣して入觀せしむ。太后泣いて帝に謂つて曰く、天子の聖慈を荷うて活く、汝宜しく拜謝すべし、と。禮畢るや、帝、太后と肩輿宮を出て、太皇太后は疾を以て内に留まり、芮及び沂王乃猷、度宗の母隆國夫人黃氏並に楊鎮、謝堂、高應松、庶僚劉褒然、三學生等皆行く。瓜州に至るや、李庭芝、その將をして之を裂はしめしが克たず、眞州を過ぐる時、苗再成、駕を奪はむと欲せしも成らず。宋主上都に赴き、元主に大安殿に見え、瀛國公に封ぜらる。

第四十七章 厓山の戦と宋の遺臣

益王の即位

宋は、帝焜の北行に亡びしと雖も、その遺骸なほ存せり。陸秀夫、蘇劉義等、二王温

州に走りしを聞き、相繼いで、道に追ひ及て、人を遣して、陳宜中を清澳に召し、張世傑を定海に召す。世傑、所部の兵を以て、温の江心寺に来る。舊と高宗南奔の時の御座あり、衆相率ゐて座下に哭し、益王是を奉じて郡元帥となし、廣王昀之に副たり。兵を發し、吏を除し、秀王與擇を以て、福建察防使となし、先づ閩中に入つて、吏民を撫し、同姓を諭し、檄して諸路の忠義を召して、同じく興復を謀り、兵勢稍や振ふす。てにして、宋主北行の報あるや、宜中等、相謀りて、ともに益王を立て、景炎を改元し、度宗の淑妃楊氏を尊んで、皇太妃となし、同じく、政事を聽かしめ、遙に宋主に尊號を上つて、孝恭懿聖皇帝となし、又謝太后、全太后に尊號を上り、廣王昀を進封して、衛王となし、福州を升ぼして、福安府となし、大都督府を以て、垂拱殿となす。こゝに於て、陳宜中、左丞相兼樞密使となり、諸路の軍馬を都督し、陳文龍、劉黻、參知事となり、張世傑、樞密副使となり、陸秀夫、簽書樞密院事となる。然れども、之に久うして、秀夫、宜中と合はず、潮州に謫居す。文天祥、福州より至り、右丞相兼樞密使に拜せしも、國事皆宜中に決するを以て拜せず。乃ち樞密使同都督となり、呂武をして、蒙傑を江淮に招き、杜澥をして、兵を温州に募らしめ、次いで、府を南劍府に開き、江淮を經

略し、兵を率ゐて來り會するもの多く、その軍稍や盛なり。

すてにして、元師益す服せざるものを伐ち、索多は衢州に克ちて宣撫大使留夢炎を下し、阿爾哈雅は將を遣して、廣州に克ち、揚州守將朱煥、泰州裨將孫貴等、城を以て降り、李庭芝、姜才之に死して、淮東盡く平らぎ、阿樓干、達春は命を受けて、閩廣に入らむとし、十一月、その兵、建寧府に至る。こゝに於て、陳宜中、張世傑、海舟を備へ、その主星及び衛王、楊太妃等を奉じて、舟に登る。時に軍十七萬人、民兵三十萬人、淮兵萬人、北舟と相遇ひしが、天霧に值うて、晦冥辨せず、因つて進むを得たり。御舟泉州に泊す、招撫使蒲壽庚、元に降りしを以て、宜中等乃ち是を奉じて、潮州に之を尋いて、惠州の甲子門に泊す。

宋主、惠州に走る

文天祥、漳州に移屯せし、仍つて入衛せむことを謀りしも、道塞いて通せず、江廣の間に來往して、屢ば元兵と戦ひ、すてにして、梅州を復し、復た會昌縣を取り、景炎二年六月、雩都に入り、吉贛諸郡を取り、遂に贛州を圍む、張世傑、又兵を將ゐて、潮州に入り、蒲壽庚を泉州に攻め、遂に復た邵武郡を取る。すてにして、元の江西宣慰使李恒兵を遣して、贛を救ひ、天祥を興國縣に襲ひ、天祥兵潰えて、循州に走り、その將

文天祥、興國縣に敗る

鞏信、趙時賞等、之に死す。

九月、宋主潮州の淺灣に次す、張世傑、兵を出して、復た泉州を攻めしも、利あらず、元將劉深、來り襲ふや、秀山に入り、遂に井澳に至る、會々颶風、舟を壞ち、水に溺れて、幾んど救はず、宋主遂に驚疾を得、疾むこと旬餘、劉深、復た來り侵すや、宋主遂に海に入り、謝女峽に奔り、占城に往かむとす、陳宜中、請うて先づ往き、意を諭さむとし、事の爲すべからざるを度りて、遂に還らず、すてにして、宋主碭州に遷る。

衛王の即位

景炎三年五月、宋の益王昀、年十一、後諡して端宗といふ、これより先、陸秀夫の諷せらるゝや、張世傑、陳宜中を讓めて曰く、これ如何なる時ぞ、動もすれば、臺諫を以て、人を論ず、と、宜中惶恐し、亟かに秀夫を召して還らしむ、時に宋、海濱に播越し、庶事疏略、楊太妃、簾を垂れて、群臣と語るや、猶ほ自ら奴と稱す、每時朝會、ひとり秀夫儼然笏を正して立つこと、治朝の如し、或時行中に在りて、凄然涙下り、朝衣を以て之を拭ひ、衣盡く濕ふ、左右悲慟せざるものなし、こゝに至りて、群臣多く散じ去らむと欲す、秀夫曰く、度宗皇帝の一子、猶ほ在り、將に焉に之を置かむと欲する。

古人一旅一戍を以て中興をなすものあり、今百官有司皆具し、士卒數萬、天もし未だ宋を絶つを欲せざれば、これ豈に國を爲すべからざらむやと、乃ち衆とともに衛王闕を立つ、年八歳時に黃龍あり、海中に見はる、因つて祥興と改元し、礪州を升ぼして翔龍縣となし、楊太妃仍ほ同じく政を聽く、陳宜中の占城に入るや、宋人日に其還るを候し、而して、宜中竟に至らず、時に世傑、兵を厓山に駐め、秀夫ひとり、在り、外は軍旅を籌し、内は工役を整へ、凡そ述作するところあれば、又盡く其手に出で、忽遽流離の中と雖も、なほ日に大學章句を書して勸講す。

宋主、厓山に徙る

張世傑、兵を出して、雷州を攻めしが、克たず、時に宋軍次するところ雷化、犬牙の處に居る、世傑地を相するに新會の崖山(廣州府新會縣南)に若くはなし、その地、鉅海中に在り、奇石山と相對立して、兩扉の如く、潮汐の出入するところなり、故に鎮成あり、世傑以爲へらく、天險扼して自ら固うすべしと、六月其主を奉じて、移り駐まり、人を遣し、山に入り、木を伐つて、行宮、軍屋千餘間を造らしめ、行宮の正殿を慈元といひ、楊太妃之に居る、廣州を升ぼして、祥興府となす、時に官兵二十萬、多く舟に居り、資糧は辨を廣右の譚軍に取り、海外四州、復た人匹を刷し、舟楫を造り、器仗

を製し、十月に至り、始めて罷む。

張弘範、元主に奏して言ふ、張世傑、復た衛王を立て、閩廣響應す、宜しく進んで之を取るべしと、元主、弘範を以て蒙古漢軍都元帥となし、寶劍を賜うて、軍事を專決せしむ、弘範、李恒を薦めて、自ら副とし、揚州に至るや、將校を選び、水陸の兵二萬を發し、道を分つて南す、七月、宋の湖南制置使張烈良等、兵を起して、厓山に應ぜしが、阿爾哈雅と戰つて敗死し、海南州縣、盡く平らぐ。

文天祥、執らへらる

文天祥の循州に走るや、兵を收めて麗江浦に出で、衛王の即位を聞き、表を上つて自ら劾し、入朝を乞へども許さず、少保信國公を加へ、張世傑、越國公となる、會ま天祥の軍中大疫、その母及び長子死し、家屬皆盡く、天祥なほ潮陽に屯し、劇盜陳懿、劉興を敗る、張弘範、その地に入るや、海豐に走り、五坡嶺に及び、遂に執へらる、天祥腦子を呑めども死せず、その將鄒淵は自到し、劉子俊は自ら詭つて、天祥と稱し、眞偽を争つて烹らる、弘範、天祥の屈せざるを見、其縛を釋き、客を以て之を禮す、天祥固く死を請へども許さず、舟中に處らしめ、族屬俘にされしものを求めて、悉く之を還す。

厓山の戦

その翌、宋の祥興二年正月、元の張弘範、潮陽港より舟に乗じて甲子門に至り、斥候の將を獲て、衛王婿の在るところを知り、乃ち厓山に至る。或は張世傑に謂つて曰く、北兵舟師を以て海口を塞いて、戦へば、進退する能はず、盍ぞ先づ之に據らざる。幸にして勝てば、國の福なり。勝たざるも、猶ほ西走すべし。と。世傑久しく海中に在り、士卒離心、動けば必ず散ぜむことを恐れ、乃ち曰く、頻年海を航し、何の時已まひか、今須らく雌雄を決すべし。と。遂に行宮草市を焚き、大船千餘を結びて一字の陣をなし、海中に碇し、艦を中にし、舳を外にし、貫くに、大索を以てし、四周樓棚を起すこと、城堞の如く、衛王を奉じて、其間に居り、死計をなす。人皆之を危ぶむ。厓山北は淺く、舟膠して進むべからず。弘範山東より轉じ、南して大洋に入り、世傑の師と相遇ひ、之に薄り、且つ騎兵を出して、その海路を絶つ。世傑の舟、堅くして動かす能はず。弘範乃ち舟に茅茨を載せ、沃ぐに、膏脂を以てし、風に乘じ、火を縱つて之を焚く。世傑の戰艦、皆泥を塗り、長木を縛して、火を拒ぎ、舟蕪せず。弘範之を如何ともするなし。世傑の甥韓元軍に在り、弘範之をして世傑を招かしめ、世傑從はずして曰

く、吾降れば生きて且つ富貴なるを知る、但だ義移るべからず。と。因つて、古しへの忠臣を歴敷して、之に答ふ。弘範乃ち文天祥に命じ、書を作りて、世傑を招かしむ。天祥曰く、吾、父母を扞ぐ能はず、乃ち父母に叛くを教ふる、可ならむや。と。固く之に命ず。天祥遂に零丁洋を過ぐる詩を書して、之に與ふ。その末に云ふあり、人生自古誰無死、留取丹心照汗青。と。弘範笑つて、之を置く。弘範復た人を遣して、厓山の士民に諭さしめて曰く、汝の陳丞相すてに去り、文丞相すてに執へらる。汝復た何をか爲さむと欲すと。士民亦た叛くものなし。

弘範乃ち復た舟師を以て海口に據る。世傑の兵士、乾糧を茹ふこと十餘日、下つて海水を掬して之を飲む。水鹹にして、飲めば即ち瀉泄す。兵士大に困しむ。世傑なほ屈せず。蘇劉義、方興等を帥ゐて、且夕大に戦ふ。すてにして、李恒廣州より師を以て來會するや、弘範命じて厓山の北を守らしむ。

宋元の師、相持する、殆んど一月。二月に及び、世傑の部將陳寶、叛いて元に降る。都統張達、夜に乗じて、弘範を襲ひ、敗れて還る。その六日、弘範乃ち其軍を四分し、自ら一軍を將ゐ、相去ること里許、諸將に令して曰く、宋の舟、西厓山に艤す。潮至れば、必

宋の滅亡

ず東に通れむ、急に之を攻め、吾が軍樂の作るを聞けば、乃ち戦へ、令に違ふものは斬らむ、と。時に黒氣山西より出づ。李恒、早潮の退くに乘じ、其北を攻む。張世傑、淮兵を以て殊死して戦ひ、午潮上るに至り、軍中樂作る。世傑以て懈れりとなし、備を設けず。弘範舟を以て其南を攻む。世傑南北に敵を受け、兵士皆疲れて復た戦ふこと能はず。俄にして、一舟あり、幡旗倒る。諸舟の櫓皆倒る。世傑事の去るを知り、乃ち精兵を抽いて、中軍に入り、諸軍皆潰ゆ。翟德秀、凌震等皆甲を解いて降る。弘範兵を磨き、進んで中軍に薄る。會ま日暮風雨、昏霧四塞、咫尺相辨せず。世傑乃ち蘇劉義と維を斷ち、十六舟を以て、港を奪つて去る。陸秀夫、その主將の居るところの舟に走る。舟稍や大、且つ諸舟環結す。出て走るべからざるを度り、乃ち先づその妻子を驅つて海に入らしめ、その主に謂つて曰く、國事こゝに至る、陛下當に國の爲に死すべし。德祐皇帝辱すてに甚し、陛下再び辱しめらるべからず、と。乃ち其主を負うて同じく溺る。後宮諸臣従つて死するもの、甚だ衆し。餘舟尙ほ八百、盡く弘範の得るところとなる。越えて七日、屍海上に浮ぶもの十餘萬人、因つて、屍及び詔書の寶を得たり。世傑行々兵を收め、楊太妃に遇ひ、奉じて、以て趙氏の後を求めむと欲す。

楊太妃はじめて、屍が海の間、に溺れしを知り、膺を撫して、慟哭して曰く、我が死を忍び、間關してこゝに至るものは、正に趙氏一塊肉の爲のみ、今望なし、と。遂に海に赴いて死す。世傑之を海濱に葬る。すてにして、世傑占城に趨く、土豪之を強ひて、廣東に還らしむ。乃ち舟を回して、南恩の海陵山に艦し、散潰や、集り、廣に入らむことを謀る。颶風大に作る。將士、世傑に勸めて、岸に登らしむ。世傑曰く、以て爲すなきなり、と。柁樓に登り、香を焚いて、祝して曰く、我が趙氏の爲にするもの亦た已に至れり、一君亡べば復た一君を立て、今復た亡ぶ、我が未だ死せざりしもの、庶幾くは、敵兵退き、別に趙氏を立て、以て、祀を存せむとせしのみ、今此の如し、豈に天意なるか、と。風濤愈よ甚しく、世傑遂に水に墮ちて死す。蘇劉義、海洋に出て、其下の殺すところとなる。宋全く亡ぶ。

宋の故臣、往々にして嶺海より、安南に走り、其國に駐まるものあり。はじめ邵雍、客と語つて、國祚に及ぶや、晋の出帝紀を出して、之に示し、靖康の驗あり、德祐に及びて、益す驗あり。陳搏亦た嘗て、一汴二杭三閩四廣の説あり、宋果して閩廣に至りて盡く。宋は太祖の建隆より、欽宗の靖康に至るまで、一百六十七年、高宗の建炎よ

り、帝昺の祥興に至るまで、又一百五十三年、合せて五百三十年。その末路、幼主國に殉す。史臣曰く、宋は武を用ふるに起ると雖も、而かも、仁を以て家に傳ふ。然れども、仁の弊、弱に失す。中世自ら墮うし以て、其弊を革めむと欲せしも、用その方に乖き、禁擾を馴致し、建炎而後、土宇分裂、猶ほ能く六主百五十年にして亡ぶ。豈に禮義以て君子の志を維持するに足るに非ざるか。而して、宋の遺臣、區々として、二王を奉じ、海上の謀をなし、亡に救ふなしと雖も、然かも、人臣事ふるところに忠にして、斯に至る、其れ亦た悲むべきなり。と、陸秀夫、張世傑、文天祥の輩、大節に臨んで奪ふべからず、その心、亦た苦なりといふべし。

文天祥の死

厓山の破るゝや、張弘範等、酒を置いて大に會し、文天祥に謂つて曰く、國亡び、丞相忠孝盡く、能く心を改め、宋に事へしを以て、元に事へば、宰相たるを失はざらむとすと。天祥泣然として曰く、國亡びて救ふ能はず、人臣たるもの、死して餘罪あり。と、弘範爲に客を改め、使を遣し、護送して、燕に赴き、道、吉州を経るや、痛恨し、即ち絶えて食はず、意、その郷廬陵に至り、瞑目するを得、首丘の義を失はざらむを擬す。八

日に至りて、猶ほ生く、乃ち復た飲食す。すでに燕都に至るや、館人供張甚だ盛なり。天祥寢處せず、坐して旦に達す。遂に兵馬司に移し、卒を設けて、之を守る。元の丞相博囉等、天祥を見る。天祥入つて、長揖す。之を跪かしめむと欲す。天祥曰く、南の揖、北の跪、予は南人、南禮を行ふ。跪を贅すべし。と、博囉、左右を叱して、之を地に曳き、或は頂を抑へ、或は其背を扼す。天祥屈せず、首を仰いて之と抗言す。博囉曰く、古しへより、宗廟土地を以て人に與へて、復た逃るゝものあるか。天祥曰く、國を奉じて、人に與ふる、是れ賣國の臣なり。國を賣るものは、利するところあつて之を爲し、必ず去らず、去るものは、必ず國を賣るものに非ざるなり。予、さきに、宰相に除せられしも、拜せず、使を軍前に奉じ、尋いて拘執せらる。すでにして、賊臣あり、國を獻じ、國亡ぶ。死すべくして死せざりし所以のものは、度宗の二子、浙東に在り、老母廣に在るを以ての故のみ。博囉曰く、徳祐の嗣君を棄て、二王を立つるは、忠か。天祥曰く、この時に當り、社稷を重しとなし、君を輕しとなす。吾、別に君を立つるは、宗廟社稷の爲めに計るなり。懷愍に従つて北するは、忠に非ず。元帝に従ふを忠となす。徽欽に従つて北するものは、忠に非ず。高宗に従ふを忠となす。博囉語塞る。忽にして曰

く、晋の元帝宋の高宗、皆命を受くるところあり、二王正を以てせず、是れ篡なり。天祥曰く、景炎は乃ち度宗の長子、徳祐の親兄、尚ほ正ならずといふべしや、徳祐去位の後に登極す、篡といふべからず、陳丞相、太皇の命を以て、二王を奉じて、宮を出づ、命を受くるところなしといふべからず、と。博囉等、皆辭なく、但だ命なきを以て、解となす。天祥曰く、傳受の命なしと雖も、推戴擁立、亦た何ぞ不可ならむ。博囉怒つて曰く、爾二王を立て、竟に何の功を爲せる。天祥曰く、君を立て、宗社を存す、一日を存すれば、臣子一日の責を盡す、何の功か之あらむといはむ。博囉曰く、すてにその不可なるを知れば、何ぞ必ずしも爲さむ。天祥曰く、父母疾あり、爲すべからずと雖も、藥を下さざるの理なし、吾が心を盡し、救ふべからざるは、天命なり。今日天祥こゝに至つて死あるのみ、何ぞ必ずしも多言せむ。と。博囉之を殺さむと欲す。元主及び大臣、可かず。張弘範時に疾中に在り、亦た表奏して、殺すなからむことを請ひ、乃ち之を囚ふ。天祥一小樓に坐臥し、足地を履まず、正氣歌を作り、以て己の志を述べ。後二年を経、至元十九年に至り、閩僧言ふ、土星帝座を犯す、疑ふらくは變あらむと。未だ幾ならずして、中山に狂人あり、自ら宋主と稱し、衆千人あり、丞相を取らむ

と欲す、といふ。京城亦た匿名の書あり、言ふ、某日、篋城の葦を焼き、兩翼の兵を率ゐて、亂を爲さむ。丞相愛ふるものなかるべし、と。朝廷之を疑ひ、遂に篋城の葦を撤し、瀛國公及び宋の宗室を上都に遷す。丞相の天祥たるを疑ふや、元主自ら天祥を召して入れ、之を諭す。天祥曰く、天祥宋の宰相たり、安んぞ二臣に事へむ。願くは、之に一死を賜らば足らむ、と。帝猶ほ未だ忍びず。左右力めて其請を贊從す。遂に詔して、之を都城の柴市に殺す。天祥刑に臨み、殊に従容として、吏卒に謂つて曰く、吾が事畢ると。南向再拜して死す。その衣帶中に贊あり、曰く、孔曰成仁、孟曰取義、惟其義盡、所以仁至、讀聖賢書、所學何事、而今而後、庶幾無愧、と。その妻歐陽氏、其屍を收む、面生くるが如し。天祥すでに死す。帝、朝に臨んで歎じて曰く、天祥好男子、吾が用を爲すを肯んぜず、之を殺す、誠に惜むべきなり、と。乃ち廬陵郡公を贈り、忠武と諡す。南北の人、聞くもの、皆爲に流涕す。翰林學士王磐、詩を以て、之を哭して曰く、大元不殺文丞相、君義臣忠、兩得之、義似漢王封齒日、忠如蜀將斬顏時、精忠貫日、華夷見、氣節凌霜、天地知、却恐史書編不到、老夫和淚寫新詩、と。義士張毅甫といふものあり、天祥の骸骨を負うて吉州に歸葬す。會々林某亦た惠州より、天祥母夫人の柩を舁し、同日に

して至る、人以て忠孝の感ずるところとなす。

謝枋得

宋の江西招諭使知信州謝枋得、亦た數ば義兵を起して敗れ、遂に閩中に居る。宋すてに亡び、至元の末、元主その臣程文海を遣し、江南の人才を訪求するや、文海、宋の遺士三十餘人を薦め、枋得を以て首となす。枋得、時方に母の喪に居り、書を以て之を辭す。行省丞相忙兀台降相留夢炎等、力めて薦むるも、亦た然り。卒に行かず。福建參知事魏天祐、又枋得を薦めて、功と爲さむと欲し、その友をして、來つて言はしむ。枋得之を罵る。天祐乃を誘ひ召して城に入れ、之を言ふ。枋得又傲岸、坐して對へず、或は慢言無禮、天祐怒つて之に逼り、北行せしむ。嘉興を離れてより、即ち食はず、箚中に臥眠して去る二十餘日、死せず、乃ち復た食ひ、すてに采石を渡るや、惟だ少蔬菓を茹ひ、數月を積んで、困殆す。燕に至るに及び、太後の掖所及び瀛國公の所在を問ひ、再拜慟哭す。疾甚しく、憫忠寺に遷るや、壁間曹娥の碑を見て、泣いて曰く、少女子なほ爾り、吾豈に汝に若かさらむや、と。留夢炎、醫をして藥を持し、米飯に雜へて、之を進めしむ。枋得怒つて曰く、吾死せむと欲す、汝乃ち我を生かさむと欲する

劉因

か、と。之を地に擲ち、五日にして死す。子定文、骸骨を護して、信州に歸葬す。定文、亦た賢、累りに薦めらるれども起たず。又劉因といふものあり、學を以て名あり、徵して右贊善大夫となせしが、繼いて母の老を以て辭して歸り、俸給一も受くるところなし、亦た前朝の遺民を以て、戎虜異類に汚染さるゝを肯んぜざるが爲といふ。

宋は開國の初より常に契丹を以て至憂となし、徽宗その衰を幸とし、金を助け、て之を滅し、而して金の憂ふべき、更に大なるを思はず。すてに金と壤を接するに及び、はじめて強敵を招くを悔ひ、自ら爭鬪を啓き、以て禍變を速にし、その後、臣と稱し、姪と稱し、屈辱を受くること、殆んど百年、宋の君臣、唯だ世讎の必ず報すべきを念うて、後事を慮るに暇あらず、且つ蒙古の實力の如き、未だ詳悉せざるところ、こゝに於て、理宗、蒙古を助けて金を滅し、快を一時に取り、すてにして、輕舉盟を破り、怒を強鄰に挑み、正に徽宗の失計、前後全く同一轍に出づ。然れども、太祖もと忠厚を以て國を建て重ぬるに、仁宗の恭儉、民を愛するを以てし、自餘の諸帝、亦た殺を嗜むものなく、后妃の賢に至りては、尤も漢唐諸朝の及ばざるところなり。是を